令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

最新の研究成果に見る宮古の歴史 No. 5

-文化講座資料集・記録集-

2021（令和３年）年３月
宮古島市教育委員会

令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

最新の研究成果に見る宮古の歴史 No. 5

-文化講座資料集・記録集-

2021（令和３年）年３月
宮古島市教育委員会

例　言

1．本書は、令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業（国庫補助）で実施した文化講座のレジュメ、展示パンフレット、講座風景写真、ポスター、新聞掲載記事などの資料を取りまとめた資料集・記録集である。

2．本事業は、宮古島市教育委員会生涯学習振興課（文化財係）が主催した。

3．本事業における、文化講座等の実施は以下のとおりである

（1）第１回　下地・伊良部地区の戦争遺跡

①関連展示

期　間：令和２年７月２日（木）～７月 16 日（木）

場　所：宮古島市役所平良庁舎　１階ロビー

②文化講座

「近年における戦争遺跡を取り巻く状況について」山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）

「下地・伊良部地区の戦争遺跡について」久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

日　時：令和２年７月 11 日（土）　午後２時～４時

場　所：未来創造センター・研修室

参加者：31 名

（2）第２回　海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～

①関連展示１

期　間：令和２年８月６日（木）～８月 14 日（金）

場　所：宮古島市役所平良庁舎　1階ロビー

②関連展示２

期　間：令和２年 10 月２日（月）～ 10 月 16 日（金）

場　所：宮古島市役所城辺庁舎　２階会議室１・２

③文化講座

講　師：片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）

日　時：令和２年 10 月 18 日（日）　午前 10 時～午後３時

場　所：宮古島市役所城辺庁舎　２階会議室１・２

参加者：20 名

吉野海岸沖海底遺跡の巡検は、天候不良のために中止。

＊新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言により当初の下記の予定は中止となった

文化講座①　「海の遺跡から見る古代ギリシャとローマ～地中海の水中文化遺産～」

講　師：中西裕見子（大阪府庁教育委員会）

日　時：８月 20 日（木）　午後６時半～午後８時

場　所：働く女性の家ゆいみなぁ・多目的ホール

文化講座②　「西欧列強の沈没船と宮古島－ＨＭＳ・プロビデンス号の調査－」

講　師：片桐千亜紀(沖縄県立埋蔵文化財センター)
日　時：８月 21 日(金)　午後６時半～午後８時
場　所：働く女性の家ゆいみなぁ・多目的ホール

（３）第３回　歴史史料にみる吉野海岸沖海底遺跡
①文化講座
「歴史史料にみる吉野海岸沖海底遺跡」平良勝保(宮古島市史編さん委員)
「吉野海岸沖海底遺跡のリーフ内調査等について」久貝弥嗣(宮古島市教育委員会)
日　時：令和２年 11 月 28 日(土)　午後１時～３時
場　所：未来創造センター・研修室
参加者：18 名

（４）第４回　発掘調査報告－ティラフグ遺跡・保里遺跡・西中共同製糖場跡－
①関連展示
期　間：令和３年１月 19 日(火)～１月 29 日(金)
＊新型コロナウイルスの感染拡大に伴う県の緊急事態宣言により 26 日で閉展。
場　所：未来創造センター・図書館ブラウジングコーナー
②文化講座
「ティラフグ遺跡・保里遺跡発掘調査報告」久貝弥嗣(宮古島市教育委員会)
「旧西中共同製糖場跡発掘調査報告」久貝春陽(宮古島市教育委員会)
日　時：令和３年１月 24 日(日)　午後２時～午後４時
場　所：未来創造センター・研修室
参加者：21 名

（５）第５回　宮古島の歴史のはじまりを探る－ツヅピスキアブ遺跡の発掘から何が分かったか－
①文化講座
「宮古島の歴史のはじまりを探る－ツヅピスキアブ遺跡の発掘から何が分かったか－」
講　師：藤田祐樹(国立科学博物館)
日　時：令和３年３月６日(土)午後２時～４時半
場　所：未来創造センター・多目的ホール、ツヅピスキアブ
参加者：22 名
＊当初は、令和３年２月 13 日(土)の開催を予定していたが、沖縄県独自の緊急事態宣言により延期とした。

４．事業の実施にあたっては、新型コロナウイルス感染拡大の対策として、沖縄県及び宮古島市のガイドラインに　そって講座等を実施した。沖縄県内における緊急事態宣言の期間については以下のとおりである。

・新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言：４月 16 日～５月 25 日
・沖縄県緊急事態宣言：令和２年８月１ 日～８月 15 日
・沖縄県緊急事態宣言：令和３年１月19日～２月 28 日

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

目　次

例言

第１回　下地・伊良部地区の戦争遺跡・・・

嘉手苅一地の壕　カマドと煙突

下地島西海岸の壕群　斜路の壕口

令和２年度 地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業

第１回 文化講座

下地・伊良部地区の戦争遺跡

宮古島教市育委員会では、平成30年度から令和元年度に、下地地区・伊良部地区の戦争遺跡について分布調査を実施しました。分布調査の結果、下地地区については14、伊良部地区については19の戦争遺跡が確認されており、令和元年度に報告書を刊行いたしました。

本文化講座は、この分布調査の結果について報告を行うとともに、沖縄県内の戦争遺跡の中における宮古島市の戦争遺跡の特徴について報告を行います。

第１回文化講座

「下地・伊良部地区の戦争遺跡」

※講座参加の際は、マスクの着用をお願いします。
※当日、体調不良の場合は出席を見合わせて下さい。
※参加のお申込みは　文化財資料室（下記）まで

日程：2020 年 7 月 11 日（土）
時間：14 時～16 時
場所：未来創造センター　研修棟
講師：山本 正昭（沖縄県立博物館・美術館）
久貝 弥嗣（宮古島市教育委員会）

【関連展示】《入場無料》
令和２年度 地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業
「下地・伊良部の戦争遺跡」パネル展

会期：2020 年 7 月 2 日（木）～ 16 日（木）
場所：宮古島市役所平良庁舎１階ロビー

主催：宮古島市教育委員会　お申込み・お問い合わせ：生涯学習振興課 文化財資料室　0980-77-8336

200711

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第１回文化講座資料

於：宮古島市未来創造センター

近年における戦争遺跡を取り巻く状況について

―主に沖縄本島を中心に―

沖縄県立博物館・美術館

主任学芸員　山本　正昭

１．はじめに

今回の報告では主に沖縄本島で確認される戦争遺跡の特徴について紹介していき、そして近年における戦争遺跡を取り巻いている状況について触れていくものである。

宮古島市では市教育委員会が主体となって戦争遺跡の分布調査や確認調査、更には発掘調査が数例、実施されているが、戦争遺跡が調査の対象になっている自治体は多いとは決して言えない。南風原町が 1990 年に町指定文化財として「南風原陸軍病院豪壕群」が登録されて以降、本格的な発掘調査が沖縄県内で実施されるようになったとは言え、現在でも未調査のまま近年の開発等により姿を消す戦争遺跡は存在している。他方で戦争遺跡が市町村指定文化財となっている事例も増加していることから、全く戦争遺跡の保存、活用が図られていないわけでもない。現在において沖縄県内における戦争遺跡の周辺状況について、沖縄本島を中心にして見ていきたい。

２．1980 年代から始める戦争遺跡の調査と保全

戦争遺跡が「遺跡」として認識されたのは 1984 年の當眞嗣一による戦争遺跡の提唱からである。當眞は「第２次世界大戦末期の沖縄戦関係の遺品や遺留品などを資料として住民を巻き込んだ沖縄戦の実相を考古学的手法で調査研究する分野」として戦争遺跡を考古学分野の中での位置づけを明確に示した。また、先述したように南風原町が「南風原陸軍病院豪群」を町指定文化財したことから、当該戦跡の発掘調査が琉球大学考古学研究室によって 1992 年に実施されるようになった。戦争遺跡が沖縄県内で発掘調査の対象となった初めての事例であり、全国的に俯瞰しても当時ではあまり前例が見られなかった画期的な調査であった。この調査成果を踏まえて 1996 年には『南風原陸軍病院壕の保存・活用』が答申され、更なる確認調査、試掘調査、公開のための整備が実施され、2007 年には当該壕群のうち第 20 号壕の公開に至っている。

また、文化庁は 1996 年に『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』の改訂が行われ、「史跡」の項目に「戦跡その他戦争に関する史跡」が付け加えられることとなった。戦争遺跡が文化財指定の対象となったことを意味しており、地方自治体による戦争遺跡の分布調査が実施されていくこととなる。沖縄県では 2000 年から 2006 年にかけて分布調査を、2010 年から 2015 年にかけて確認調査を実施している。

このような行政の動きとは別に戦争遺跡の定義付けが行われている。2002 年に刊行された十菱駿武、菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』では「近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害。反戦抵抗にかかわって、国内外で形成された、かつ現在残された構造物や跡地」として戦争遺跡としての概念規定を行っている。また、戦争遺跡の種

類を①政治･行政関係､②軍事･防衛関係、③生産関係、④戦闘地・戦場関係、⑤居住地関係、⑥埋葬関係、⑦交通関係、⑧その他、に分類し、戦争遺跡全体の整理を行っている。

なお、沖縄県内では 20020 年 3 月現在では沖縄県内における戦争遺跡の総数は 1554 件で（別表)、市町村文化財指定となっているのは全 20 件で、全体数の 1%ほどである。

別表　沖縄県内の戦争遺跡数（2020年6月現在）

地域	残存数	喪失数	計
沖縄本島北部	220	4	224
沖縄本島中部	308	53	361
沖縄本島南部	507	129	636
那覇市	83	0	83
宮古諸島	139	24	163
八重山諸島	142	1	143
沖縄本島周辺離島	155	36	191
総計	1554	247	1801

沖縄タイムス社調べ

３．沖縄本島の戦争遺跡概要

本章では宮古諸島で確認できる砲台跡、陣地壕ならびにその周辺施設、水際陣地、住民避難壕、石碑について沖縄本島に見られるそれらの代表的な事例を個別に取り上げていく。

①砲台跡：平敷屋砲台跡、海軍飛行場砲台跡、ウマカジーの海軍砲台跡、

ウマカジーの海軍砲台跡（北谷町）

海軍飛行場砲台跡（那覇市）

②陣地壕ならびにその周辺施設：健堅の壕、嘉数のトーチカ・陣地壕

健堅の壕（本部町）

嘉数のトーチカ（宜野湾市）

③水際陣地：泡瀬海岸の塀と銃眼、楚辺海岸のトーチカ・陣地壕、都屋海岸のトーチカ

泡瀬海岸の塀と銃眼（沖縄市）

楚辺海岸のトーチカ（読谷村）

④住民避難壕：渡嘉敷の住民避難壕、潮平権現の壕

潮平権現の壕（宜野湾市）

渡嘉敷集落の避難壕（渡嘉敷村）

⑤石碑：美里の忠魂碑、読谷の忠魂碑、渡嘉敷の忠魂碑、座間味の忠魂碑、中城城跡の忠魂碑

美里の忠魂碑（沖縄市）

中城城跡の忠魂碑（中城村）

４．まとめ

今回は近年における戦争遺跡を取り巻く状況と雑駁ながら沖縄本島における戦争遺跡の実態について触れてきた。宮古諸島の戦争遺跡と沖縄本島のそれとを単純に比較はできないものの、両地域の戦争遺跡の相違がそれぞれの地域における沖縄戦の実態を示していることは言うまでもなく、それらが沖縄戦を伝えていく一級資料として今後、ますますその調査、保存、活用の意義が高まっていくと思われる。それは戦争遺跡に対する眼差しを向け続けることによって先鋭化されていくと共に、その眼差しが向けられなくなった場合にはその戦争対する記憶を放棄することに等しいと言える。その意味では他の時代の遺跡とは一線を画する遺跡と言うことができる。

補遺

2020 年に中城村教育委員会から刊行された『ガイドブック　中城村の戦争遺跡』では新たな戦争遺跡の枠組みを提示している。それは形として残る戦争の痕跡を戦争遺跡とし、その痕跡が確認されないものを旧跡、戦後に建てられた祈念碑や慰霊碑を「碑」として分類している。このような分類は今後における戦争遺跡を捉えていく上で一つの概念を提示していく上での基礎作業となりえる。今後においてこのような基礎作業を軸に新たな検証方法へと議論が発展していくことを期待したい。

【主要参考文献】

當眞嗣一 1984「『戦跡考古学』の提起」『南島考古だより』№30　沖縄考古学会
十菱駿武、菊池実編 2002『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
十菱駿武、菊池実編 2003『続しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
山本正昭 2010「沖縄の戦争遺跡」『史跡で読む日本史 10　近代の遺跡』吉川弘文館
沖縄県立埋蔵文化財センター2015「沖縄県の戦争遺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 75 集
久貝弥嗣 2017「宮古島市内での戦争遺跡活用事例」『戦争遺跡の可能性―保存・整備・活用の視点から―資料集』宮古島市教育委員会
吉浜忍 2017『沖縄の戦争遺跡』吉川弘文館
瀬戸哲也 2017「沖縄県の戦争遺跡調査の現状」『考古学研究』第 63 巻 4 号　考古学研究会
池田榮史 2019『沖縄戦の発掘 沖縄陸軍病院南風原壕群　シリーズ「遺跡を学ぶ」137』新泉社
中城村教育委員会 2020『ガイドブック　中城村の戦争遺跡』

4. 来間の戦争遺跡

（1）来間の山砲陣地壕群（くりまのさんぽうじんちごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字来間来間里

②立地・現況

来間島の北東側に連なる断層崖の下方部にある岩塊を掘り込んで作られた陣地壕群である。

③歴史状況

歩兵第３聯隊第２大隊第６中隊（中隊長:関戸義朗中尉）と、山砲兵第 28 聯隊第６中隊の１個小隊（小隊長：芋坪賢吉中尉）の計 120 名ほどが「来間島守備隊」として配備されている。

守備隊は集落の北東側一帯に陣地を構築し、断崖上部に模擬電波探知機を、断崖の下に山砲陣地をそれぞれ構築している。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている陣地壕である。

沖埋文の報告書によると、「チフサアブから約 100 メートル南東に位置する、石灰岩塊の内部を刳り貫いた人工壕。現在では２か所が確認されており、いずれも東側にコンクリートで固められた銃眼が開いている。現状においては雑木で覆われて視界が悪いが、かつては雑木を刈っていたため、宮古島南西一部を広く見渡すことができたようである。

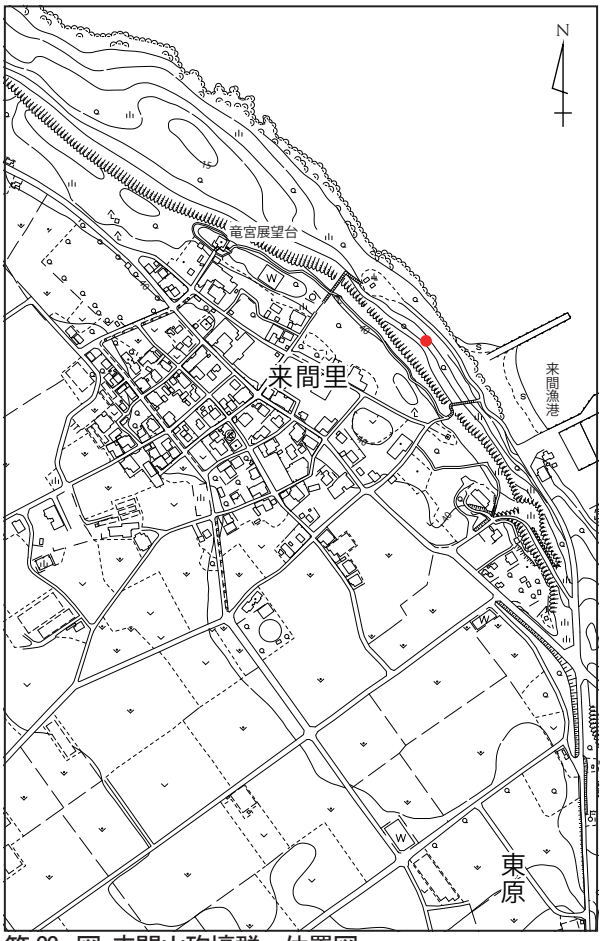
２か所共に内部はおおよそ４メートル四方の広さで、側壁には燭台と思われる棚や、部材を嵌め込んだ痕と思われる溝が走っている。床面には約１メートルの長さで素堀りの溝を見ることができる。入口は西側に開口しており、造りは雑である。入口に至るまでに鍵の手状に右折する造りとなっている。

この壕近くには来間島展望台から下る古道が近くを通っていることから、来間集落との関係が窺える。西側周辺には平坦に造成した広場が展開しており、かつて旧日本軍の施設があったとされている。当時、来間島には 120 名の軍隊が配置されていたとあり、この山砲壕とその周辺は何らかの関わりがあるものと考えられる。因みに来間島展望台の真下に重火機等の武器を隠していたとの聞き取りが得られている。」と報告されている。

※尚、複数個の壕があることから、沖文 2005 の呼称を壕群に改めた。

今回、確認作業のため改めて現地調査を行ったところ、新たに蛸壺２か所と監視壕と思われる小さな壕をひとつ発見した。

来間泉前の広場から断層崖へ向かって雑木林の中を、30 メートルほどに分け入った崖下の岩場の陰に、ひとつ目の蛸壺１がある。



第 33. 図 来間山砲壕群　位置図

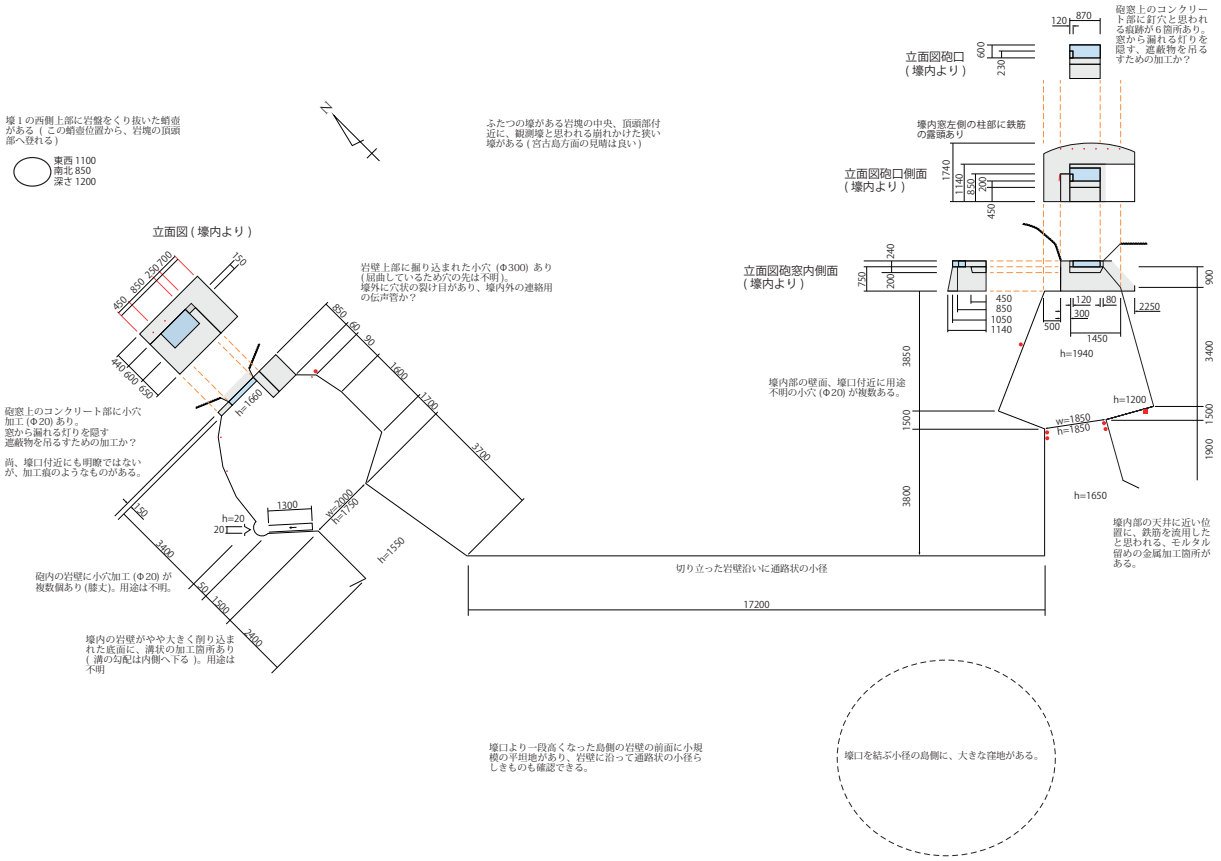
蛸壺の口は東西 0.65 ×南北 0.75 メートルぼとの円形で、深さはおよそ 0.6 メートル掘り込まれている。蛸壺の口の北西側に幅 0.45 メートル、長さ 1 メートルほどの浅いスロープが切られており、南東方向を向いて入壕する。南側（右）は 3 メートルほどの切り立った岩がある。

蛸壺 1 から山砲壕へは、断崖に沿って登ってゆくルートと、岩棚の手前に沿って進むルートが取れるが、手前を進むと山砲壕の砲口側へと出る。

壕の掘り込まれている岩塊を 3 メートルほど直登すると、上部の平場に到達し、そこに蛸壺 2 がある。蛸壺の口は東西 1.1 ×南北 0.85 メートルほどの円形で、深さは 1.2 メートルほどあるが、中は堆積物でやや埋まっている。

この蛸壺 2 のさらに 4 メートルほど上方の岩場に登ったところに、崩れかけた小さな横穴の壕がある。位置的に南東方向（宮古島与那覇前浜方面）の眺望もよく、後述する山砲壕の上方に位置していることから、着弾観測などを目的とした監視壕だったのではないかと推察する。

これら蛸壺 2、監視壕の直下に山砲壕が位置しており、沖埋文の調査時と特に変化は見られなかった。壕口側は断崖に面しており、場所によって平場や凹地、帯道など地形を整形して陣地化している様子が見て取れる。



第 34. 図 来間山砲壕群　簡易計測図

4. 上地の戦争遺跡

（１）宮星山の陣地壕群（みやほしやまのじんちごうぐん）

①所在地

宮古島市下地字上地ミヤホシ

②立地・現況

本壕群の位置する丘陵は、与那覇湾の奥にある製糖工場の南東側に位置し、工場脇を流れる崎田川の源流のひとつである。上地と川満の字境をなす丘陵で、標高はおよそ 30 メートルほどあり、嘉手苅のウエノミネ・ウガリミネ方面へと連なっている。低地の多い上地・洲鎌・与那覇を見渡すことの出来る場所で、山の上には現在、宮星配水地（タンク）設置されている。聞き取りなどでは、陸軍西飛行場の滑走路の延長上に位置していることから、宮星山が離発着の邪魔になっていたと言われていた。

③歴史状況

上地地区には歩兵第３聯隊第３大隊第 10 中隊（中隊長：定本二一大尉）が配備されているが、部隊の拠点についてははっきりしていない。しかし、川満での聞き取りの中で、中隊長サダモトの名前が出て来ることから、上地と川満の字境をなす宮星山付近に布陣していたものと考えられる（製糖工場か？）。

また、宮古島地区防禦配置図からも、宮星山は、“37 高地 ” と記されており、山砲が配備されている。宮星山の北側（川満側）は、現在の最終処分場の嶺にかけて、部隊が駐屯していたとの聞き取りもあり、同配置図にも砲兵陣地として、山砲、迫撃砲、速射砲などが配備されている。

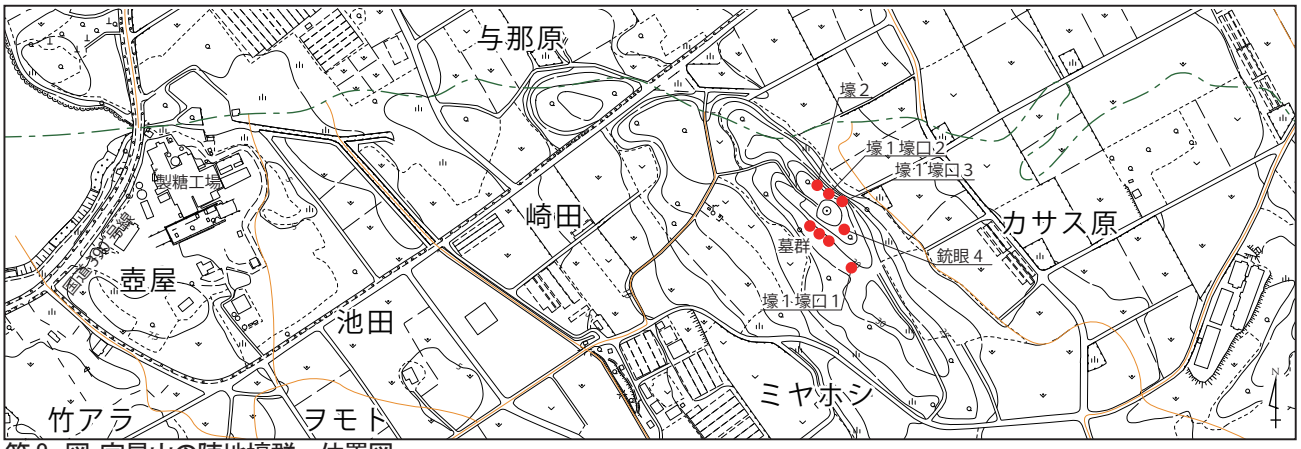
地域や年代により、ンミフス山、ミネホシ山など様々に呼ばれることがあるが、現在、宮古島市上下水道部の宮星配水池が置かれていることから、判り易さも含め、当該地の呼称を「宮星山」と統一した。

④遺構の特徴

宮星山の陣地壕群は、２つの壕と、４つの銃眼から構成される。

２つの壕は、隣接しており、丘陵を貫通する壕を壕１とし、壕１の北側の壕口（壕口２）に隣接する壕を壕２とする。壕１は３つの壕口とひとつの竪穴が連結する総延長 111 メートルにも及ぶ大規模な壕である。

壕１の壕口１は丘陵の南側に位置し、西へ向けて開口する。壕口は自然の岩盤を掘り込んで構築されており、現在は幅が 0.8 メートル、高さ 0.6 メートルと、人がひとり通れるほどに狭い。壕口１から東へ向



第 8. 図 宮星山の陣地壕群　位置図

けて直進すると、竪穴と連結する。竪穴は、丘陵の地表面を 0.6 × 0.6 メートルの方形の平面形で掘り込んでおり、壕の床面までは約 2.5 メートルを測る。竪穴の北西側の壁面には３つ、北東側の壁面には４つの足かけが掘られている。足かけの平面形は略三角形状を呈し、断面形はくの字形を呈する。この竪穴をぬけると、壕の幅、高さとも１メートル未満とひざをついて進まなければならないほど狭い。壕内は複数の枝線に分かれており、その内のひとつはコンクリートを使用して西側に向けて開かれた銃眼１（埋没）が確認できる。わずかではあるが灯り取りの痕が残され、ビール瓶やヤカンなどの残留物も確認することができる。北側の壕口２・３方向に進むと、幅 1.2 メートル、高さ１メートル程の丁重な作りをした略台形状の断面となり、19 メートルの直線の形態をなし丘陵を貫通している。

壕口２の周辺部には、自然の岩壁に開いた略円形の穴が３つある。ひとつは隣接する壕２と繋がった連絡用の窓とみられる。ふたつめは外部から土砂が流入しており、薄かった外壁が破損した穴のようにみられる。３つ目は半球形に作られた小さな脇部屋があり、床面よりやや高くなった台座状の構造に作られた銃眼２とみられる。この３か所の穴とは別に、壕口２の脇にコンクリートを使用した長方形の窓を有した銃眼３が構築されている。

壕２は、壕１の北側に隣接している。壕口は北東に開口し石積が設けられている。石積みは 0.3 ～ 0.4 メートル大の琉球石灰岩で、２～３段に野面積みにされ、高さは 0.4 ～ 0.6 メートルを測る。石積の外側には高さ 0.4 メートルほど、掘削がらとみられる石灰岩が積まれている。壕口部分は広く、両壁面は丸みがあり膨らむように掘られている。壕は南西向きに直線的に６メートルほど掘られ、突き当りの部分に、幅 1.5 メートル、奥行き 1.1 メートル、高さ 1.1 メートルの掘り込みがある。壕はそこで北西方向に約 90 度折れ曲がる。北西方向への通路は、幅約２メートル、高さ約１メートルを測り、奥側部分は、やや下がって楕円状の形態をなしている。

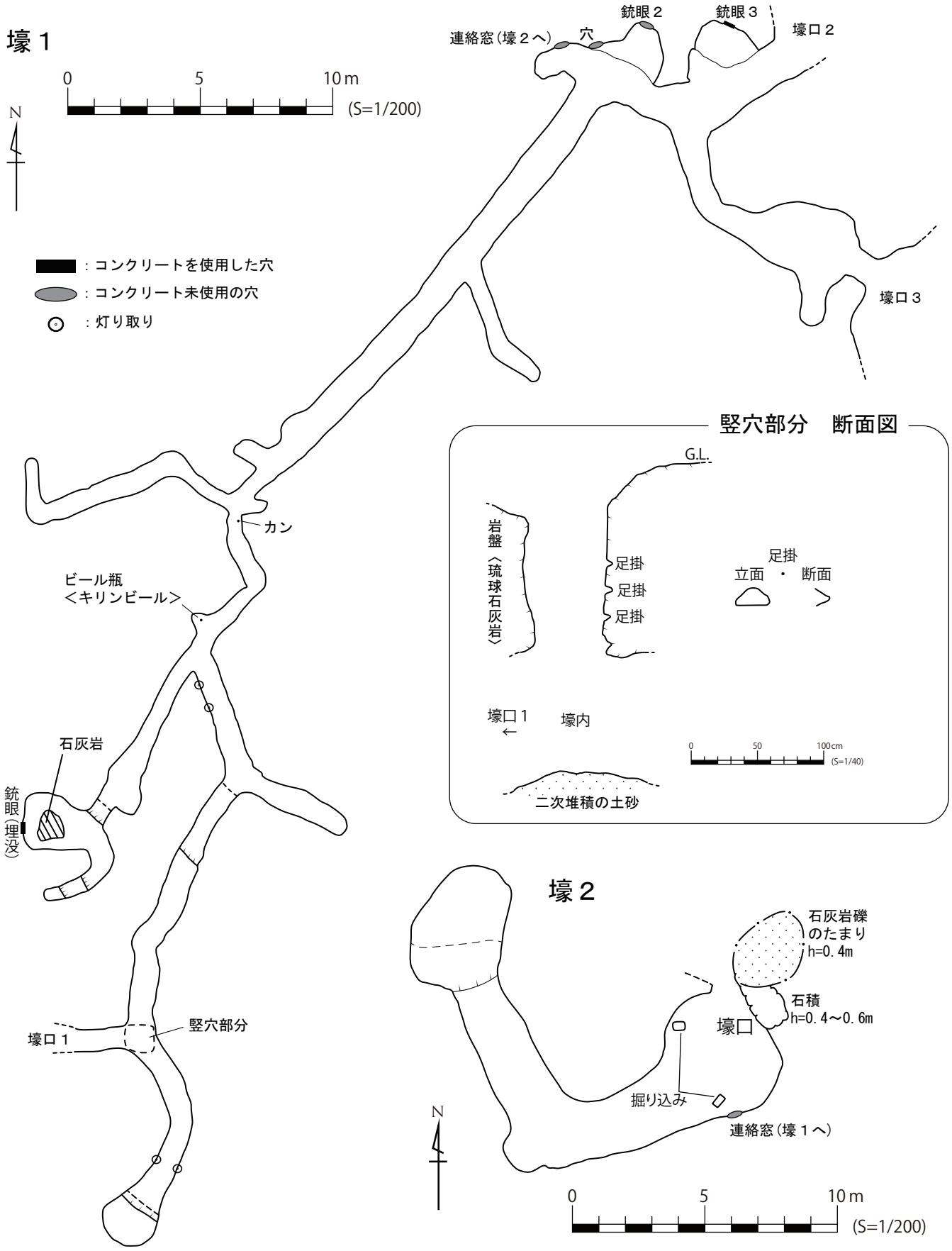
壕口部分の床面はフラットに整地され、方形の浅い掘り込みが２か所確認できた。この掘り込みは重砲を固定する足留の可能性が考えられる。

宮星山の尾根沿いに露頭した石灰岩に南側を向いた銃眼４がある。銃眼はコンクリートで構築され、外形は 0.6 × 0.3 メートル、内形 0.3 × 0.2 メートルの長方形をしている。銃眼の内部には空間が広がり、２か所の出入口のようなものがみられるが、いずれの口も埋没しており、銃眼へ続く壕口を確認することができない。

宮星山南側の斜面にはいくつもの古い墓が並んでいる。この墓群は斜面の琉球石灰岩を掘り込んだものであるが、一部は土砂に埋もれ、単なる窪地と化している場所もある。しかし、いくつかの墓は墓室が開いたままになっており、広めの墓室内を確認することができ、中には遺骨が残る墓もあった。

これらの墓を繋ぐように墓口の前に短いトンネル状の帯道が、連続して掘られている。宮星山周辺に人家はなく、上地集落での聞き取りよると古い無縁墓地との情報が得られたため、当該地に駐屯した部隊が墓を壕として活用したものと推察される。

宮星山には多くの壕が位置し、痕跡はあるものの拠点とした部隊について判然としないが、壕の形態的な特徴や歴史的な状況から山砲を使用した部隊に関連する壕と考えられる。



第9. 図 宮星山の陣地壕　壕１・壕２　平面図

（４）嘉手苅一地の壕（かでかりぴとじのごう）

①所在地

宮古島市下地字嘉手苅一地

②立地・現況

入江湾の東方に広がる、低い段丘の北側に位置する急斜面側に、壕は構築されている。周辺には新旧の墓が数基確認できるが、おおむね、周辺は耕作地となっており、一地(地域名入江)の集落からはやや離れている。

③歴史状況

軍の配備区域で南地区に区分される嘉手苅は、歩兵第３聯隊第１大隊を中心に展開され、第１中隊が嘉手苅・入江に、独立速射砲第 26 中隊も嘉手苅に配備されている。

独立速射砲第 26 中隊の戦史資料(ref.C11110032100)によると、終戦後、一地に集結して健康回復、自活態勢の確立に努めている。この記述から、この地は独立速射砲第 26 中隊の本部的な要素であった事が推察される。

独立機関銃第 18 大隊(通称球 5248 部隊)第２中隊の山内洋一氏によれば、山内小隊は歩３本部直轄で中飛行場の２つの滑走路の交差点に配属、酒井小隊は歩３第１中隊(中隊長：長杉栄吉中尉)に配属され、嘉手苅の入江の東側に配属された。その他、歩兵第３聯隊の戦史資料の防禦配備図でも、入江の両岸には水際陣地を構築し、歩兵の１小隊を配備している。宮国・山根から与那覇・前山にかけての海岸線は、水際戦闘部隊の防衛線となっており、この入江附近もその防衛線上にあった。

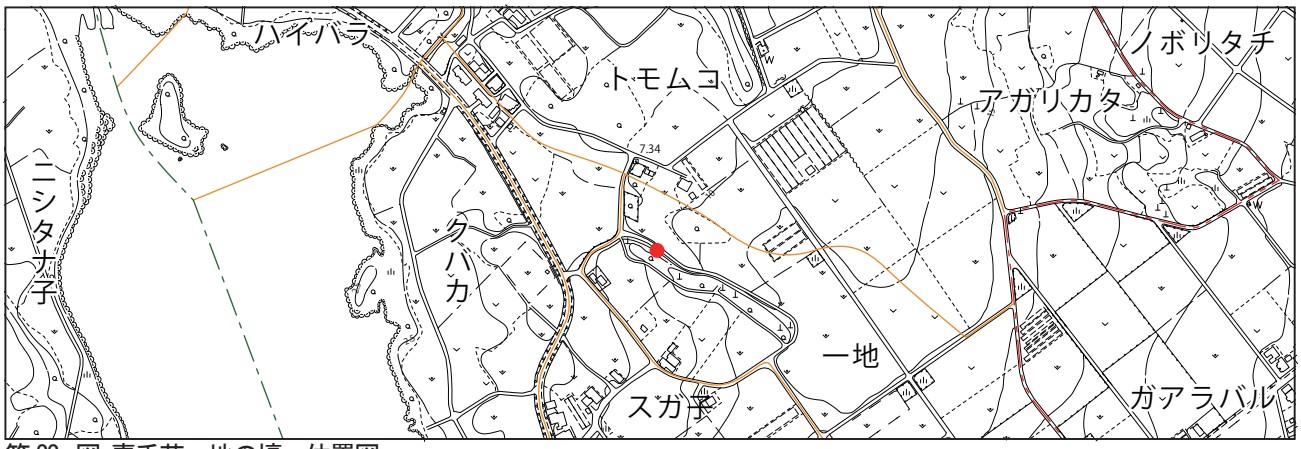
また、米軍が撮影した 1945 年当時の空中写真からも、集落もないこの地域に人の動きがあったことが確認できる。

④遺構の特徴

一地の壕は、東西２つの壕から構成されているが、地表部も含めると一連の壕として捉えることができ、いずれも琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。本項では東側を壕１、西側を壕２として報告する。

壕１の全体の平面形態は「く」の字型を呈し、３つの壕口を有しているが、現在は壕口１からのみ入壕が可能である。また、壕１の壕口１は、壕２の壕口３とつながるものである。

壕内は壕口１からやや蛇行しながら約９メートル南進すると、壕の幅が１メートル未満で、高さが 0.7 メートルほどと非常に狭まっている。これは他の通路部分に比べ、壕の掘削が足りないもので、土砂の２次堆積に伴うものではない。



第 22. 図 嘉手苅一地の壕　位置図

この狭小部分を過ぎると６×４メートルの略方形を呈し、高さ 1.9 メートルほどの空間がひろがり、壁面には灯り取が多くみられる。この空間の北東部に、壕口２が接続しているが口は埋没している。

ここで特筆すべき遺構として、0.7 × 0.6 メートルの、深さ 0.6 メートルほどのコンクリートの枡が設けられている。内部には礫が堆積していることから、深さは 0.6 メートル以上になるとみられる。用途は不明であるが、水を溜めるための貯水升であった可能性も考えられる。また、このコンクリート遺構から北西部へ進む堀込が確認できる。この堀込の西側には前述した狭小な通路が位置することから、この堀込は壕口１からの別の経路で連結させる可能性があったことを推察させる。

広い空間を東へ約５メートル進むと天井に竪穴の掘り込みが確認できる。現在は大型の礫が堆積し、口が塞がった状態にあるが、竪穴の壁面部には３段のステップが確認できることから、本来がこの竪穴からも壕内へ進入することが可能であったと考えられる。

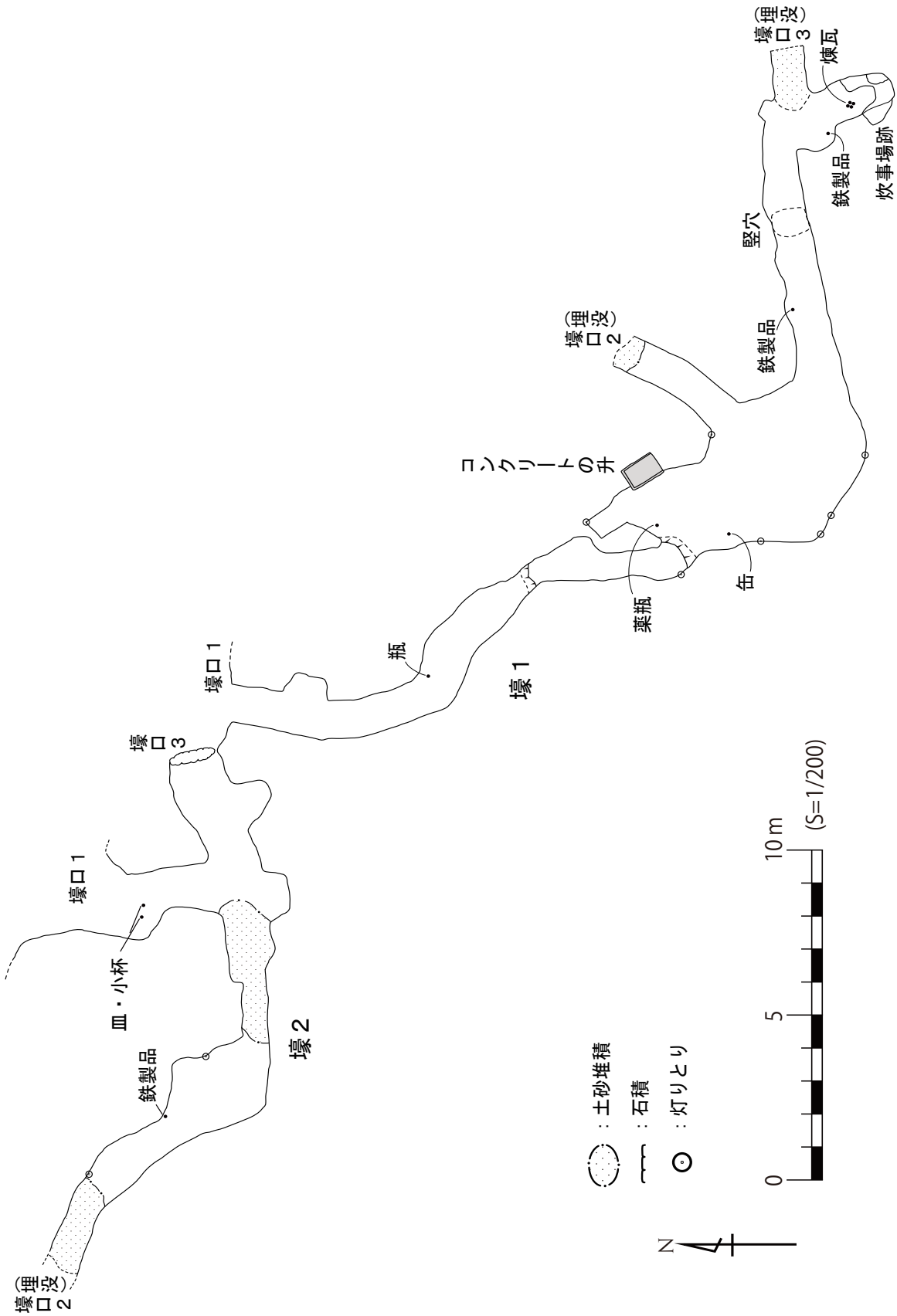
この竪穴の部分からさらに東進すると、埋没した壕口３へと至る。ここでもうひとつ、特筆すべき遺構として炊事場跡が確認されている。炊事場跡は鍋を置き、火を焚くためのカマド部分と、礫を混ぜた土で造られた煙突が残されている。煙突はカマド部分の側面に穴を設けて排煙をしている。尚、カマド部分には若干の炭が残されている。

西側の壕２は３つの壕口を有しているが、現在は壕口１からのみ壕内へ入ることができる。壕口１から南進すると東西への通路が分かれる。

西側へは土砂が入り込んでおり、高さは約 1.2 メートルと低くなり、北西側へ折れて壕口２へ至る。壕口２は土砂が堆積し、現在は壕口が塞がった状態にある。

東側は高さが 1.5 メートルほどと、西側に比してやや高く幅も広いが、壁面や天井は凹凸が激しく、粗い造りといえる。また、壕の延長も短く、すぐに壕口３へと達している。壕口３は部分的に崩れて口が狭くなっているが、前述したように壕１の壕口１とつながる壕口である。

これらの壕の形態から、一地の壕は有事における避難用の棲息壕として構築されたものと考えられる。



第 23. 図　嘉手苅一地の壕　平面図

４．伊良部・仲地の戦争遺跡

（１）根原（にばる）御嶽の壕群（にばるうたきのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字仲地家後原

②立地・現況

仲地集落の東方に連なる低丘陵。仲地ユークイとも呼ばれている根原御嶽の北東側斜面に位置している。尚、嶺続きとなる北隣には国仲砂川の壕群がある。

③歴史状況

国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第 59 旅団（通称：碧部隊。以下、第 59 旅団）が昭和 19 年 9 月 14 日、伊良部島上陸と同時に本部として駐屯している（伊良部小学校沿革誌より）。

第 59 旅団は司令本部、第 393 大隊、第 394 大隊、396 大隊、砲兵隊、通信隊、工兵隊で構成され、その他、山砲兵第 28 聯隊第 3 中隊、野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊第 1 中隊を指揮下に加え、伊良部地区の防衛にあたる。

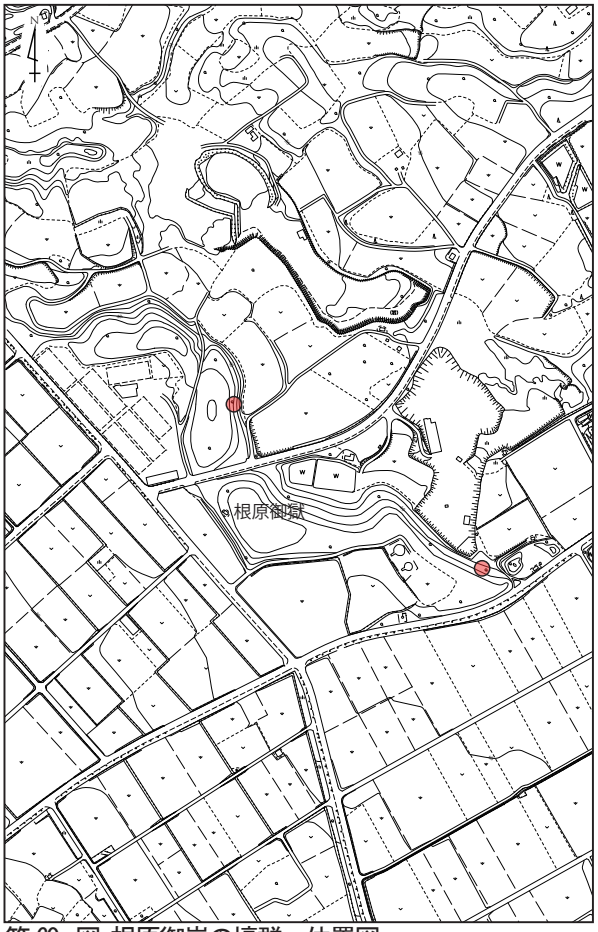
仲地・伊良部の地域には第 396 大隊、工兵隊、砲兵隊が展開していたことが聞き取り調査で確認されており、戦後、第 396 大隊に所属した元隊員の来島により、当壕の存在が明らかになった経緯も確認された。

④遺構の特徴

現在までの調査で発見された本壕群は、御嶽の南方に位置する農業用水タンクの崖下（壕１）と、御嶽の道向かいにある小丘陵の東側（壕２）の２か所に分けられる。

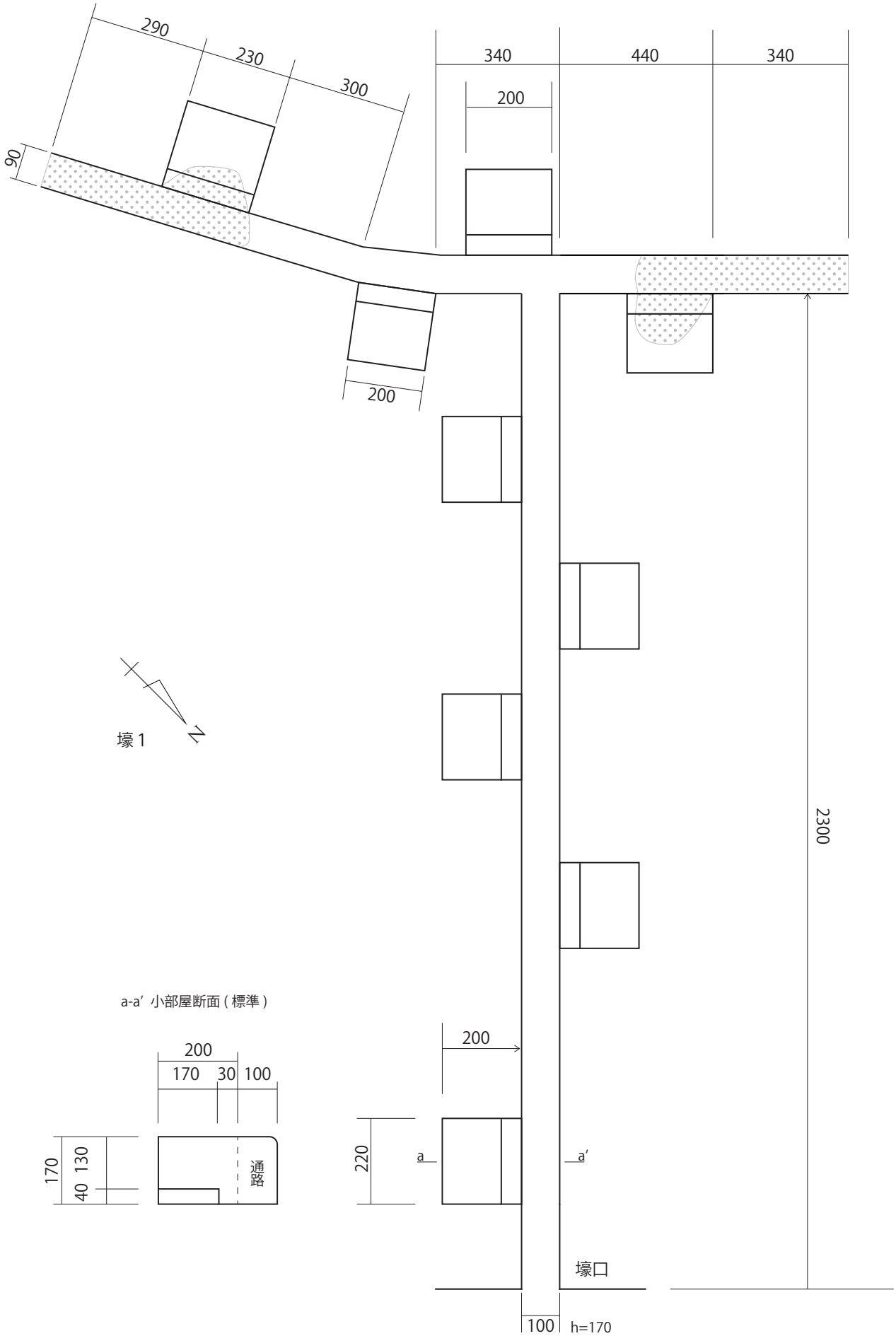
壕 1 は耕作地、採石場、ヤード（土砂置き場）に囲まれた極狭い雑木林の北東斜面に位置し、藪に投げ込まれたゴミも少なからず散乱している。壕口は北東に開口しているが、壕口上部からの土砂の流れ込みにより、７割程度埋没している。

壕は琉球石灰岩の岩盤を南西に向けて約 23 メートル程堀り込み、丁字型に突き当りまで直線的な通路を形成している。丁字の右手の通路は直角に曲り、北西方向へ約 7.8 メートル先で流入した土砂で完全に埋没している（通路はやや上向きに構築されているようである）。丁字の左手も直角に曲がり南東方向（左）に進むが、壕は右（南）へ緩くカーブし、やがて上方に緩く登り、約 8.2 メートルほど続いているが、上方からの土砂で埋没している。壕口の位置からも、壕全体の土被（どかぶり）は、およそ５～８メートルほどとみられ、それほど厚くないことと、流入している土砂の土質から、地上のヤード付近に壕は貫通していたと考えられる。



第 60. 図 根原御嶽の壕群　位置図

末端の埋没部分を除き、壕の高さはおおむね 1.7 メートル、幅もほぼ均等で 1 メートルほどある。通路各



第 61. 図 根原御嶽の壕群　壕 1　簡易平面図

所の壁面には灯りを設置したとみられる切欠き加工が施され、周辺には煤が付着している。

本壕でもっとも特徴的なのは、各通路部分にほぼ等間隔で幅 2 メートル、奥行き 2 メートルの脇部屋が 9 つ設置されていることである。いずれの脇部屋も通路部から 0.3 メートルセットバックした位置から、0.4 メートルほど床がベッド上に高くなっており、部屋部分の高さは通路と変わらないため、高くなった床から約 1.3 メートルと、立つには厳しいが座ることは充分に可能な高さがある。

通路、脇部屋ともに規格が統一された丁寧な作りで、まるで設計図を元にして構築されたような作りである。独歩第 396 大隊元隊員が掘ったとの証言もあり、伊良部支隊として終戦まで伊良部に駐屯した同大隊の本部壕であった可能性が示唆される。

また、近隣には作井隊が掘削した井戸もあったとの聞き取りもあるが、今回の調査で発見することは出来ていない。壕に隣接している、採石場の区域内にあったのではないかとも考えられている。

壕 2 は根原御嶽の道向かいにある小丘陵北東側の麓にあり、斜面の岩盤を掘り込んで作られている。壕口は、高さ約 1.7 メートル、幅約 1.1 メートルで東に開口している。一部、壕内に岩盤の剥離がみられるものの、西向きに下り勾配で 5.1 メートルほど通路状に掘られ、ほぼ平坦になった壕の底部に至る。底部は北側に向って奥行きが 1.7 メートルほどで台形状の不定型な部屋を形成している。部屋の幅は奥ほど狭く、最深部は 1 メートルほどしかないが、そこに高さ 0.45 メートル、奥行き 0.4 メートルの台状の掘り込みがある。尚、通路、部屋とも、高さはおおむね 1.7 メートルあり、十分に立ったまま行き来することが可能であるが、全体に作りは粗めである。

周辺は圃場整備の影響で古い地形が変更されているが、壕 2 のある斜面には、埋没した壕口のような痕跡が 3 か所ほど連なっている。また､北側には圃場整備に伴って岩盤が大きく露頭している耕作地もあり、すでに取り壊されてしまった可能性も考えられるが、聞き取りで得られた根原御嶽周辺に展開していた軍の存在を裏付けるものと見ることが出来る。

根原御嶽の壕群の位置を俯瞰して考えてみると、嶺続きの北隣は国仲砂川の壕群跡があり、隣接する国仲美里の壕群跡、更には、字長浜の習原・大多良周辺にも壕などの痕跡こそ発見されていないが、軍が駐屯していた証言がある。これに長浜御嶽・嵩原御嶽が続き、佐和田北方の深底集水池や白鳥 3 号集周辺には深底原跡が位置する（宮古島地区防禦配備図より）。転じて、南（東南）側には、長山台地へ続く、アダンニャ御嶽周辺の倒底原・東本島の陣地から屋良部崎（伊良部島南海岸陣地壕群～大長原）と島を南北に貫き、防衛線を構築していることが見て取れる。

写真 427. 壕 1　壕口

写真 428. 壕 1　壕内通路

４．下地島の戦争遺跡

（１）下地島西海岸の壕群（しもじじまにしかいがんのごうぐん）

①所在地

宮古島市伊良部字佐和田下地

②立地・現況

下地島西部の海岸地帯に位置している。

③歴史状況

昭和 19 年 9 月中旬から伊良部島の防衛を担っていた第 59 旅団は、集団命令により昭和 20 年 6 月、主力を宮古島平良港に転進、北地区の守備についた。伊良部島の防禦は伊良部支隊として残留した独歩第 396 大隊が担任する。同大隊の大隊長竹内隆大尉の資料によると、伊良部島防衛の方針は次のようなものである。

１．下地島を主体に数多くの偽陣地を構築し、敵の攻撃を同方面に誘致し挺身斬り込み等を敢行し敵戦力の消耗を図る。

２．伊良部東海岸の水際を堅固に占領し敵の上陸を阻止、同地区を死守し宮古島主力の戦闘を有利ならしむ。

このような方針のもとに、下地島の海岸線には複数の銃座を設置したものと考えられる。宮古島地区防禦配備図では、下地島海岸には多くの速射砲が配備されている。

④遺構の特徴

本壕群は、海岸から 150 メートルほど離れた海に露頭する岩にある壕と、海岸部の岩場に構築された壕とで構成されている。

壕 1

海上の露岩は、干潮時には容易に渡海することが可能な岩塊で、地元ではキドマリノトリ゜パナリと呼ばれている。岩塊はおよそ 1500 平米の大きさがあり、北東側のやや高い位置に岩をくり抜いて構築された銃眼を有する壕 1 がある。

壕 1 の壕口は 2 か所あり、壕口 1 は北西側の自然の段差を伝い登った位置に、岩の窪みを利用して掘られている。壕口の作りは粗く狭めで、低いステップを数段下がると、すぐに左手に 90 度近く曲がっており、その曲がった先が銃眼のある部屋になっている。

壕口 2 は東側のノッチ上部に位置しており、そのままの昇降にはやや難があるが、短めの梯子等を設置すれば容易に出入りが可能である。壕口 2 の高さは約 1.6 メートル、幅が約 0.8 メートルほどで、壕口を入ってすぐ右側から、銃眼のある部屋へとつながっている。

部屋はおよそ 1.5 メートル四方の大きさがあり、高さはおよそ 1.6 メートルである。海上の岩塊であるためか、天井を含む壁面が緑青色のカビに覆われている。また、岩塊の岩質はもろく、壕の作りは全体に粗めだが、特に大きな崩落などはない。

銃眼は幅約 0.3 メートル、高さ約 0.15 メートルの大きさで、一部がコンクリートで補強されている。銃眼は北に向いて設置されており、おそらく岩塊の北方に位置し、敵の上陸侵攻が予想される、佐和田礁湖方面への監視が目的と推察できる。

壕２・壕３・銃眼・蛸壺

海岸部の陣地は、岩塊の対岸、やや南方に位置する、少し複雑に入り組んだ琉球石灰岩の岩場スマノオイノツボ付近に、壕が 2 か所と、銃眼と蛸壺がそれぞれひとつずつ構築されている。

西の海に向かって、C字状に開いた岩場の北側岩盤の下部に、岩塊（キドマリノトリ゜パナリ）に向けて、銃眼としてはやや大きなサイズの窓が構築されている。

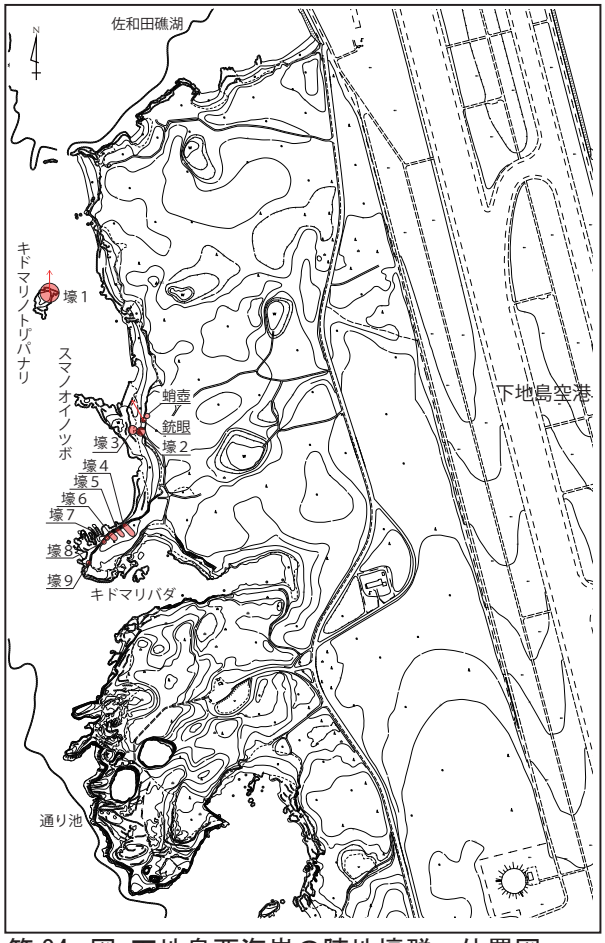
銃眼のサイズは、高さ 0.5 メートル、幅 0.7 メートルの長方形で、地盤高とほぼ同じ高さに構築され、周囲をコンクリートで補強されている。

この銃眼が構築されている岩場は、高さが 5 メートルほどあり、その上端（うわば）は一様に平たくなった独特の地形をしている。銃眼のやや北寄りの岩盤の上端に、およそ 0.75 × 1.1 メートルの大きさの蛸壺が構築されている。深さは約 1.5 メートルあり、内側には昇降用のステップも作られている。また、蛸壺底面の山側には、奥行き約 0.65 メートル、幅 0.8 メートル、高さ約 0.45 メートルの窪みも作られている。蛸壺内にほとんが堆積物がないことから、往時のままの姿を残していると考えられる。

銃眼の背後地（C字状の内側）の広場を抜け、幅 0.8 メートル、高さ 1.1 メートルのアーチを潜ると、南北に通じた、幅 1.5 メートルほどの岩の裂け目のような小さな空間がある。この東側の岩盤に壕 2 が海側（西）を向いて開口しているが、壕口の前にも岩があるため開口部は海からは隠蔽されている。

壕 2 の壕口 1 は、地盤から約 0.6 メートル高くなっており、自然の段差を登って入壕する。壕は右（南）に向かってカーブをしながら掘られており、壕長はおよそ 3 メートル強、高さは平均で 1.7 メートルほど、幅も約 1.5 メートルある。南を向いた壕 2 は、床面から約 0.7 メートル高くなった位置に開口している。壕口 2 は出入口というよりは窓のようなイメージである。開口部の大きさは高さ約 1.1 メートル、幅約 1.4 メートルとかなり大きく、後述するさらに南方に位置する陣地との連携が、容易に取れる作りになっていると見られる。

壕 2 を隠すように位置する岩の海側（西）に、およそ 5 メートル四方、高さ 3 メートルほどの岩塊があり、これを“かまくら”のようにくり抜いて構築された壕 3 がある。壕内は直径 3 メートルほどの円形状の部屋になっており、珊瑚砂が部屋全体に堆積している。壕口はふたつあり、東西方向にひとつずつ開口している。東向きの壕口 1 は幅約 1 メートル、高さ約 0.6 メートルで、やや狭いが立地条件から入口とみられる。西側（海方向）の壕口 2 は、幅約 1.3 メートル、高さ約 1 メートルの大きさで、斜め上方に向かって大きく開口している。壕口 2 は床面からも 0.5 メールほど高い位置にあり、壕口の右端にはコンクリートで形成された、用途不明の台座のようなものが設置されている。台座は途中で途切れていたが、壕口 2 の手前側に横長のテーブル状に構築されていたように見える。尚、この壕口 2 からは沖の岩塊はもちろん、正面の海況も充分に見て取ることができる。



第 84. 図 下地島西海岸の陣地壕群　位置図

壕 4 ～壕 9

スマノオイノツボ付近の壕群を抜け、浜辺をさらに南下した位置に、海蝕洞が連なった高さ 10 メートル弱の琉球石灰岩の岬（キドマリバダ北岸）が、南西向きに突き出している。この岬の北西面に開いた海蝕洞を利用して、複数の壕が構築されている。

ひとつ目は岬の比較的付け根側にあり、満潮時には波の洗う岩場の上部、およそ２メートルの高さに壕４の壕口１が北に開口している。壕口は高さ約１.2 メートル、幅約 1.2 メートルの方形状で、壁の厚みは約１メートルあり、正面にキドマリノトリ゜パナリの岩塊を望むことが出来る。

壕内は南向きに掘りこまれ、幅約４メートル、奥行き約 4.4 メートルの略方形の部屋になっている。床には大小さまざまな岩礫が散乱し、高さは約 1.6 メートルとやや低い。部屋の南側の壁面に沿って、東西にそれぞれ通路がある。

東側は幅約１メートル、高さ約１メートルの大きさで、１メートルほど掘り進んだ位置から、北に向かってカーブをしながら、幅３メートルほど掘り込まれている。幅約１メートル、高さは約 0.7 メートルと狭く、掘削柄も多いことから構築の途中であったとみられる。

西側の通路は幅約 0.9 メートル、高さ約 1.3 メートルで、1.1 メートルほどの位置から、高さが約 0.6 メートルと低くなる。こちらも北に向かってカーブを描きながら５メートルほど掘り込まれているが、途中で埋没してる。北側（壕口１側）崖面にこの通路の延長の位置と見られる壕口があるが、こちらも埋没しているため詳細は確認することはできない。

この部屋の南側（壕口１から奥）には高さ約 1.6 メートル、幅約 0.8 メートルの斜路が、東にカーブしながら上方へ続いている。部屋を出て 0.8 メートルほど登ると、通路の高さは最大で２メートルまで高くなり、幅も約 1.4 メートルと広く、およそ３メートルほどで壕口２に達する。壕口２からは南に向かって直線的に５メートルほどのスロープ状の羨道が、丁寧な掘削が施され地上部まで構築されている（スロープの両サイドには掘削殻が積まれて遮蔽物となっている）。おそらくこちらが本来の壕口とみられ、北方向を向いた壕口１は、敵上陸部隊を横撃するための砲口と考えられる。

壕５は自然壕（海蝕洞）を利用して構築された壕とみられ、北を向いた壕口の幅は約３メートル、高さは４メートルほどある。この壕口の波打ち際の岩場には、用途は不明だが、船揚げ場のような２本のレール状をした溝のようなものがある。また、壕内は直線的で幅 1.5 メートル、高さ 1.7 メートル、奥行き３メートルほどある。

壕６と壕７は、幅約 5.6 メートル、高さ約４メートルの広い海蝕洞の中に構築されている。壕６は海蝕洞の東側の壁面に沿って 3.4 メートルほど岩棚を登り、幅１メートル、高さ約 1.6 メートルの壕口１から５メートルほど斜路を進むと通路は竪穴へ変化する。1.4 メートルほどの竪穴には岩盤を削りだして構築されたステップがあり、これを登って地上（岬の上端）の壕口２へと至る。壕口２は 1.0 × 1.5 メートルの楕円形で、アダン林の中にある。

壕７は壕６と同じ海蝕洞の西側にあり、自然の洞穴を利用して構築されている。壕口は幅約３メートル、高さ約３メートルで奥行きは５メートルほどで、壕内は入口脇と最深部に、方形に切り取ったような窪みが２か所ある。

壕８は壕６・７の海蝕洞から４メートルほど西側にあり、壕口は幅約１メートル、高さ約 1.4 メートル、奥行きは直線的で 3.6 メートルほどある。この壕８の壕口のすぐ脇（西側）には、人がひとり身を隠せるサイズの窪みが、岩肌に掘削されている。

壕９は岬のほぼ先端にあり、西を向いた自然壕を利用して構築されていると見られる。内部は岩が多数詰まっているため、詳細を確認することは出来ないが、壕口付近の床面が均一に平たくなっている。

（２）佐良浜の避難壕（さらはまのひなんごう）

①所在地

宮古島市伊良部字前里添佐那浜

②立地・現況

伊良部島東部、前里添。佐良浜断層崖を登る、県道 90 号線沿いの住宅街に位置している。

④遺構の特徴

本遺構は「沖埋文 2005」にて報告されている壕である。

沖埋文の報告書によると、「現在は佐良浜集落に 1 か所だけ残る。かつては佐良浜漁港に数 10 か所、掘り込んでいたが、戦後漁港拡張工事や護岸工事の際にその殆どが壊された。現在残る壕は民家の裏手の崖面に掘り込まれているが、入口は廃棄物の置き場となっているため内部へ進入することはできない。

外部から観察する限りでは石灰岩を掘り込んでおり、床や壁、天井は丁寧につくられている。更に複雑に折れ曲がりながら奥へ続いていくのが確認できた。当時は石灰岩を掘り込むためにツルハシや石斧、金棒を用いたようで、構築は陣地構築等の壕掘り作業が始まった 1944 年（昭和 19）10 月以降と考えられる。周辺にはこのような壕がかつていくつもあり、戦後は佐良浜の子供達の遊び場となっていた。」と、報告されている。

追記

今回、確認調査の結果、佐良浜断層崖を登坂する、県道 90 号線の海側斜面に壕口があり、県道の地下に壕が位置している。

壕口の大きさは幅約 0.7 メートル、高さ約 0.7 メートルで、南東を向いて開口し、壕内は 0.3 メートルほど壕口より下がっている。壕内の形状は幅約 1.1 メートルの通路を 3 メートル弱進むと、南西－北西方向にＴ字となっている。

第 74. 図 佐良浜の住民避難　位置図

Ｔ字の左手（南西側）は、奥行き約 4 メートルの通路が西に曲りながら続いている。壕奥の幅は約 1 メートル、高さは約 1.2 メートルで、灯り置きがひとつ確認できた。

Ｔ字の右側は 5 メートルほど北西方向に直線的な通路が続き、通路奥の壁面には灯り置きがある。通路途中の左側（北西側）に、幅約 1.2 メートル、奥行き約 1.3 メートル、高さ約 1.1 メートルの横穴がある。壕奥の北西側にも、幅約１．６メートル、奥行き約０．７メートル、高さ約 1 メートルの横穴が並んでいる。また、壕奥の東向き（右斜め）にも、幅約 0.9 メートル、長さ約 1.5 メートル、高さ約 0.7 メートルの３つ目の横穴がある。

壕内はほぼ崩落もなく、床もおおむねフラットに作られており、近年の缶ゴミなどが散乱して、戦後は遊び場となっていたと思われる。

（３）伊良部南区の住民避難壕群（いらぶみなみくのじゅうみんひなんごう）

1) 長浜東里の住民避難壕（ながはまあずりざとのじゅうみんひなんごう）

2) 長浜西里の住民避難壕（ながはまいりざとのじゅうみんひなんごう）

3) 佐和田世主里の住民避難壕（さわだゆぬすざとのじゅうみんひなんごう）

4) 仲地屋敷の住民避難壕（なかちやしきのじゅうみんひなんごう）

①所在地

宮古島市伊良部字佐和田世主里／長浜東里・西里／仲地屋敷

②立地・現況

西向きの緩斜面に広がる佐和田・長浜集落内には、数多くの井戸（特に個人宅用の掘り抜き井戸）があり、集落近隣の山や崖に避難壕を掘るよりも手近なことから、掘り抜き井戸の壁面に横穴を構築して、家族の避難壕として使用していた。

④遺構の特徴

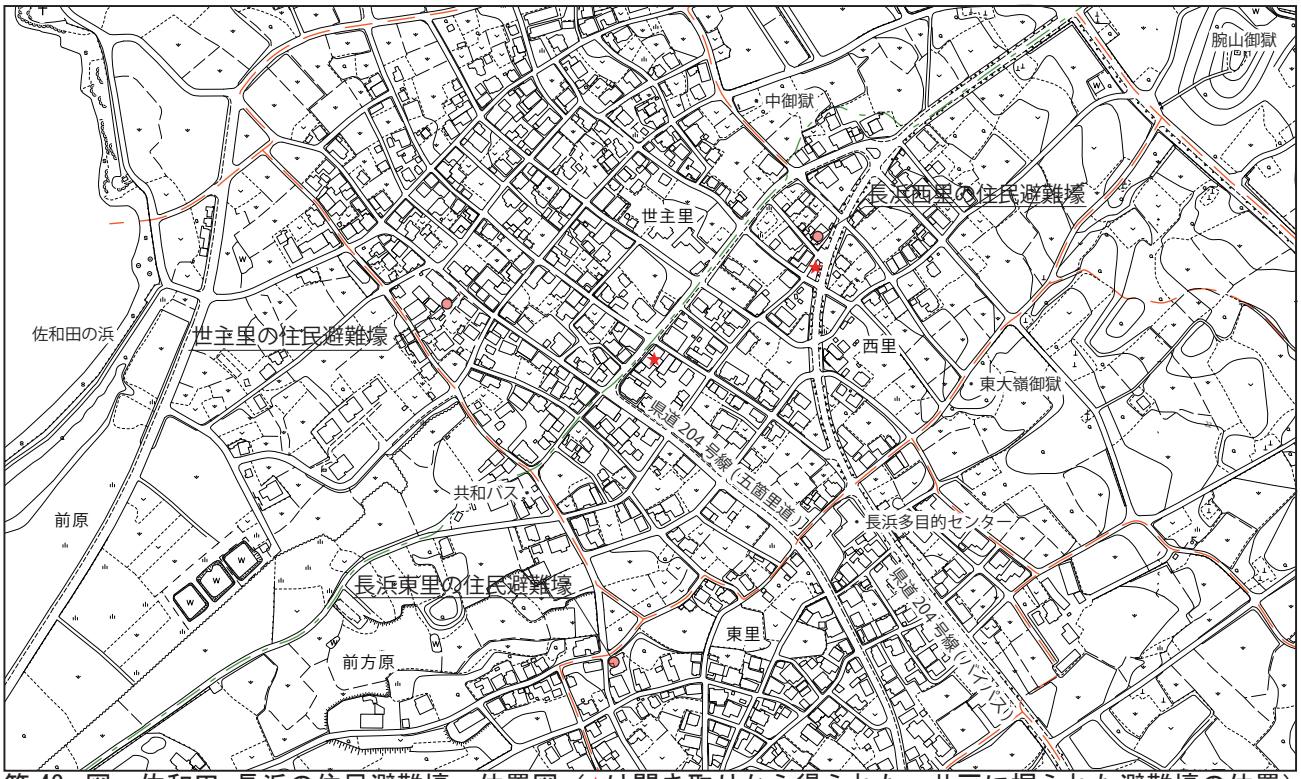
避難壕として利用している掘り抜きの井戸は、水源までの深さが 5 メートル未満の浅いものから、10 メートル超となる深いものまでさまざまである。これは集落内の標高差に起因し、標高の高い内陸側の井戸ほど水面深度が深いものとなっている。

1) 長浜東里

長浜 10 番地の住宅にある掘り抜き井戸。井戸の直径は 0.7 メートルほどで、水面までの深さはおよそ 8 メートル (水量はあまりない) あり、琉球石灰岩を掘り抜いている。避難壕は井戸底の直前の高さで東向き（家屋の下に向かっている）に掘り込まれている。

2) 長浜西里

長浜 281-1 番地の住宅にある掘り抜き井戸。井戸の直径は 0.7 メートルほどで、水面までの深さはおよそ 12 メートルあり、琉球石灰岩を掘り抜いている。避難壕は井戸口から 3.5 メートルほどの壁面



第 43. 図　佐和田･長浜の住民避難壕　位置図（★は聞き取りから得られた、井戸に掘られた避難壕の位置）

にあり、東向き（家屋の下に向かっている）に掘り込まれている。

壕の形状は、壕口の高さ 0.7 メートル、幅 1 メートルで、壕内は高さ 1 メートル、幅 1 メートル、奥行き 2.15 メートルあり、井戸との境界となる壕口から 0.3 メートル下がって構築され、井戸への転落防止の役目も果たしている。聞き取りによると、井戸への避難には、壕口の高さの位置に井戸の壁面に切り込みを施し、井戸内に板を渡して足場を構築し、老人や子供が安全に避難できるよう配慮されている。また、井戸内は壁面には掘削時に加工された足かけの窪みが残されており、避難の際の足場として活用された。

他にも、近隣の住宅（道路拡張により消失）にあった井戸は、共同の洞泉「アカンタガー」（現在は掘り抜き型に改修され、井戸口はコンクリートで蓋がされている）までつながるトンネルを構築していたとの聞き取りがあった。

3) 佐和田世主里

佐和田 1500 番地の酒造所内にある井戸は、聞き取りによると、敷地東側の庭（現在はコンクリート張の駐車スペース）から井戸の側壁面に向かって斜坑を構築し、井戸の竪穴外壁側に家族が避難できる壕を構築。井戸側にも開口しており、井戸口から開口部が確認できる（水面は開口部より下にある）。

酒造用に現用中の井戸であることから、実際に壕の調査はできなかった。

その他、聞き取りにより得られた井戸内に構築された住民避難壕は、佐和田 218-1 番地（住居改築に伴い、現在は蓋をしてしまった）。仲地 126-1 番地（井戸の脇に壕を構築。井戸に向かって掘り進めたが完成はしなかった）、仲地 201 番地（戦後、子どものころ遊んだ。蓋を設置済み）。

4) 仲地屋敷

調査中に寄せられた情報によると、仲地 201 番地の住宅の庭先にある井戸は、井戸の内壁にトンネルを掘り込み、東側の隣家（仲地 198 番地）にある井戸（現在は物置兼車庫を建てたため、井戸口は封鎖され空気抜きのパイプのみ）まで繋がっているという。水面深度まで 10 メートル弱あり、内壁には足掛もないため現地調査は行えていないが、住民からの聞き取りでは、縄梯子を使って降りていたらしいとの証言を得た。

また、もうひとつ東の住宅（仲地 197 番地）にも井戸内壁に防空壕が構築されていると、情報が得られた。

第 44. 図　仲地の住民避難壕　位置図（★は聞き取りから得られた、井戸に掘られた避難壕の位置）

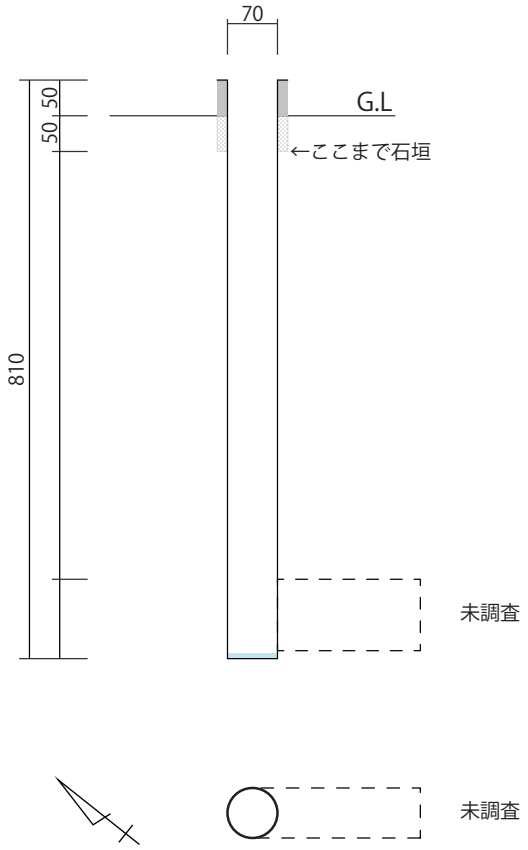
写真 339.　仲地屋敷の住民避難壕（画像右に壕口）

写真 340. 長浜東里の住民避難壕(画像上側に壕口)

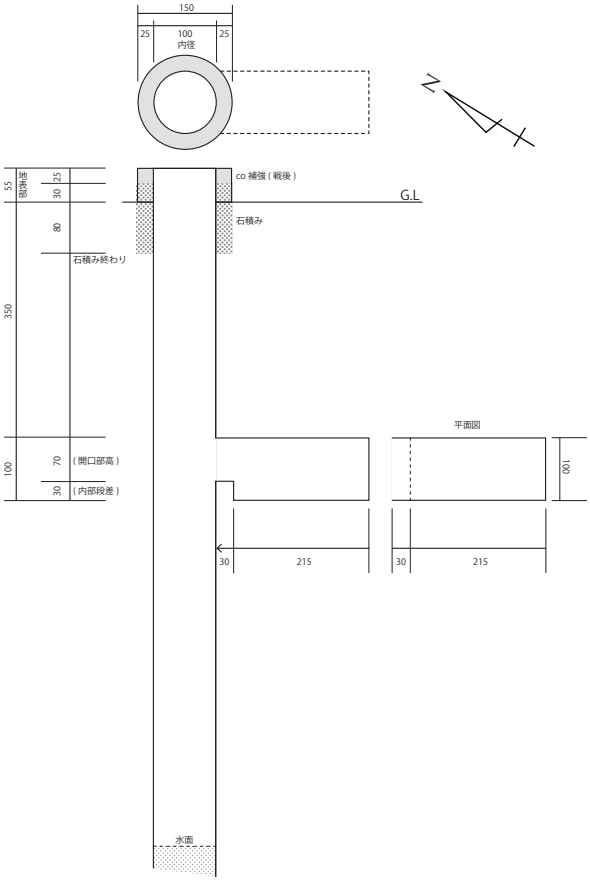
写真 341. 長浜西里の住民避難壕（壕口から井戸を望む）

写真 342. 長浜西里の住民避難壕（壕口から井戸を望む）

写真 343. 世主里の住民避難壕（画像左上に壕口）



第 45. 図　長浜東里の住民避難壕（模式図）



第 46. 図　長浜西里の住民避難壕（模式図）

令和元年度 宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書 (2)
下地地区分布図

与那覇
- ①与那覇大道原の住民避難壕
- ②皆愛海岸の壕群

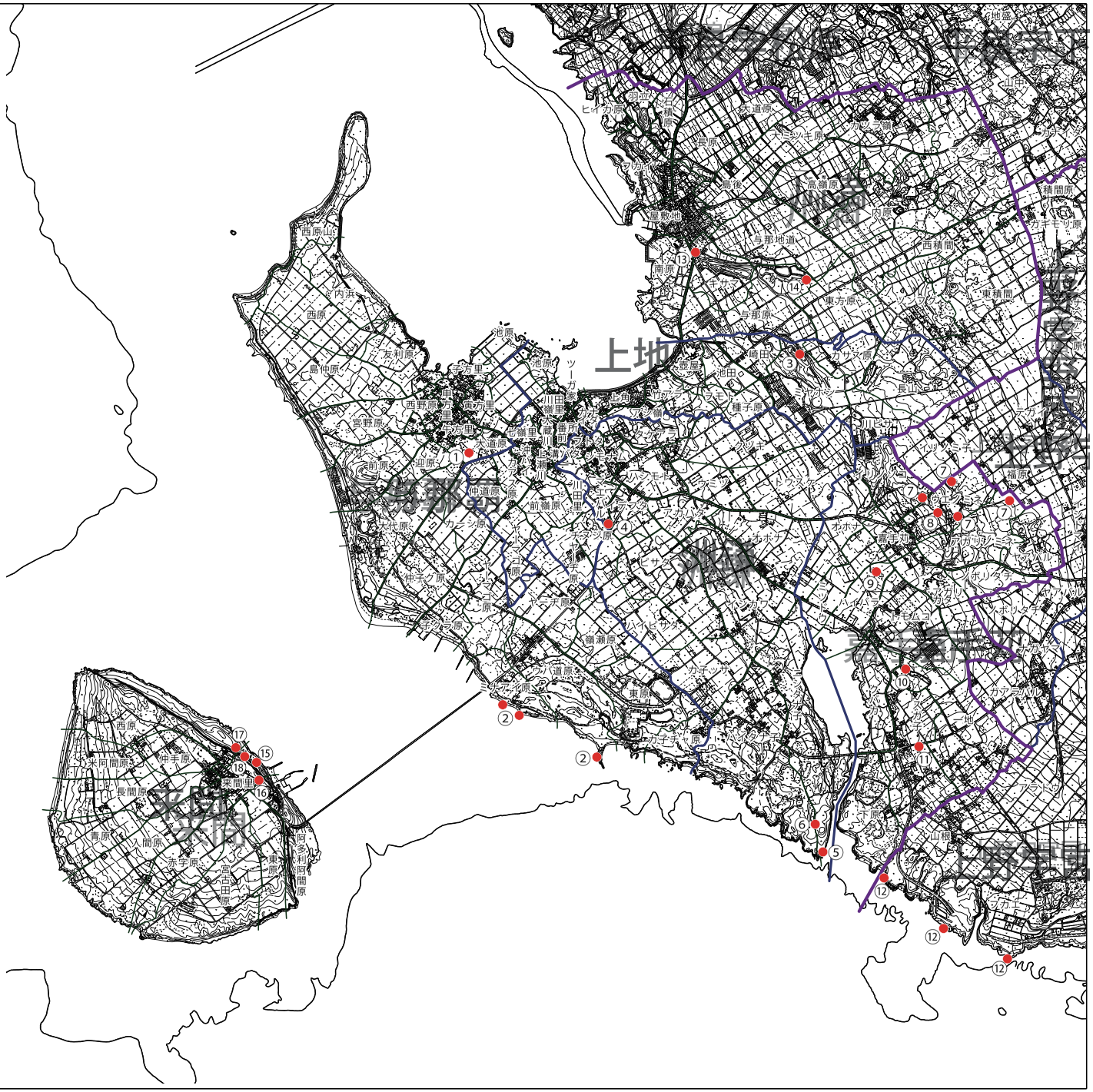
上地
- ③宮星山の陣地壕群

洲鎌
- ④ツヌジ御嶽の忠魂碑
- ⑤棚根の壕群
- ⑥外崎御嶽の壕

嘉手苅
- ⑦イリノソコの陣地壕群跡
- ⑧ウイヌンミ御嶽の壕
- ⑨嘉手苅ウプ御嶽の壕群
- ⑩嘉手苅一地の壕
- ⑪嘉手苅スガ子の壕
- ⑫山根海岸の壕群

川満
- ⑬ヌーズマー御嶽の壕
- ⑭川満与那原の壕

来間
- ⑮来間の山砲陣地壕群
- ⑯東の御嶽の蛸壺とヤマトゥガンの銃座
- ⑰チフサアブの住民避難壕
- ⑱来間里の壕群



令和元年度 宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書 (2)
伊良部地区分布図

感想とアンケート集計（ポスター展示場）

10 名の方からいただきました。

【アンケート】

１．今回の「下地・伊良部の戦争遺跡」パネル展の感想

・沢山の陣地があったことにびっくり。開発や時間の経過で崩落しているのがほとんどだが、その当時の計画が垣間見える感じです。このちいさな島も戦争となれば、作戦の１つとして利用されるんだと改めて思う。保良、上野と基地ができ、これから先不安を感ずる。（60 代・女性・平良）

・もう少し、拡大した写真がほしいです。よろしくお願いします。（60 代）

・宮古に多くの兵隊が常駐していたことうぃ聞きましたが、戦争遺跡の写真を見て、その事実の重みを感じました。戦争はくり返してはいけないと思います。（20 代、男性、平良）

・大変良く調査されていますね。残念な事は概況等の説明分が少し解りにくい点です。（60 代、女性）

・島の中にこれだけ避難壕があった事に驚いた。井戸を避難壕として利用していた？（50 代、女性、伊良部・平良）

・とても興味深く、勉強になりました。自分の住んでいる場所の事、歴史を知れてよかった。40 代、女性、下地）

・これほどの戦争遺跡があるとはビックリです。（60 代、男性、平良）

・現在、自分が住んでいる地区の事が知れ、新鮮な驚きでした。昔の地図で全然今と地名が違うのも興味深かったです。今でも近くに防空壕かなという所があるので、とても生々しかったです。（30 代、女性、平良）

・公共の場での展示は、たくさんの方の目にとまるので良い考えです。（50 代、女性）

２．これからの戦争遺跡の調査や活用の方法などについてご意見をお書きください。

・経験者が減っていく現状、早めに調査を進めていく必要があると思う。看板などして標示して壕の後を示したほうがいい。（60 代、女性、平良）

・市民向けにパンフ、DVD の作成。（20 代、男性、平良）

・平和教育（児童・生徒に限らず）に役立ててもらいたい。（60 代、女性）

・調査も必要だと思いますが、一般人にも広めてほしい情報だと思います。（50 代、女性、伊良部・平良）

・小学校で町探検をする授業があるので、そういう時、ぜひこういった場所を子ども達に見せて学ばせてほしい。（40 代、女性、下地）

・整備して観光資源として利用。（60 代、男性、平良）

・積極的に調査してゆくべき！調査し、石碑等を設置することによって、観光名所にする等、宮古島の名所を増やす。（50 代、女性）

講座アンケート集計

１．今回の講座に参加して感想。

・遺跡の保存のむずかしさ、周知のすすまない現状など課題が多くあることがわかった。
・宮古島内の他にも県内の事例も講演に含まれていたので、わかりやすかった。
・綾道の戦争遺跡編は全て行ってみました。今回の講座で今まで知らなかった遺跡もあったので、また自分の足で回ってみたいと思います。正直後半の沖縄本島の遺跡については、必要なかったと思う。その時間でもっと宮古島の話をして頂きたかったです。
・地元の戦争遺跡の状況について、新たな知識を得る事が出来ました。大変ありがとうございました。
・沖縄本島の事を聞けましたが、宮古島地上戦がありませんが、多くの兵隊が住んだ事と陣地が数多く有った事、人民の命を守るための苦労が見えました。
・興味深い内容で良かったです。今は草（雑草）でおおわれている所から想像以上の遺跡が出てくる事に歴史の事実を実感できるので、ぜひ調査を進めて、整備していってほしいと強く感じました。
・宮古でも戦争があったこと、多くの戦争遺跡があった事がわかったので、良かった。戦争遺跡の分類があることを知ったので、もう少し分類方法を知りたいと思った。
・沖縄本島、宮古の遺跡のちがいがわかった。宮古にも思っていた以上に残っているなと思った。遺跡等を活用して子ども達にもわかるような機会があればいいなと思う。
・勉強になりました。
・戦争遺跡の数をスライドで見せて貰い、まだ知らなかった所が多かったし、また、遺跡を見るととてもそまつな造りの中で住民がどれほど不自由な中で過酷な戦いを強いられていたのか想像を絶することが窺えた。色々と調査や発掘をしていただいた研究家の皆様の苦労に感謝をします。ありがとうございました。
・未知のことが多くて、とても勉強になりました。戦争遺跡ツァーをしてほしい。
・宮古に住んでまだ１年未満ですが、今回の講座を期に現場に行きたいと思いました。当時のことを考えると恐ろしい限りです。戦争はいけません。また、参加したいです。
・主催者側のねらいがわからなかったので、それを知る為に参加しました。戦争遺跡のもつ意味、その後の世代になにを求めて残すかわからない。調査の作業と動力には敬意を表します。
・

２．今後の戦争遺跡の役割についてのご意見。

・調べ上げた物を生かすので、後の時代の学習にあると考える。そのことを学びでの場（学校の教材の中）に取り入れる必要があるのでは？
・沖縄戦の体験者が減っていく中、戦跡は沖縄戦を語る上で重大な遺跡なので、具体的な保存・活用・整理を実施するべきだと思う。
・上陸作戦が無かった宮古島の戦争遺跡は世界的に見ても貴重なものであると思います。戦争遺跡

ツァー等、大々的に告知して開催すれば来島数の増加にも寄与できると思う。興味深い人は、壕などの中に入りたい。危険だからと禁止せず、ツァー客から保険料や整備協力金などの名目で集金して、万が一に備えた上で、内乱もできるようにすれば興味は大きくなる。その前段として、遺跡を巡るための草木伐採などの整備が必須。行政で定期的な整備をできる仕組みを作るべき。目に見える形としていけば、地元住民もより宮古島の素晴らしさが認識できると思います。現状の整備状況では、綾道上の遺跡は半分もみつけられませんでした。

・過去、宮古島で何が行われていたか歴史を知るとともに、島を守るために先人たちがどのような努力をしてきたかを学ぶ役割があると思います。
・大変ですが、子供達に近くて見えやすい戦争跡を慰霊の日前後に案内説明して頂ければ良いかと思います。希望です。宮古の人々はあまり知らないと思います。
・戦争を知るひとつの平和的手段だと思うので、しっかり整備し調査して残してほしいと思います。
・軍人墓も戦争遺跡ですか？個人が建てたかどうかによるのか？
・市・県指定されているのが少ないことに気づいた。早目に指定し、小中学校での学習にも活用できるようにしてほしい。体験者が少なくなっている現在、遺跡を通して平和の大切さを伝えるものとして保存していってほしい。学校でもこのような講話ができるようになるといいと思う。
・現場視察を可能な限り計画してほしい。
・戦争を体験したことのある世代がもうすぐ絶えようとしている今、戦跡を知ると共に次世代にどう受け継いで知らせていくかが課題である。小中高と…。今、この時期からでも戦争にまつわる歴史的な話や、戦争遺跡でどのような使い方をして住民や兵隊さん方の話などができる高齢の識者の方々から話を聴く機会を与えた方がよいと思う。
・後世に残していきたい。戦争を知らない世代に戦中の様子を伝えるためには必要だと思います。
・壕の公開が困難ならばCGにしてはどうだろうか。

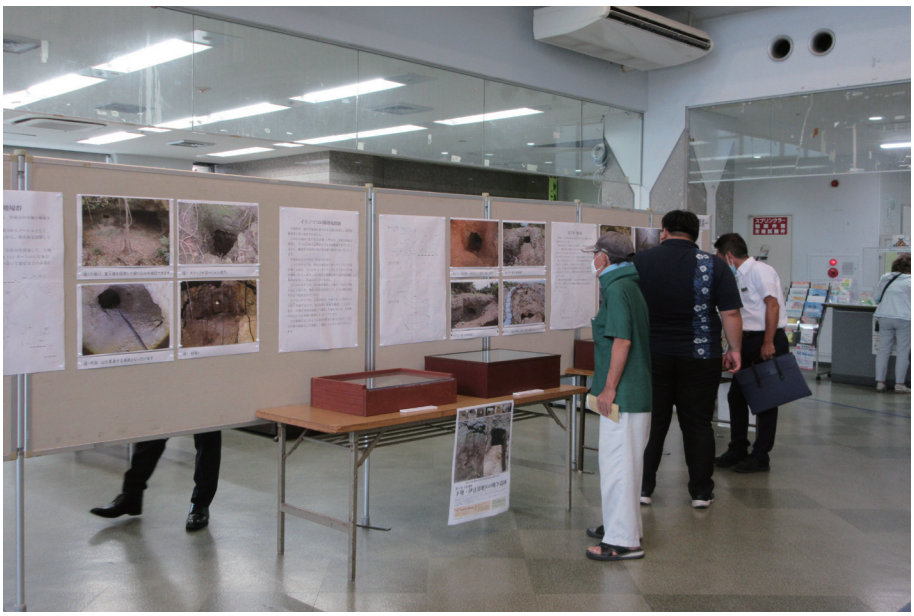
ご記入ありがとうございました。
アンケートの結果については、今後の講座の参考にさせていただき、記録集の中で紹介いたします。

13人の方からいただきました。

平良庁舎１階ロビー
パネル展準備作業

平良庁舎１階ロビー
パネル展準備作業

平良庁舎１階ロビー
パネル展準備作業



平良庁舎１階ロビー
パネル展
(2020.07.02 ～ 16)

平良庁舎１階ロビー
パネル展
(2020.07.02 ～ 16)

平良庁舎１階ロビー
パネル展
(2020.07.02 ～ 16)

未来創造センター
文化講座
講師　久貝弥嗣
(2020.7.11)

未来創造センター
文化講座
講師　山本正昭
(2020.7.11)

未来創造センター
文化講座風景
(2020.07.11)

（11）　2020年（令和2年）7月12日　日曜日

宮古毎日新聞

陣地壕の形状など説明

久貝さん 山本さん 「戦争遺跡」文化講座

2020年度地域の特色ある埋蔵文化公開活用事業第1回文化講座「下地・伊良部地区の戦争遺跡」が11日、市未来創造センターであり、市教育委員会の久貝弥嗣さんが調査した来間島の山砲陣地壕（ごう）群、下地上地の宮星山の陣地壕群などについて形状などを説明した。県立博物館・美術館主任学芸員の山本正昭さんは県内の戦争遺跡の調査と保全について話した。約30人の市民が2人の説明に聞き入った。

陣地壕など戦争遺跡について説明を聞く市民ら＝11日、市未来創造センター

講師の久貝さん（左）と山本さん

宮星山の陣地壕群は崎田川源流域の丘陵にあり、二つの壕と四つの銃眼が確認されている。二つの壕は隣接し、一つは総延長が111㍍にも及ぶ大規模な壕。嘉手苅の一地（ピトジ）壕は入江湾東方の丘陵の急斜面に掘られており、住民の避難用と考えられている。火をたくためのかまど部分と煙突があり、炊事場跡が確認されている。若干の灰も残されている。久貝さんは「一定期間、とどまることを目的とした壕と考えられる」と説明した。

山本さんは「戦争遺跡が遺跡として認識されたのは1980年代からで、1992年に行われた南風原陸軍病院壕の発掘調査が県内で初めて。県では2000年から06年にかけて分布調査が行われ、その後、確認調査も実施された」と説明した。県内では1554件の戦争遺跡があり、市町村の文化財に指定されているものは20件で、全体の1%強ほどだという。山本さんは沖縄本島や渡嘉敷島の砲台跡、陣地壕、水際陣地、住民避難壕、石碑を紹介した。

宮古新報

下地・伊良部の戦跡紹介

市教委文化講座　宮古に139カ所分布

宮古島市教育委員会は11日、市未来創造センターで宮古島の戦争遺跡に関する文化講座を開いた＝写真＝。市教委の久貝弥嗣さんと沖縄県立博物館・美術館の学芸員である山本正昭さんが講師を務め、写真とともに市内の戦争遺跡の特徴などについて解説した。

市教委では2016年から、市民とともに宮古島の歴史について考えることを目的に、県内外の研究者を招き、戦争遺跡の発掘調査の成果を公開する積極的に文化講座やシンポジウムを行っている。

久貝さんは18年から19年にかけて市教委が調査を行った下地地区と伊良部地区の戦争遺跡を紹介。この調査では、市内で初めての例となる下地地区の排煙機能を有する嘉手苅一地の壕や、他の地区では数少ない伊良部地区の住民避難壕が複数発見されるなど、新規で多くの戦争遺跡が確認されたという。

山本さんは宮古諸島においても139カ所の戦争遺跡が分布していることに触れ、▽政治・行政関係▽軍事・防衛関係▽生産関係▽戦闘地・戦場関係▽居住地関係▽埋葬関係▽交通関係―などに分類できるとした。

戦争遺跡が遺跡として認識されたのは1984年ごろから。山本さんによると、戦争遺跡を調査の対象としている自治体は多くはなく、現在でも未調査のまま開発などにより姿を消す戦争遺跡があるという。

吉野海岸海底沖遺跡の調査風景（船に積み込まれていた花崗岩が海底に散乱しています）

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第２回

「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」

【文化講座】

①8 月 20 日（木） 18:30 ～ 20:00

「海の遺跡から見る古代ギリシャとローマ～地中海の水中文化遺産～」中西裕見子（大阪府庁教育委員会）

②8 月 21 日（金） 18:30 ～ 20:00

「西欧列強の沈没船と宮古島 -HMS・プロビデンス号の調査 -」片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）

会　場：働く女性の家ゆいみなぁ・軽運動室

定　員：各 30 人（事前申し込み必要）

申込先：0980-77-8336（宮古島市教育委員会生涯学習振興課文化財資料室）

【関連展示】

会期：8 月 5 日（水）～ 8 月 23 日（日）

場所：宮古島市総合博物館・特別展示室

宮古島の水中文化遺産として、八重干瀬沖海底遺跡群第 1 地点（プロビデンス号の座礁・沈没海域）、吉野海岸沖海底遺跡（船名不明のイギリス船座礁・沈没海域）、高田海岸沖海底遺跡（ファン・ボッセ号の座礁・沈没海域）などの調査資料の展示を行います。入館料を必要とします。

問合せ先：宮古島市教育委員会生涯学習振興課文化財資料室（0980-77-8336）

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第２回（主催：宮古島市教育委員会）

「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」

吉野海岸沖海底遺跡巡検

吉野海岸沖海底遺跡とは

一八五三年、船名不明のイギリス船が宮古島吉野海岸沖で座礁・沈没しました。この船は、苦力貿易にかかわる船で、中国の広州から船員三〇名、苦力二四三名を乗せて出航し、アメリカのサンフランシスコへ向かう途中で、台風にあい、座礁・沈没して二四三名もの犠牲者がでました。吉野海岸沖には、沈没した船に積載されていた多量の花崗岩が現在でも海底に残されています。今回は、リーフ内で確認された花崗岩を巡検いたします。

日時：10 月 18 日（日）午前 10 時～午後 3 時
場所：城辺庁舎 2 階
日程：10:00 ～ 12:00　講座
「西欧列強の沈没船と宮古島 -HMS プロビデンス号の調査」
片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）
12:00 ～ 13:00　昼食（各自ご持参下さい）
13:00 ～ 14:30　吉野海岸沖海底遺跡巡検
15:00　解散
定員：20 名（事前申し込み制）
申込先：宮古島市教育委員会文化財史料室（0980-77-8336）

10 月 12 日（月）～ 10 月 16 日（金）の会期で、城辺庁舎 2 階会議室で宮古島の水中文化遺産の展示会を開催いたします〔入場無料〕。
ご来館の際には、マスクの着用等のご協力をよろしくお願いいたします。

写真は吉野海岸沖海底遺跡一帯

令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第2回（主催：宮古島市教育委員会）

「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」

展示パンフレット

目　次

はじめに …… 1
第１章　水中文化遺産について …… 2
1. 水中文化遺産とは …… 2
2. 宮古島市の水中文化遺産 …… 2
第２章　宮古島の水中文化遺産 …… 3
1. 来間島沖海底遺跡 -16 世紀前半の中国との交易船に関わる水中文化遺産 -…… 3
コラム① 正保国絵図にみる宮古島 …… 5
2. 八重干瀬海底遺跡群第 1 地点 - プロビデンス号の座礁・沈没海域 -…… 6
コラム② 異国船の時代 …… 10
3. 吉野海岸沖海底遺跡 -243 人が死亡した未曾有の海難事故と海底に残る多量の花崗岩 - 12
コラム③ 歴史史料にみる吉野海岸沖海底遺跡 …… 14
コラム④ 上原久雄さん手記『新城考』にみるオランダ船遭難 …… 16
コラム⑤ 陸上に引き上げられた花崗岩 …… 18
4. 高田海岸沖海底遺跡 - オランダ船ファン・ボッセ号の座礁・沈没遺跡 -…… 19
5. 島尻海岸の石切場 …… 21
6. 大浦湾の石切場 …… 21
7. 伊良部佐和田の浜の魚垣 …… 22

例　言

1．本展示パンフレットは、令和 2 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 2 回「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」にかかる展示パンフレットである。

2．展示会は、令和 2 年 10 月 12 日（月）～ 16 日（金）の会期で、城辺庁舎 2 階会議室で行った。

3．展示会における資料の借用及び、展示パネル・パンフレット内における写真提供などについては、下記の方々、関係機関にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

・プロビデンス号模型の借用：池間自治会
・調査写真、遺物の借用：沖縄県立埋蔵文化財センター：
・ドローン撮影：本村麻里衣（株式会社アーキジオパシフィック支店）
・吉野海岸沖海底遺跡の調査写真：片桐千亜紀
・「新城考」及び吉野・新城に関する聞き取り調査：上原久雄

表紙は、吉野海岸沖海底遺跡での遺跡巡検風景写真（本村撮影）

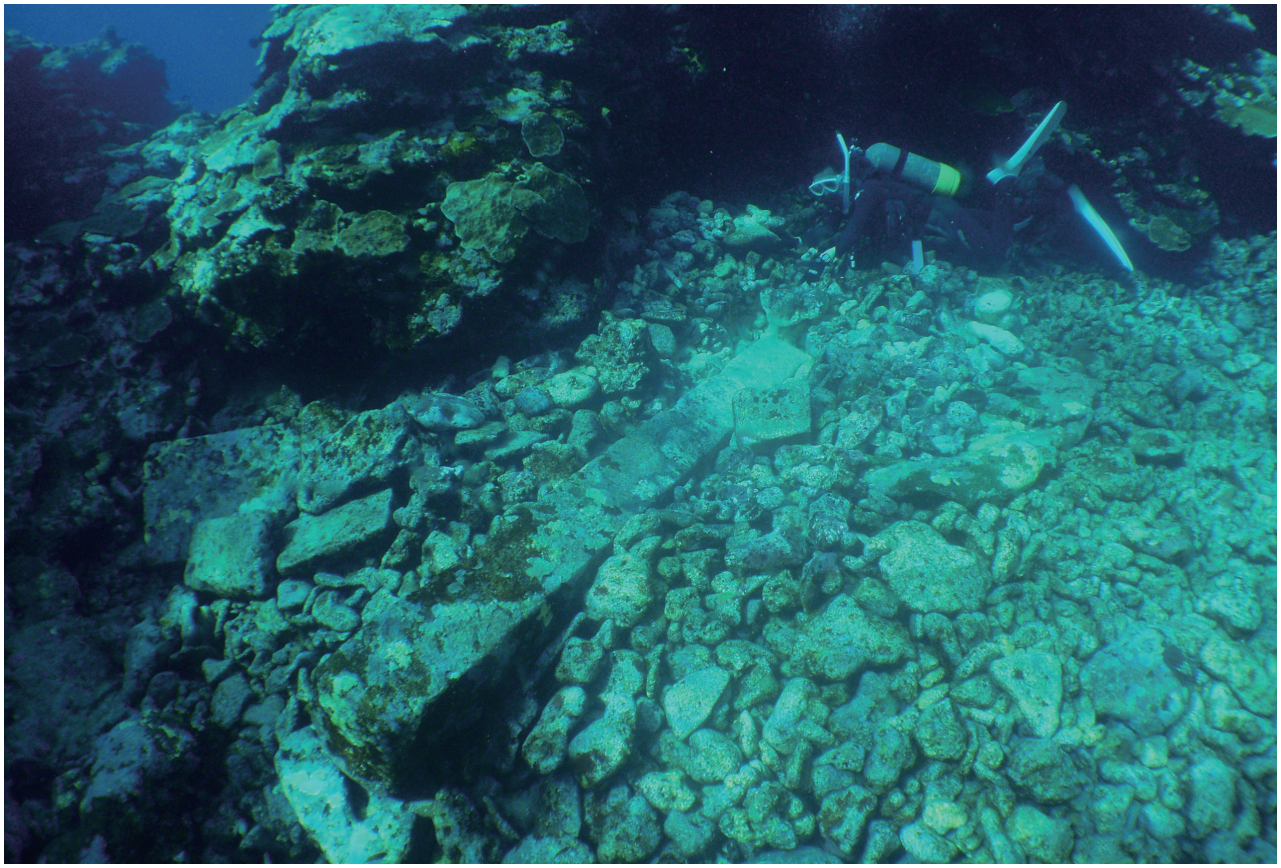
はじめに

四方を海に囲まれた沖縄の島々にとって、海は食料を獲得するための生業の場であり、他地域との交易を行う商業の場でもあります。

琉球王国の時代には、万国津梁の鐘に象徴されるように、日本、中国、東南アジアをまたにかけた一大交易国として繁栄を築きあげました。やがて19世紀になるとオランダやイギリスなどの西欧諸国がアジア地域への支配権の拡大をはかるため、沖縄の島々の海域をも行き来するようになります。宮古島市においても、八重干瀬で座礁・沈没したプロビデンス号や、宮国沖でのドイツ商船ロベルトソン号などがよく知られています。

沖縄県においては、これらの水中文化遺産に関する調査が沖縄県立埋蔵文化財センターによって実施され、宮古島市内で22、多良間村で3つの水中文化遺産が確認・報告されています。

今回、宮古島市教育委員会では、地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業の一つとして、宮古島市の水中文化遺産に焦点をあてた、展示会、講座、遺跡巡検を開催いたします。これらの活動をとおして、宮古島市内および多良間村の水中文化遺産を紹介し、理解を深めていくとともに、これらの水中文化遺産の今後の活用などの取り組みについても考えていく機会になれば幸いに存じます。



吉野海岸沖海底遺跡の調査風景（写真：沖縄県立埋蔵文化財センター提供）

１．水中文化遺産とは

【ユネスコの定義】

水中文化遺産とは、文化的、歴史的又は考古学的性質を有する人間の存在のすべての痕跡であって、その一部又は全部が定時的又は継続的に少なくも百年間水中にあったものをいう。

【文化庁の定義】

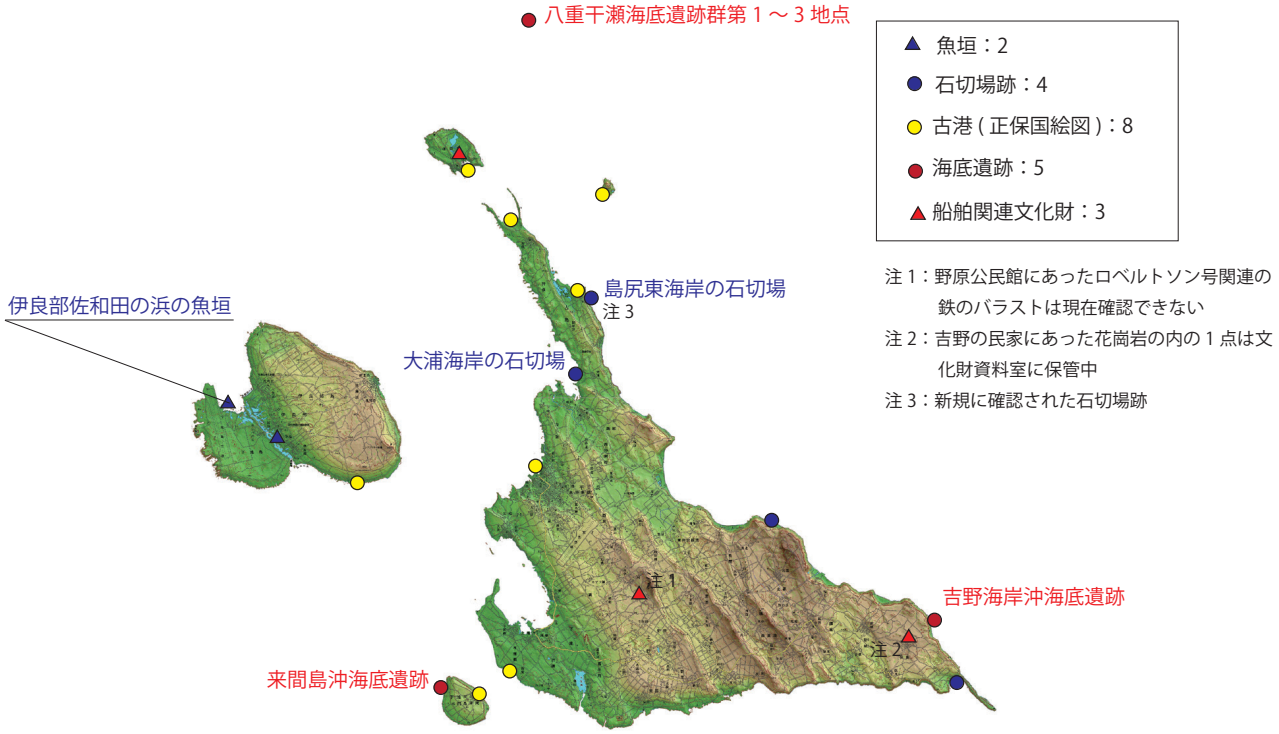
水中考古学の対象となる「水中遺跡」とは、水面から遺跡までの水深に関係なく「常時水面下にある遺跡」と定義する。

具体的には次のようなものが水中文化遺産としてあげられます。

1．海難事故に伴う沈没船や、船の積み荷などの遺物が散布している場所
2．港として利用されていた港湾遺跡など
3．石切り場、石干見（いしひみ）、塩田（えんでん）などの生産遺跡　　＊石干見：沖縄県内では魚垣とも呼ばれる
4．海面や地殻変動により水中に沈んだ遺跡
5．本来は海底にあったものであるが、現在は陸に引き揚げられている碇石（いかりいし）や鉄錨（てつびょう）など

２．宮古島市の水中文化遺産

沖縄県立埋蔵文化財センターなどの調査により、宮古島市内では魚垣 2、石切場跡 4、古港 8、海底遺跡 5、船舶関連文化財 3 の総計 22 の水中文化遺産が報告されています（『沖縄県の水中遺跡・沿岸遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 年）。



宮古島市内の水中文化遺産位置図

16 世紀前半の中国との交易船に関わる水中文化遺産

来間島沖海底遺跡（くりまじまおきかいていいせき）

【遺跡の概要】

来間島沖海底遺跡は、来間島の東側の海域に広がる水中文化遺産で、宮古島市内では唯一のグスク時代の遺跡です。海岸から海底（水深約５m）にかけては、16 世紀前半と考えられる中国陶磁器が散乱しています。

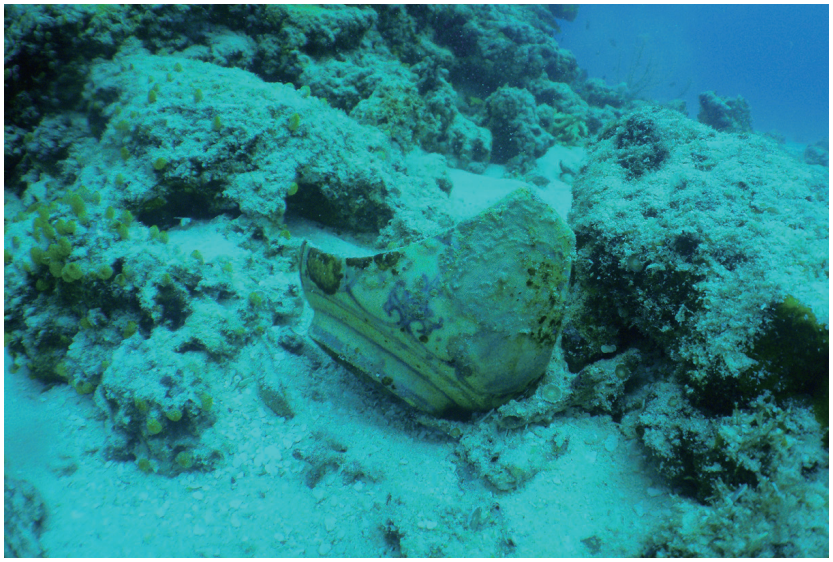
本遺跡は、中国陶磁器を満載した船が、この海域近くで海難事故に遭い座礁・沈没したか、それを避けるために積荷の投棄を行った結果、形成された遺跡と考えられています。遺跡から確認される中国産陶磁器では、青花が主体となり、青磁や白磁は少ないという特徴がみられます。陶磁器は広大な海域に散乱することから、長い年月海底に露出していることがわかります。

＊グスク時代：沖縄考古学の時代区分の名称で、11 世紀後半から 1609 年の薩摩侵攻までの年代をあらわします。

▲遺跡遠景

▲砂浜で確認された青花　＊展示

▲海底で確認された青磁　＊展示



▲海底で確認された青花　＊展示

▲海中での調査作業風景

本頁の写真は全て沖縄県立埋蔵文化財センター提供

来間島沖海底遺跡出土の青花

青花とは、白い素地に青色顔料のコバルトを使って文様などを筆で描き、その上から透明の釉をかけて高温で焼かれた陶磁器です。来間島海底沖遺跡で確認された青花は、今から約 400 年前の 16 世紀前半に中国で焼かれた陶磁器です。

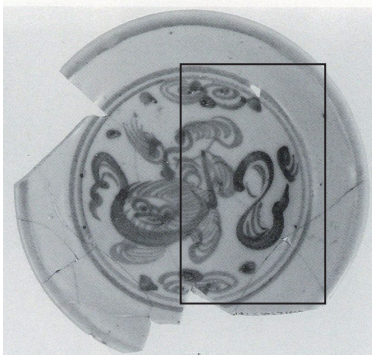
青花の文様は、時代や産地によっても違ってきますが、一つ一つが手で描かれたもので、当時は高価な焼物として、中国から沖縄諸島に交易品として持ち込まれました。ここでは、展示されている資料もみながら、青花の文様の名前についてみていきましょう。

【玉取獅子文（たまとりじしもん）】▶

雌雄の獅子が戯れるうちに、毛が玉になり、中から児獅子が生まれるとされ、強い男子を得る吉祥文です。

＊吉祥文とは、縁起がいいとされる動植物などを描いた文様です。

獅子のお尻の部分
＊右の□の部分にあたる



（参考）湧田古窯跡から出土した玉取獅子文の皿

▲**【牡丹唐草文（ぼたんからくさもん）】**
牡丹は、花の王として富貴を象徴する吉祥文です。

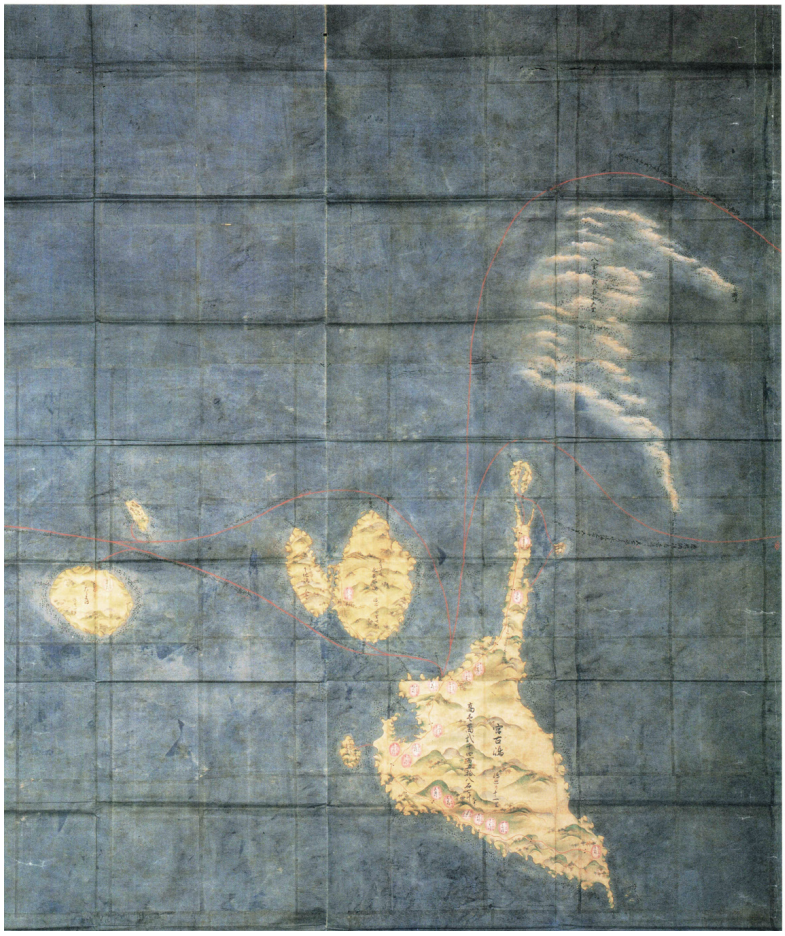
【波濤文（はとうもん）】
大波をあらわした文様。

【アラベスク文】
アラビア風の装飾模様で、文字・蔓草・幾何学図形などを図案化したものです

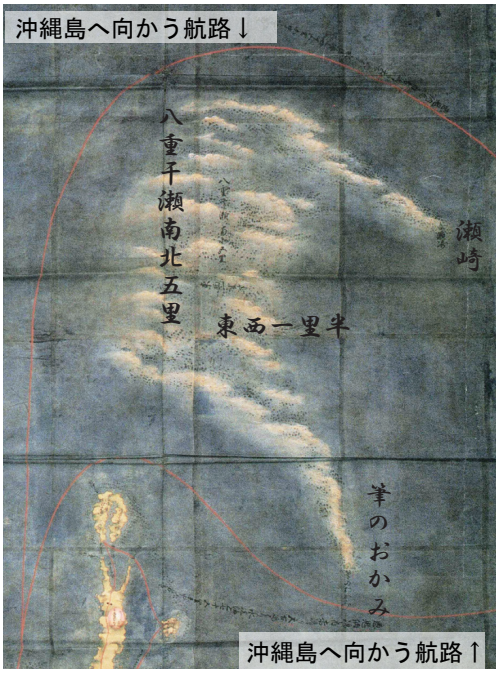
【花文】
碗の底の部分には、様々な形をした花の文様が描かれています。花の文様の種類までは分かりませんが、真ん中の花の文様は、４つの花弁を十字の形に配置した十字花文と呼ばれます。

【コラム①】 正保国絵図にみる宮古島

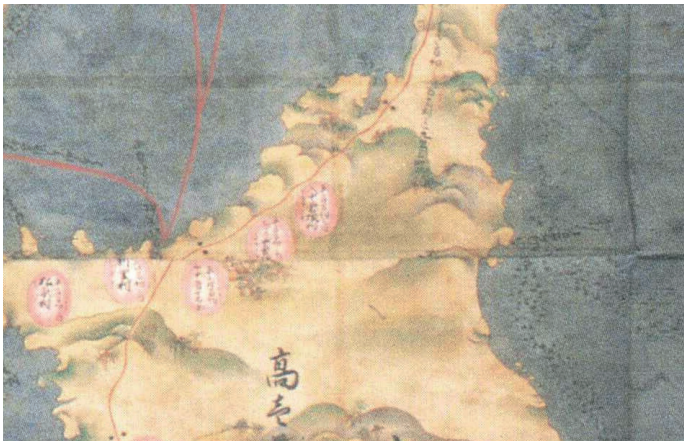
正保国絵図（しょうほくにえず）は、江戸幕府３代将軍の徳川家光（とくがわいえみつ）が、寛永（かんえい）21(1644) 年に、諸国の大名に、命じて作成させた絵図です。この絵図の中には、当時の集落の位置や、各集落の生産高に加え、島々を結ぶ航路や港の情報などが記されています。また、海岸部のリーフの形成状況なども示されています。



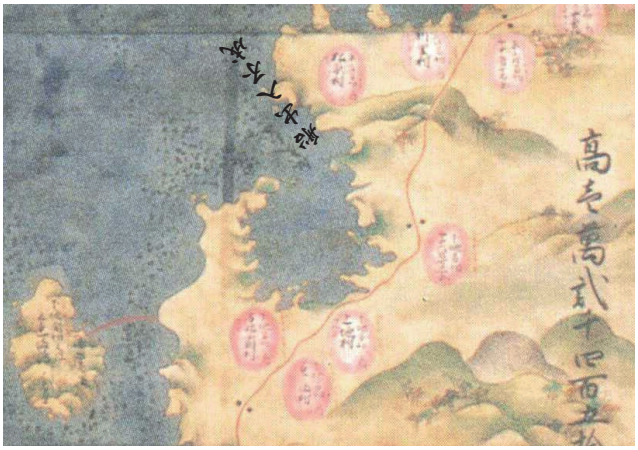
▲〔島津領国絵図〕正保琉球国絵図写宮古嶋　東京大学史料編纂所所蔵



▲八重干瀬部分の拡大
八重干瀬を避けて、沖縄島へ向かう航路が八重干瀬の南北に記されています。船での航海時に八重干瀬が非常に危険な海域であったことが読み取れます。



▲漲水浜（現在の平良港一帯）の拡大
漲水が当時の宮古島の港湾の中心地であり、沖縄島や八重山への航路の起点になっています。



▲与那覇湾部分の拡大
与那覇湾については、「船の出入りができない」と記されています。

イギリスの軍艦プロビデンス号の座礁・沈没海域

八重干瀬海底遺跡群第１地点

（やびじかいていいせきぐんだい１ちてん）

【遺跡の概要】

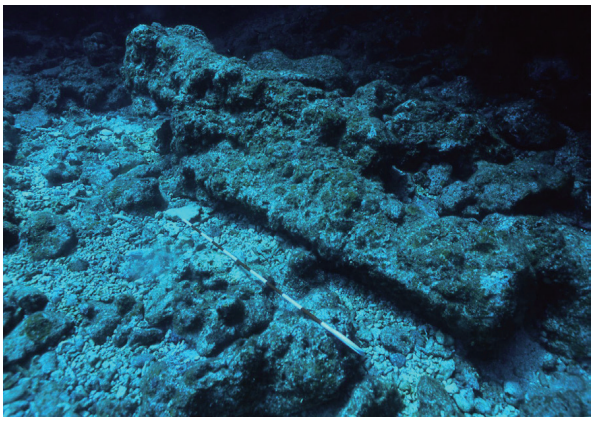
1797 年、イギリス軍艦プロビデンス号が宮古島沖の八重干瀬で座礁・沈没しました。この船は太平洋海域の探検調査のためにイギリスを出発し、1796 年に千島と北海道を調査し、１度マカオに寄港した後、２回目の調査に出かけた際、八重干瀬で海難事故にあっています。

プロビデンス号の航海については、艦長のブロートン(W. Robert Broughton)の著した『北太平洋探検航海記』(1804 年刊) があり、その詳細を知ることができます。

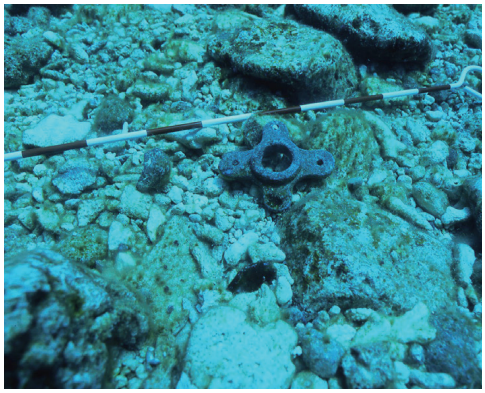
沖縄県立埋蔵文化財センターによる海底調査の結果、忘れられていた座礁地が特定され、水深約 13 メートル～ 25 メートルの海底で清朝磁器、ヨーロッパ製ガラス瓶、ビーズ、鉄塊といった積荷や船体の残骸が確認されました。

＊清朝：中国の清の時代 (1636 年～１９１２年) を示します。

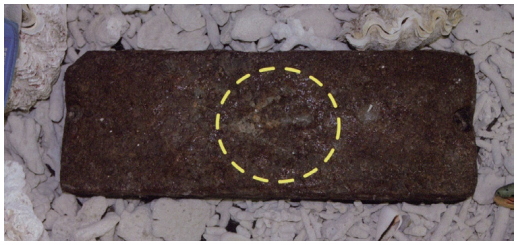
▲水中での作業風景



▲海底に散乱する鉄塊　池間島では同様の鉄製品が引き揚げられています。

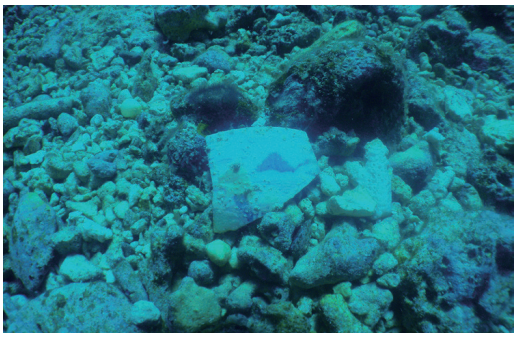


▲銅製品

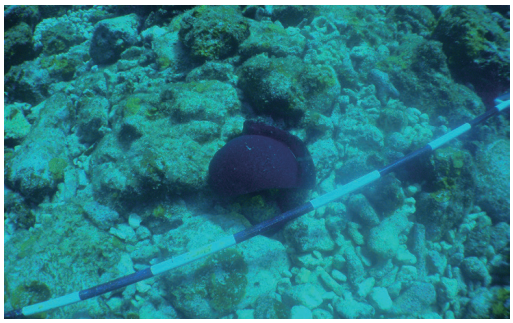


▲海底から引き揚げられた船体のパーツ (写真左) や、鉄塊 (写真右) 刻印された \|/ のマーク (○の部分) は、イギリス海軍 (HMS) を示すものです。　＊展示品もごらん下さい。

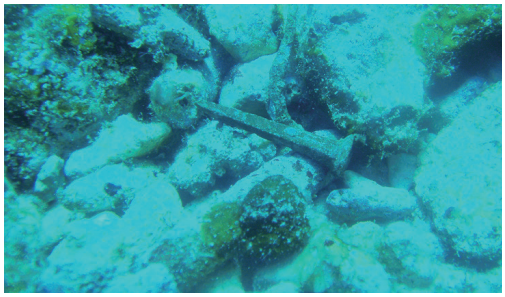
本頁の写真は全て沖縄県立埋蔵文化財センター提供



▲清朝青花　＊展示　写真は沖縄県立埋蔵文化財センター提供



▲ワイン瓶　＊展示　写真は沖縄県立埋蔵文化財センター提供



▲銅釘　＊展示　写真は沖縄県立埋蔵文化財センター提供

▲プロビデンス号複製　〔池間自治会収蔵〕

プロビデンス号は、全長 33m、幅 9m で 16 の砲門を有する乗組員115人の４００トンのスループ型の帆船です。船体には銅板が打ち付けられています。

明治・大正期の新聞には数件ですが、沈没したプロビデンス号のものと思われる遺物が引き上げられていることが記されています。

①「琉球新報」〔明治 35(1902) 年 11 月 19 日〕

西洋形旧式錨二挺（長さ、一挺は二間 (3.6m)、一挺は二間 1 尺 (3.9m)）が池間の島民によって引き上げられた状況が記されています。

＊ 1 間：1.8m、1 尺：0.3m とした。

②「琉球新報」〔明治 40(1907) 年 10 月 29 日

海底八尋 (14.4m) 余のところにおいて、重量八百斤 (480kg)、長さ五尺 4 寸 (1.6m)、砲口直径五寸 (24 ㎝) 余の大砲を発見し、早速人を集めて池間村に陸揚げしたという。

＊ 1 尋：1.8m、1 斤＝ 0.6kg、1 尺：0.3m、1 寸：0.03m とした

③「先島新聞附録宮古号」〔大正 7(1918 年)2 月 15 日

（中略）大砲の筒とか錨とかそのほか銅鉄などザット数えて百六、七十本は一カ所に埋まって見える。

参考資料『国指定名勝及び天然記念物 八重干瀬保存活用計画策定宝庫国書』(宮古島市教育委員会 2016 年より)

プロビデンス号の航路

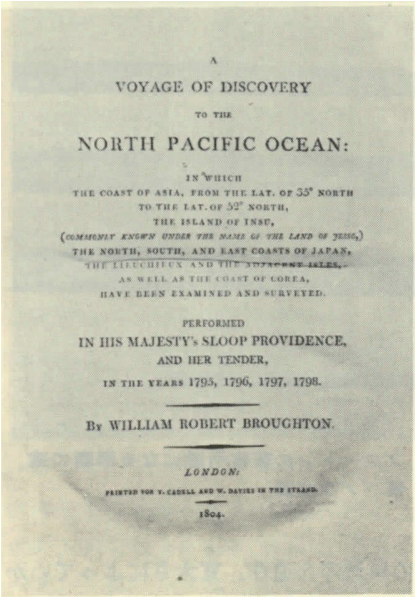
▲ ブロートン
『琉球異邦典籍と史料』山口栄鉄 2000 年より

ブロートンを艦長とするイギリス軍艦プロビデンス号は、アジア大陸側の北太平洋海域の探検調査を目的として、１７９５年２月にイギリスののプリスマ港を出帆します。

イギリスを出帆した後は、大西洋にでて南アメリカの喜望峰をまわって、太平洋にでます。その後、1796 年の３月には、タヒチ及びサンドウィッチ諸島（ハワイ群島）に着き、８月にはこのサンドウィッチ諸島を出発してアジアの北方海域へと向かいます。

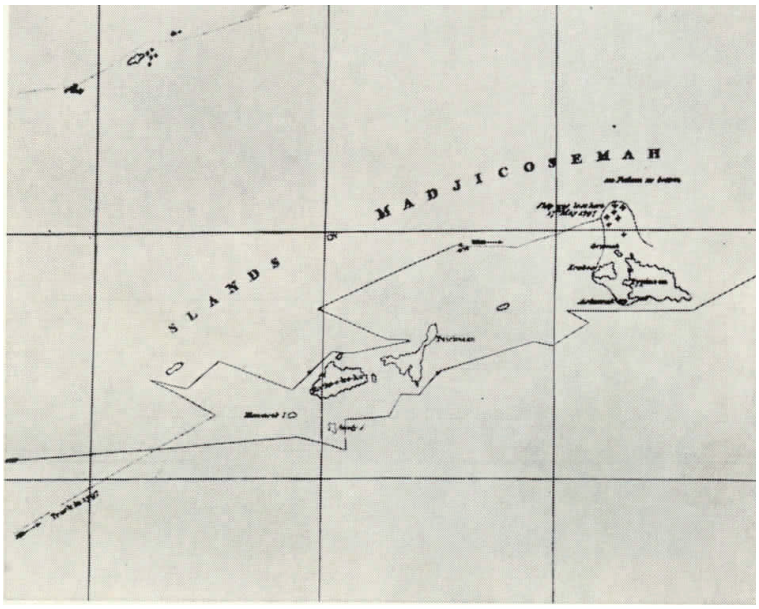
１７９６年の９月には北海道を確認し、さらに北海道の東海岸線沿いに北上して、千島列島にまで到達します。千島での探検を終えてからは、日本列島を東海岸線沿いに南下して１７９６年 12 月にマカオに寄港して第１回目の調査を終了します。

第２回目は、日本列島や、日本海、オホーツク海での探検調査を目的に、1797 年４月にマカオを出帆します。この時、スクーナー型帆船１隻を購入し、随伴させます。マカオから台湾を経て渡航していた５月 17 日にプロビデンス号は八重干瀬に座礁・沈没してしまいます。ブロートンら乗組員は、随伴していたスクーナーに乗り移り、宮古島に上陸して多くの物資（大麦 50 袋、コメ 20 袋、甘藷３袋、牛１頭、大豚６頭、多数の鶏など）の援助をうけます。ブロートンらののったスクーナーは、宮古を離れた後に八重山諸島、台湾まで南下し、台湾を迂回して再び東シナ海を北上していきます。そして、７月１０日那覇港へと入港します。

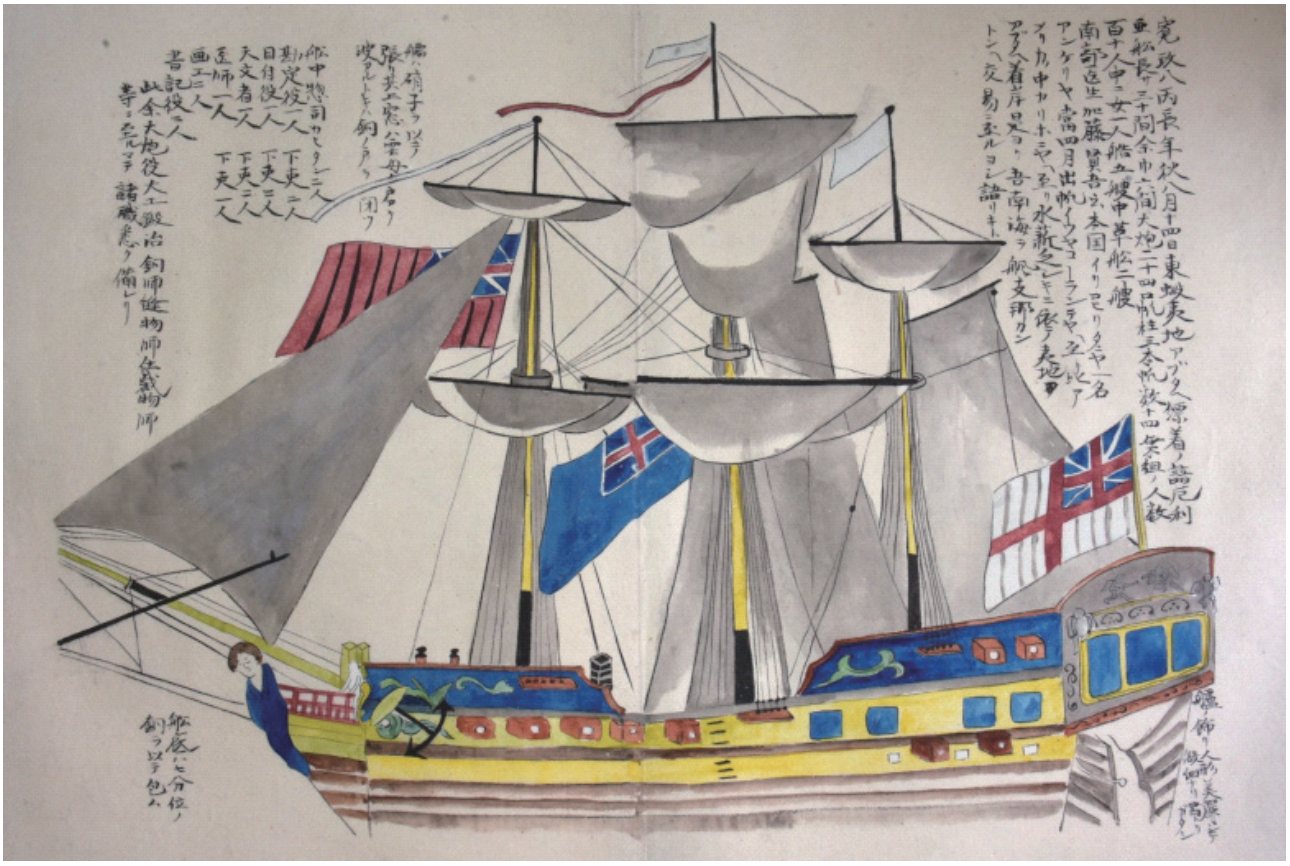


A
VOYAGE OF DISCOVERY
TO THE
NORTH PACIFIC OCEAN:
IN WHICH
THE COAST OF ASIA, FROM THE LAT. OF 35° NORTH
TO THE LAT. OF 52° NORTH,
THE ISLAND OF INSO,
(COMMONLY KNOWN UNDER THE NAME OF THE LAND OF YESSO,)
THE NORTH, SOUTH, AND EAST COASTS OF JAPAN,
THE LIEUCHIEUX AND THE ADJACENT ISLES,
AS WELL AS THE COAST OF COREA,
HAVE BEEN EXAMINED AND SURVEYED.
PERFORMED
IN HIS MAJESTY's SLOOP PROVIDENCE,
AND HER TENDER,
IN THE YEARS 1795, 1796, 1797, 1798.
By WILLIAM ROBERT BROUGHTON.
LONDON:
PRINTED FOR T. CADELL AND W. DAVIES IN THE STRAND.
1804.

▲ ブロートン著『北太平洋航海踏査録』『異国船琉球来航史の研究』大熊良一１９７１年より



▲ ブロートンの航海図
『異国船琉球来航史の研究』大熊良一１９７１年より



▲松前藩に来航した際のプロビデンス号を描いた図　「蝦夷の島踏 2」（函館市中央図書館所蔵）
絵図のなかにも大砲がえがかれ、船首にはフィギュアヘッドも描かれています。

交流都市・北海道室蘭市

平良市 (現「宮古島市」) と室蘭市は、約 200 年前に日本を訪れた英国の探検船プロビデンス号の室蘭への寄港、その後平良市沖での座礁という歴史的な出来事を共有していることが縁で交流が始まりました。

1996年(平成10年)9月に室蘭市で行なわれたプロビデンス号来航 200 年記念祭に平良市から参加、翌年平良市で行なわれた同様の催しに室蘭市から参加などを経て、1998 年 (平成 10 年)「スワンフェスタ '98 室蘭」に参加のため、平良市から市長一行が来蘭されたのを機会に、「海と船のロマンが結ぶ交流都市」として、交流都市締結を行ないました。(室蘭市ホームページより引用)

▲『プロビデンス号と八重干瀬』
プロビデンス号来航 200 年記念実行委員会 1997 年発行

【コラム②】 異国船の時代

19 世紀にはいると西欧諸国のアジアへの支配権の拡大や、アメリカでのゴールドラッシュに伴う中国人労働者（苦力）の確保・輸送が活発化し、宮古島をはじめとする県内の海域で西欧諸国の船が多くみられるようになりました。これらの船の中には、情報の少ない海域での航海で、座礁・沈没することもありました。

『宮古島在番記』や『球陽』の中には、これらの異国船に関する記事が下記の年表のとおり多数掲載されています。特に 1840 ～ 1870 年には多くの異国船が宮古島にも漂着、来着していたことが分かります。

（＊沖縄・八重山諸島にきた異国船関係については一行下げています）

▲ バジル・ホール
『琉球異邦典籍と史料』山口栄鉄 2000 年より

１７０８年　５月７日に異国船が「タフコシ」という浜に漂着、５月 14 日に自ら出帆していった。

1730 年　異国人が漂着するが詳細は不明

1756 年　６月 22 日に異国小船が多良間島に漂着。

1797 年　太平洋海域の探検調査中にプロビデンス号（イギリス軍艦）が八重干瀬で座礁・沈没

1800 年　７月 18 日異国船が漂着、８月 11 日に東南の方向へ立ち去った。

1816 年　バジル・ホール率いるアルセスト号の来琉。

1827 年　イギリス艦ブロッサム号（艦長ビーチ）が来琉。

1840 年　アヘン戦争が始まる（～ 1842 年）

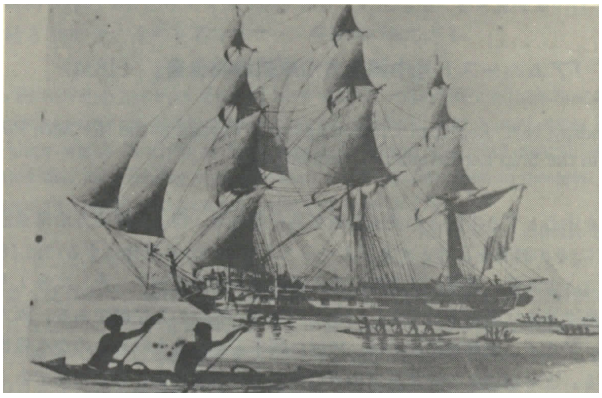
1843 年　サマラン号（艦長ベルシャー）1 ～ 2 月頃、宮古島に約 2 週間滞在

1843 年　４月 10 日、阿蘭陀船（イギリス船）一艘が多良間島に来着

1843 年　12 月 1 日、阿蘭陀船（イギリス船）一隻が来着

1844 年　３月２日、阿蘭陀船一艘が多良間島に漂着。乗組員の何名かが伝馬船で上陸

▲ ビーチ
『琉球異邦典籍と史料』山口栄鉄 2000 年より



▲ ブロッサム号
『琉球異邦典籍と史料』山口栄鉄 2000 年より

▲ ベルシャーが見た八重山の家屋と住民
『琉球異邦典籍と史料』山口栄鉄 2000 年より

1845 年　異国船一艘が宮古島に近づき、伝馬船（でんません）で伊良部島に上陸。

1850 年　異国船が漂着し、那覇まで送り届けられた。

1852 年　石垣島崎枝赤崎沖でイギリス船ロバート・バウン号が座礁・沈没。

1853 年　新城村の「後ノ浦」に異国船が一隻漂着し破損した。

1853 年 5 月 26 日ペリーが来琉（＊ 1854 年琉米修好条約締結）

1853 年　8 月 21 日、「大英国火輪船」が宮国沖に現れ、1853 年の漂着人を乗せて帰った。

1854 年　ロシア艦隊（プチャーチン提督）の来琉。

1855 年　フランス海軍が来琉（＊ 1855 琉仏条約締結）。

1857 年　多良間島に異国船が漂着し破損。乗組員 26 人が伝馬船で上陸。

1860 年　異国船一隻が久貝村の「南表浜」から 3 里ほどのところに座礁した。乗組員 (中国人と阿蘭陀人)30 人ほどで、船に積んであった伝馬船の乗り移り南西の方へ去った。

1869 年　池間村の八重干瀬にイギリスの船が座礁し、8 人が上陸し、伝馬船を所望し、8 月 18 日に中国へ向かって出帆

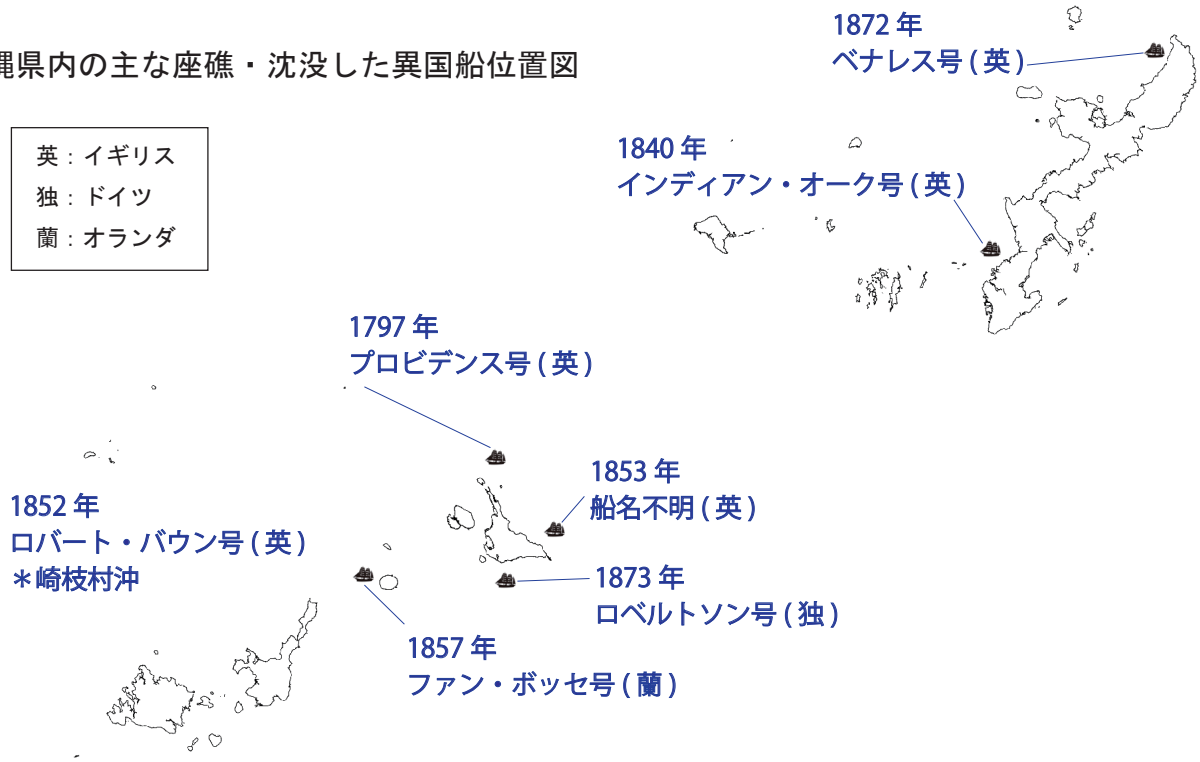
1869 年　10 月、フランス船が八重干瀬に座礁し、フランス人 10 人、中国人 5 人が上陸。港に停泊していた馬艦船を所望し、1870 年 3 月 18 日に中国へ向けて出帆

▲ ドイツ皇帝博愛記念碑

1873 年 6 月、ドイツ商船ロベルトソン号が宮国沖で座礁。

＊『宮古島市史第 1 巻通史編 みやこの歴史』第 8 章異国船対策と漂着 (平良勝保) を参考

沖縄県内の主な座礁・沈没した異国船位置図



243 人が死亡した未曾有の海難事故と海底に残る多量の花崗岩

吉野海岸沖海底遺跡（よしのかいがんおきかいていいせき）

【遺跡の概要】

1853 年、船名不明のイギリス船が宮古島吉野海岸の沖で座礁・沈没しました。この船は苦力（くーりー）貿易にかかわる船で、中国の広州（こうしゅう）から船員 30 名、苦力 243 名を乗せて出港し、アメリカのサンフランシスコへ向かう途中に海難事故にあいました。この事故の生存者は船員６名と苦力24名のみで、船員 24 名と苦力 219 名の計 243 名が死亡するという悲惨（ひさん）な海難事故であったようです。

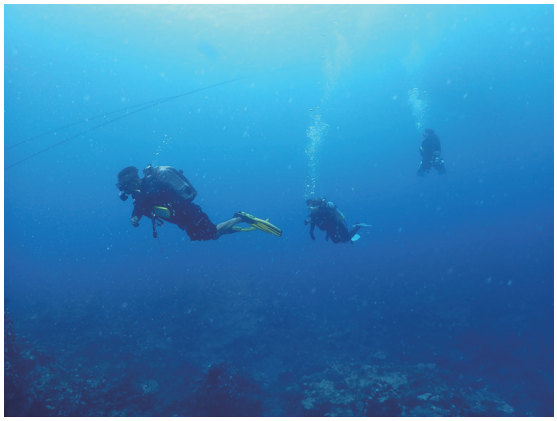
沖縄県立埋蔵文化財センターによる海底調査の結果、水深約５メートルの海底から浅いリーフ内にかけての海底には、おびただしい量の巨大な方形花崗岩石材（ほうけいかこうがんせきざい）や船体の残骸（ざんがい）である船底に張られた銅板（どうばん）が確認されています。

また、吉野集落の民家等には過去に海底から引き揚げられた方形花崗岩石材が置かれています。採集された資料は沖縄県立埋蔵文化財センターで保管されています。

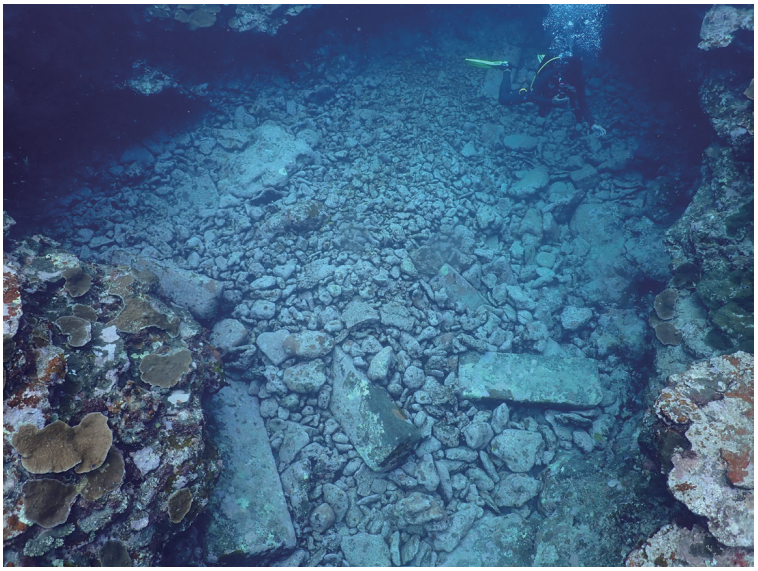
＊苦力とは、中国人の労働者のことをいいます。

◀ 遺跡の遠景
吉野海岸の北側が遺跡の範囲になります。

遺跡の遠景 ▶
干潮時には、リーフ内でも船の積荷であった花崗岩を確認することができます。
＊サンゴが多く生息する場所でもあるので、サンゴを踏まないようにきをつけましょう。
（写真：本村氏提供）

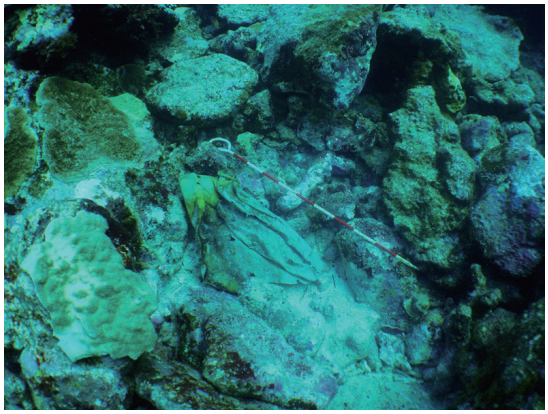


▲水中での調査風景（写真：片桐氏提供）



海底に散布する花崗岩 ▸
（写真：片桐氏提供）

▲水中での調査風景
海底には、長細いものや、四角形のものなど様々な形態の花崗岩を確認することができます（写真：片桐氏提供）。



▲海底で確認された銅製品　＊展示
船体の外面に打ちつけられていたと考えられる板状の銅製品。海底からは、その他にも陶磁器の破片などが採集されています。（写真：沖縄県立埋蔵文化財センター提供）

▲リーフ内で確認された花崗岩

▲砂浜に打ちあげられた花崗岩

【コラム③】 歴史史料にみる吉野海岸沖海底遺跡

吉野海岸沖に座礁・沈没したイギリス船については、『宮古島在番記』、『宮古島取調書』、『球陽』、『歴代宝案』、『宮古島近古文書』の５つの歴史史料の中に記述が確認されています。琉球王府が編纂した歴史史料『球陽』の中では、1853 年の吉野でのイギリス船の座礁・沈没事件について、次のように書かれています。

【球陽】

九三　六年癸丑宮古島有暎咭唎國船一隻漂来　503

此年暎船一隻漂到宮古島擱礁擊砕只有華人二十二名女人二名暎人六名上岸活命其余溺死洋中随将其由告諭留國暎人泊徳令知照該令云今有亜美理堅火輪船到来応勧亜官飛赴該島接取難人等同籍未幾該亜船開洋赴島為此特遣大夫鄭良佐与儀通事親雲上通事林仙芝石原通事親雲上暨胥役等前赴該島會同在番辨理諸務

『平良市史第三巻資料編一前近代』より抜粋

【意訳】

（尚泰王）六年癸丑、宮古島にイギリス船一隻が漂来

この年（一八五三年）、イギリス船一隻が宮古島に漂着し、珊瑚礁（リーフ）にぶつかり沈没した。中国人の男二二人と、中国人の女二人と、イギリス人六人が上陸して命が助かった。その他の人は、海の中で溺死してしまった。このことを、沖縄島に滞留しているイギリス人ベッテルハイムに伝え、その対応について意見をもとめた。ベッテルハイムは、今アメリカの汽船が（沖縄島）に来ている。このアメリカの汽船に宮古島に行ってもらい、漂着した人々を回収してもらった方がよい。ほどなくしてアメリカの船が宮古島へ赴いた。そのため、大夫として与儀通時親雲上、通時（通訳）として石原通時親雲上を宮古島に派遣し、在番とともに職務を行ってもらうようにした。

この史料の中では、２つの歴史的な人物との関わりが記されています。

①泊徳令（ベッテルハイム）

ベッテルハイムは、1846 年にイギリス海軍琉球伝道会の宣教師として琉球にやってきます。1854 年に琉球を離れるまでの８年間、キリスト教の布教や、医療の普及に力をそそぎました。

▲ベッテルハイム

▲ペリー

いずれも『琉球異邦典籍と史料』山口栄鉄 2000 年より

②ペリーの来琉

『球陽』に記された「御地来着ノ亜国火輪船」は、１８５３年５月 26 日に来琉していたペリー艦隊の船であると考えられます。ペリーは、７月２日に江戸に向かって発ち、７月 25 日には那覇にもどっていました。那覇にいた艦隊の一隻が宮古島に向かうものの、船が大きすぎて宮古島にはいることができませんでした。そこで香港に滞留しているイギリス人らににこのことを伝えて、イギリスの船が漂着し生存していた人々をむかえにきたとされています。

『宮古島近古文書』のなかでは、他の資料と比べて座礁・沈没から帰国までの経過が詳細に記されており、生存者は新城だけではなく、島尻や白川浜にも漂着していたことが分かります。『宮古島近古文書』については、平良勝保（たいら かつやす）さんによりその内容が詳しく解説されており、その概要についてご紹介いたします。

①経過

5 月 23 日　カリフォルニアへ向けて、広東省広州（かんとんしょうこうしゅう）を出帆。

6 月 13 日　台風にあう

6 月 17 日　午時分（昼 12 時頃）、新城村の北海岸に漂着

酉時分（夕方 6 時頃）、平良尓（にや）也が発見。

夕方に 5 人（唐人男 4 人、女 1 人）、夜に 18 人（唐人男 12 人、阿蘭陀人 6 人）が新城村の海岸に漂着

6 月 18 日　辰時分（午前 8 時頃）、島尻村に唐人男 2 人が民家にあらわれる

七時分（午後 4 時頃？）、白川浜に唐人男 3 人、唐人女 1 人が上陸

8 月 21 日　生存者の救出のために下地嘉手苅村にイギリス船が来航

8 月 22 日　生存者と対面

8 月 23 日　生存者を乗せて、宮古島を出航

その他にも次のようなことも記されています。

・蔵元（くらもと）に新城村からの海難事故の報告があると、その日の内に在番（ざいばん）、在番筆者（ざいばんひっしゃ）、詰医者（つめいしゃ）、頭（かしら）、惣横目（そうよこめ）などの役人が赴いており、島尻村番所や、東仲宗根村番所へも詰医者や惣横目などの役人が派遣されていること。

・漂着人の保護については、島尻村のはずれに木屋をたて、木綿布（もめんふ）をあたえて介護をして、村人近づけないようにし、見張り番をつけて夜中も火を焚（た）いて見張りを行っていたこと。

・漂着した死体については、棺（ひつぎ）をつくり、白木綿衣装を一枚づつ仕立て、中国人に確認を行ってもらったうえで、土葬（どそう）して、四方を石で囲い印石（しるべいし）をたてたこと。

・全員ではないものの、生存した中国人の名前や出身地、年齢など記されていること。

・救助にしきた船からは、謝礼（しゃれい）として多量の本や、絵、小玉などがわたされたこと。

＜もっと詳しく知りたい！＞

『球陽論叢』（ひるぎ社）という本の中で、平良勝保さんが、「威豊三年宮古島におけるイギリス苦力貿易船の漂着事件」を書いておりますので読んでみて下さい。

【コラム④】 上原久雄さん手記『新城考』にみる吉野海岸沖海底遺跡

新城出身の上原久雄さんの手記『新城考』の中では、吉野海岸沖で座礁・沈没した船名不明のイギリス船に関して多くの情報が記されており、吉野海岸沖海底遺跡を考える上での重要な資料となっています。ここでは、その概要を紹介いたします。

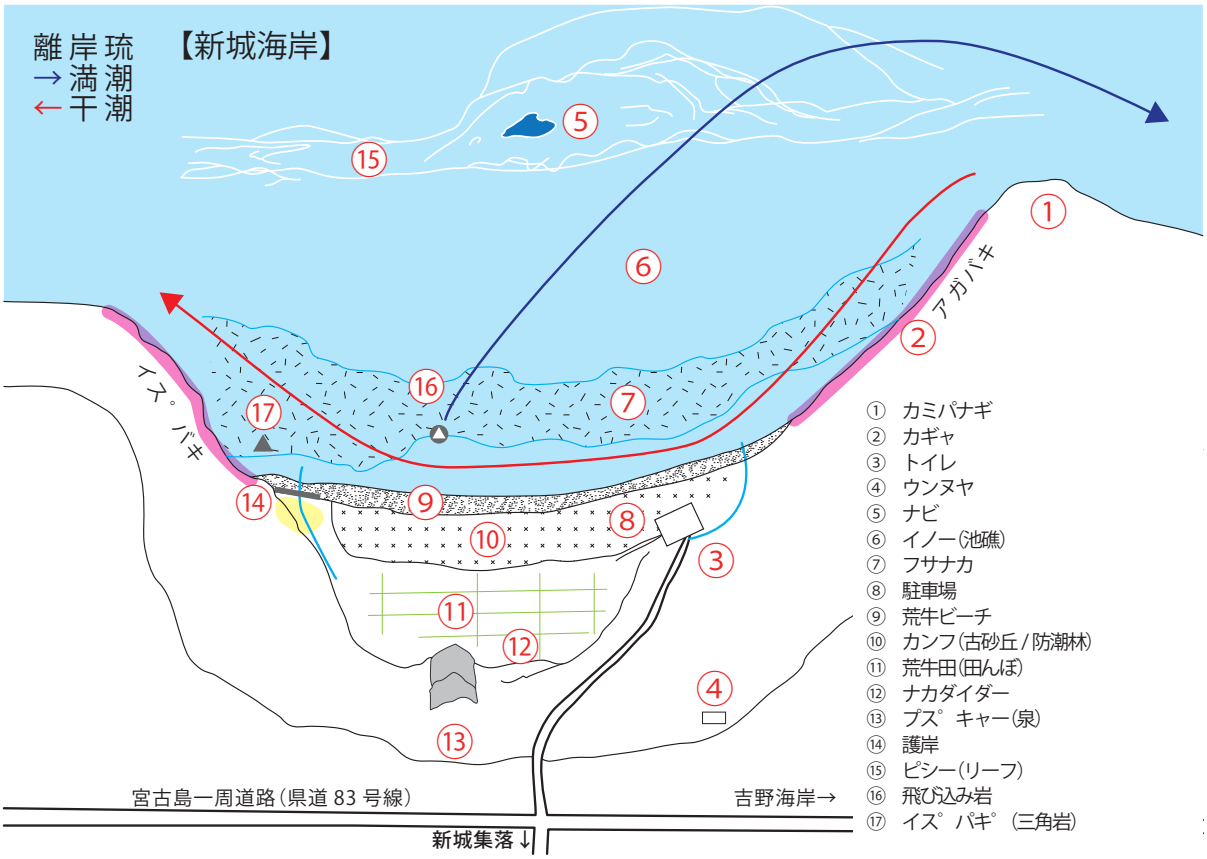
＊文中にあるオランダ船とは吉野海岸に座礁・沈没したイギリス船のことを示します。

新城の半数以上の人々は、オランダ石を見たことがあり、知っていることと思います。

子供の頃、カンフ※1に入る手前に、田んぼに水を引く用水路の橋として、アズキ色の石（縦 120 × 横30×厚み25センチ）が３個ありました。子供たちは家畜の草刈りへ行く時は、必ずといっていいほど、自分の鎌のカウ※2で石をたたき、火花を出して興（きょう）じた覚えがあります。この石こそが、難破（なんぱ）したオランダ船の船底に積まれていた、バラストの石、オランダ石でした。

私は昭和 17 年末、台湾へ疎開に行き、昭和 21 年４月に台湾から引き揚げ、新城へと帰ってきましたが、そのオランダ石は手つかずのまま戦禍（せんか）を逃れていました。

石については判りませんが、平成 10 年頃、吉野のサンシン屋（屋号）の門の西側にあった柱の様な石も、オランダ石だと言われていました。新城の荒牛田（アラフの田んぼ）※3にあったオランダ石とは異なった質の石のようでした。



上原久雄さんの原図をトレースして編集を行った。

この難破したオランダ船には生存者が一人もなく、新城、割目と言う片田舎の北海岸が故に、記録の詳細※4もはっきりしていません。

オランダ船は新城の北海岸と吉野の北海岸の中間、カミパナキ（地名）のリーフで難破しました。戦前まで吉野側の海のイノー（池礁）には、バラストとして船底に積まれていたオランダ石が沢山あったと聞きました。

カミパナキ（地名）からガギャ（地名）そしてアガバギ（地名）と、沿岸沿いに潮の流れが早いので、海で亡くなった遭難者（そうなんしゃ）は、新城の海岸に全部流れ着いたそうです。新城の人たちはこの遺体をイスバギ（地名）に集め、今の護岸の西後方に手厚く埋葬したときいています。

今思うに、年寄りからアライ（地名）からイスバギには行くなと、幼少の頃によく言われたのは、そこが埋葬場所であったからだと思いました。

私の祖父・加那は、カミパナキの海（新城の北の海）は自分の畑よりも詳しく、今で言うところの海人でした。私が22～3歳の頃に聞いた話では、祖父（加那）が青年時代には、カミパナキのピシ（干瀬）にオランダ船の金庫が、シー（石）の間から少し見えていたが、今は（昭和25～7年頃）もう見えなくなっている。と言っていたのが記憶にあります。

オランダ石の話はよく聞きますが、埋葬場所の話しはあまり聞きません。1771年の明和の大津波の後であり、また、人頭税の時代でもあり、納税の粟が一番大事で、金銀などになんの価値もなく、魅力もなかった時代だったからです。それ故、人々の脳裏（のうり）にも無く、今や実話を聞くことも無くなりつつあります。出来るならば確認の上、遭難の碑を建て、遭難者の霊を供養することも必要だと思います。

【注釈】

※１　カンフ：海岸線と田んぼの間にある盛り上がった砂丘部分（現在は防潮林になっている場所）

※２　カウ：鎌の刃金の柄に近い首の部分のこと。

※３　荒牛（アラフ）：新城海岸の断崖と浜辺に囲まれた平地で、かつては豊富な水を活かして田んぼがあった。

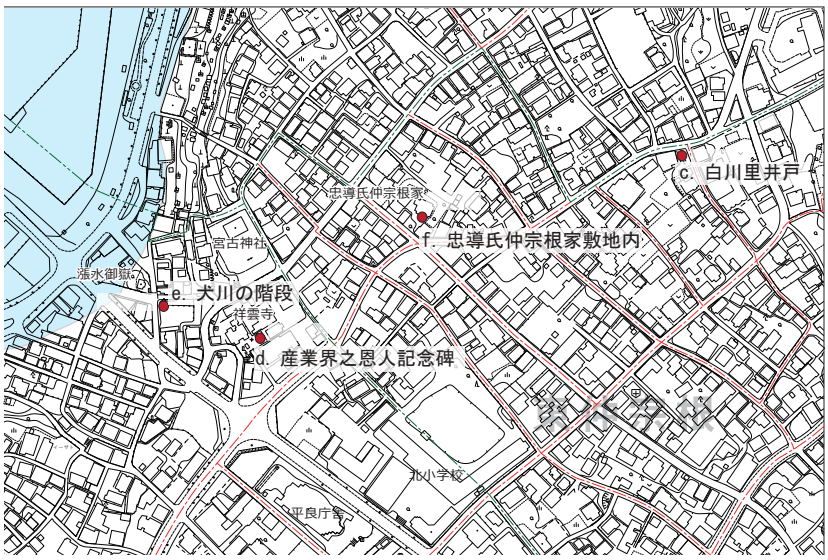
※４　生存者：史実においては、船員６名と苦力24名の生存者がおり、船員24名と苦力219名の計 243 名が死亡している。

【コラム⑤】　陸上に引き上げられた花崗岩

吉野海岸から引き揚げられた花崗岩が吉野集落内で２点確認されているほか (a･b)、同じものと考えられる花崗岩（かこうがん）が平良市街地で４カ所（11 点）確認されています (c ～ f)。市街地で確認された花崗岩の運び込まれた経緯については現在調査中ですが、非常に近い位置でこれらの花崗岩がまとまって見つかっている点は興味深いといえます。

a. 吉野の民家①：１点 〔＊展示〕
b. 吉野の民家②：１点
c. 白川里井戸：１点
d. 産業界之恩人記念碑：７点
e. 犬川の階段：２点
f. 忠導氏仲宗根家敷地内：１点

c ～ f の花崗岩位置図 ▸



▲ c. 白川里井戸

▲ d. 産業界之恩人記念碑

▲ e. 犬川の階段

▲ f. 忠導氏仲宗根家敷地内

オランダ船 ファン・ボッセ号の座礁・沈没遺跡

高田海岸沖海底遺跡（たかだかいがんおきかいていいせき）

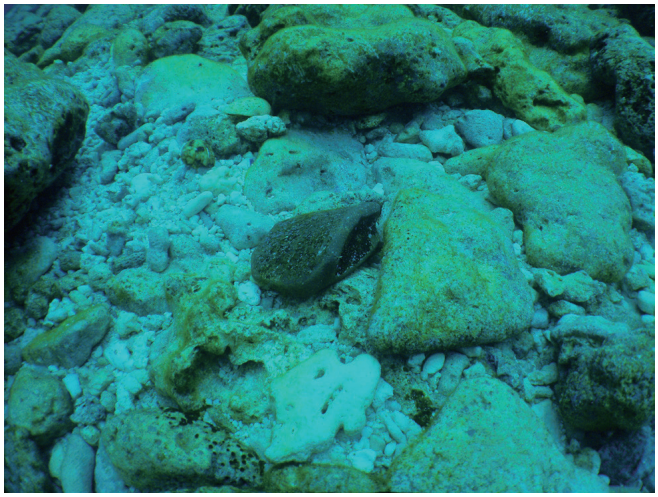
【遺跡の概要】

1857 年、オランダ船ファン・ボッセ号 (船長 : ハーゲマン) が多良間島の高田海岸沖で座礁・沈没しました。上海（しゃんはい）からシンガポールへ向かう途中でした。地元では「高田海岸、オランダ商船遭難の地」として、1983 年に村の史跡 (記念物) に指定されており、南西諸島で唯一、史跡となっている海難事故の歴史を伝える水中文化遺産です。また、沖縄県内では複数の海域で異国船の座礁・沈没に関する水中文化遺産が確認されていますが、船籍不明なものを除くとほとんどがイギリス船で、オランダ船の沈没船遺跡はここ 1 か所となっており、貴重な事例であります。

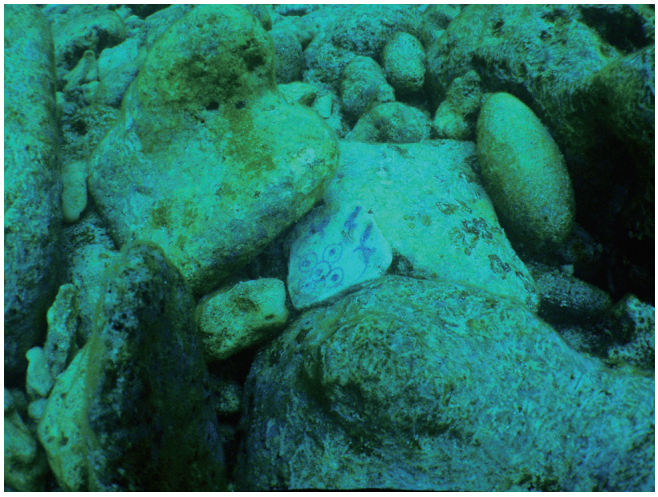
沖縄県立埋蔵文化財センターによる海底調査の結果、水深約 25 メートル～浅いリーフ内にかけての海底から、多数の清朝磁器（しんちょうじき）やヨーロッパ製品、船体の一部などが確認されました。また、多良間村ふるさと民俗学習館には、高田海岸から採集された清朝陶磁器や、「アムステルダム (AMSTERDAM)」と刻印されたヨーロッパ陶器瓶、ファン・ボッセ号のものと伝えられる木製ストックタイプの鉄錨（てつびょう）が保管され、「オランダ錨」と呼ばれています。

▲高田海岸沖海底遺跡近景　（写真：沖縄県立埋蔵文化財センター提供）

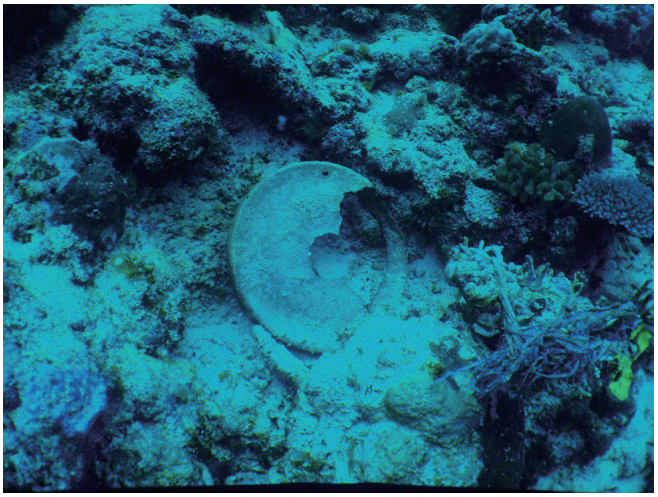
▲石のバラストの確認状況



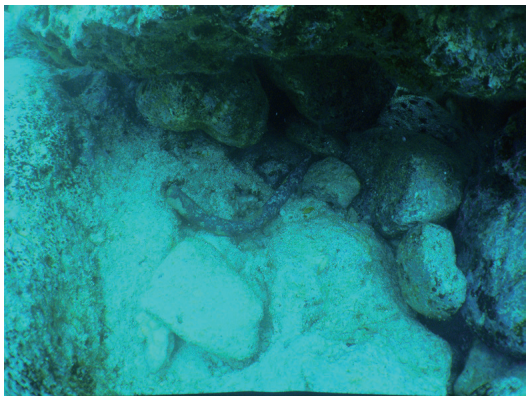
▲海底で確認された中国産褐釉陶器



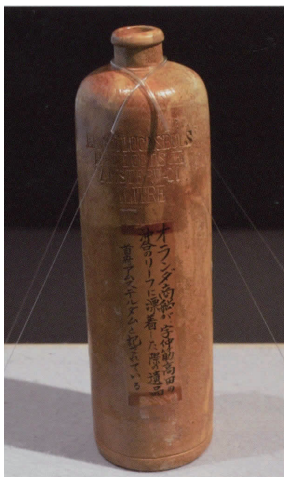
▲海底で確認された中国（清朝）の青花



▲海底で確認された銅製品



▲海底で確認された銅釘



ファン・ボッセ号出土品▲

「AMSTERDAM」(アムステルダム)と刻印されたヨーロッパ陶器瓶〔多良間村ふるさと民俗学習館収蔵〕

▲ファン・ボッセ号の鉄錨

〔多良間村ふるさと民俗学習館収蔵〕

＊本頁の写真は全て沖縄県立埋蔵文化財センター提供

島尻東海岸の石切場（しまじりひがしかいがんのいしきりば）

島尻の東海岸線で確認された石切場です。長さ約25m、幅9mの範囲でビーチロックを切り出しています。切り出された石は、長さは約 80㎝～ 90㎝で、幅は約 45㎝、高さ 15～17㎝と非常に規格的です。切り出しを行うための幅 18㎝、深さ 17㎝の溝が掘り込まれています。

▲島尻東海岸の石切場の遠景（南より）

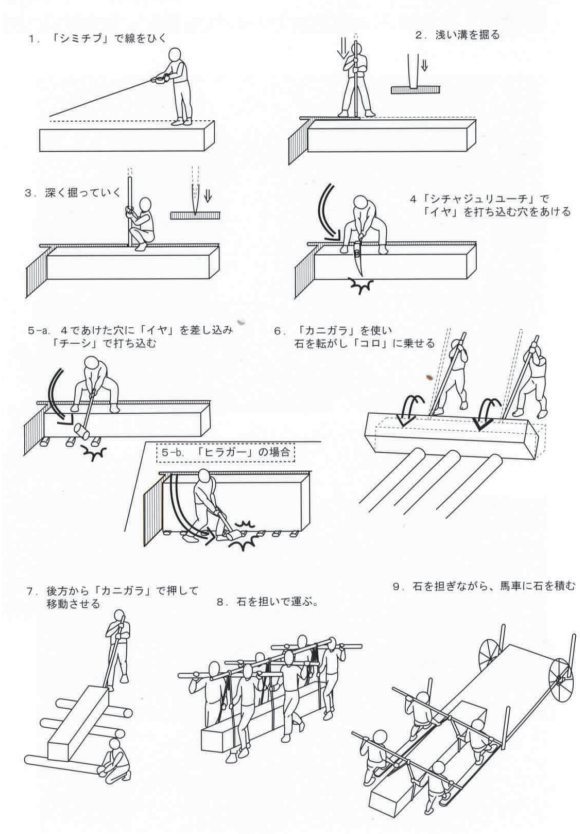
▲ビーチロックの切出し跡

大浦湾の石切場（おおうらわんのいしきりば）

大浦漁港の北側に位置する海岸で確認された石切場です。海岸に形成されたビーチロックを切り出しており、長さ1.45m、幅0.45mの大きさの切り出し跡が確認できます。

▲大浦海岸の石切場の遠景（南より）

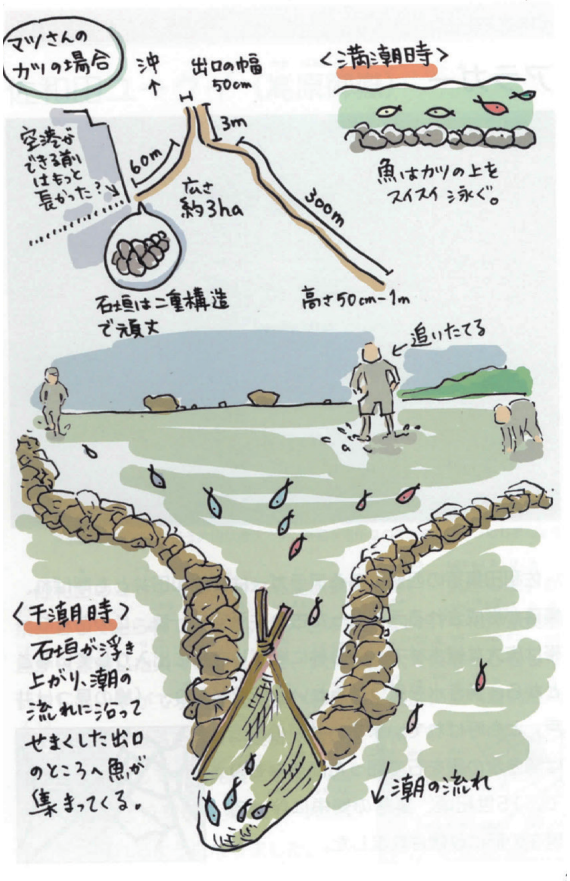
【参考】浦添市牧港での聞き取りによる石切工程 ▸
浦添市教育委員会 2010 年『浦添市西海岸の石切場跡』より



伊良部佐和田の浜の魚垣（いらぶさわだのはまのかつ）

魚垣は、遠浅の海に石を積み上げ、潮の満ち引きを利用した魚を追い込む伝統的な漁法で用いられる石垣のことです。伊良部の佐和田の浜に残されている魚垣は、1850年頃に善平マツさんによってつくられたといわれており、1979 年に旧伊良部町 (現在は宮古島市) の有形民俗文化財に指定されています。かつては、島尻、狩俣の海にも魚垣がありました

▲伊良部佐和田の浜の魚垣



▲魚垣の利用方法　『綾道 - 伊良部島コース』p35 より抜粋〔イラスト：山田光〕

宮古島市の水中文化遺産の保全につとめましょう。

海岸に散布する沈没船に関連する資料は、大事な水中文化遺産の一部です。その場で観察し、もちかえらないようにしましょう。

水中文化遺産の研究にご協力をお願いします。

沈没船に関する伝承や、屋号、地名なども水中文化遺産を研究していく重要な資料です。また、石切場、魚垣のあった場所、古い港跡などについても、情報提供は、宮古島市文化財資料室 (77-8336) までお願いいたします。

令和 2 年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 2 回

「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」展示パンフレット

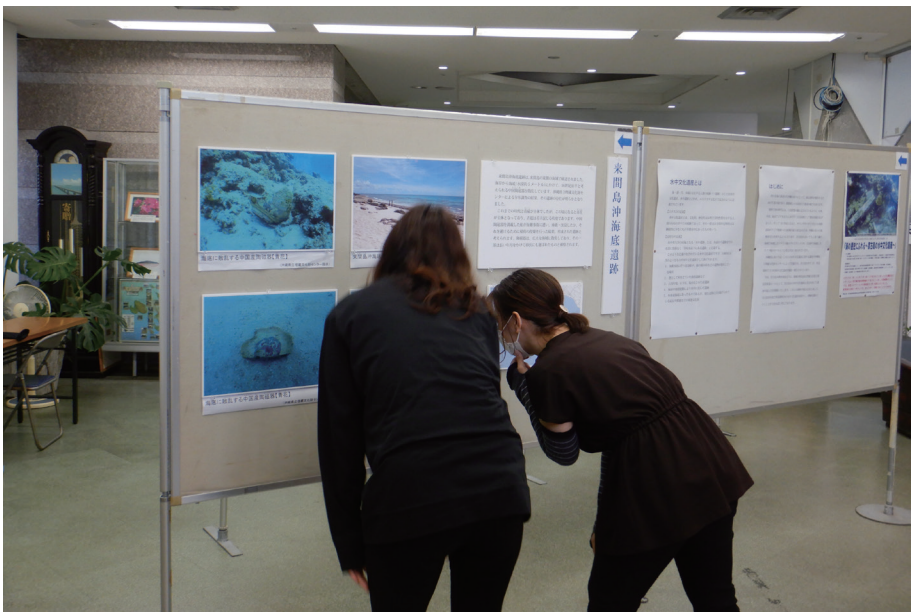
発行：令和 2(2020) 年 10 月 12 日

編集・発行：宮古島市教育委員会

〒 906-0103　沖縄県宮古島市城辺福里 600-1

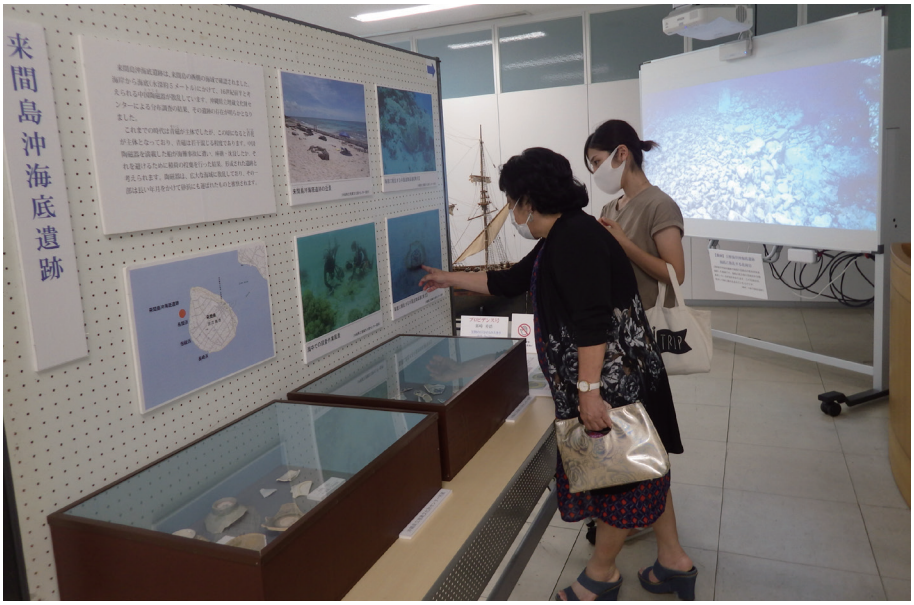
平良庁舎１階ロビー
展示準備作業

平良庁舎１階ロビー
展示風景
(2020.8.6 ～ 14)



平良庁舎１階ロビー
展示風景
(2020.8.6 ～ 14)

城辺庁舎での展示のため、
借用したプロビデンス号の
復元根系 (池間自治会所蔵)



城辺庁舎 2 階会議室
展示風景
(2020.10.12 ～ 16)

城辺庁舎 2 階会議室
展示風景
(2020.10.12 ～ 16)

城辺庁舎２階会議室　公開講座風景 (2020.10.18)

公開講座　講師：片桐　千亜紀 (2020.10.18)

城辺庁舎２階会議室
公開講座　講座風景
(2020.10.18)

城辺庁舎２階会議室
公開講座 (質疑応答)
(2020.10.18)

城辺庁舎２階会議室
公開講座 (展示解説)
(2020.10.18)

宮古毎日新聞

2020年（令和2年）10月22日　木曜日　（8）

水中文化遺産で講座

プロビデンス号沈没を紹介

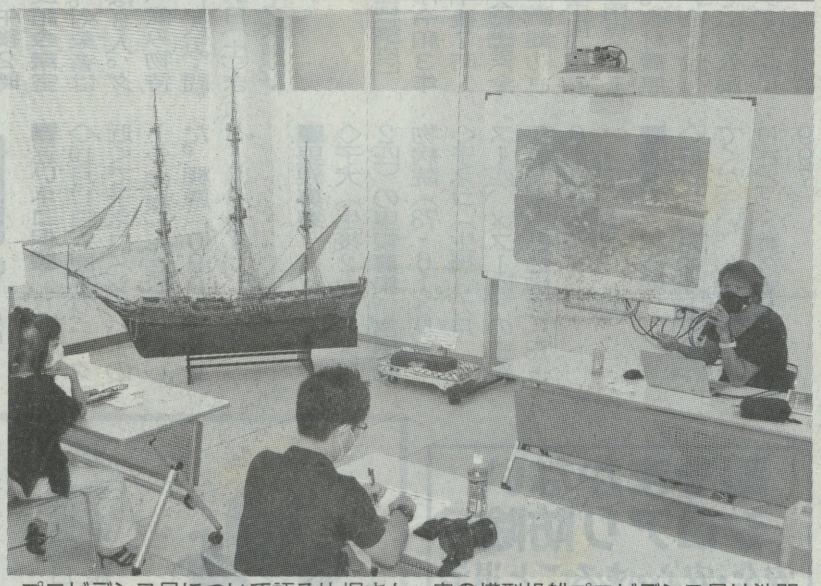
片桐千亜紀さん

市教育委員会（宮國博教育長）は18日、市役所城辺庁舎で第2回文化講座「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」を開いた。講師を務めた県立埋蔵文化財センターの片桐千亜紀さんは、1797年に八重干瀬に沈没したイギリスの探検航海船「プロビデンス号」などについて説明。その上で「2019年科学研究費を受け、琉球列島における西欧沈没船遺跡の実態把握と水中遺跡公園化へ向けた基礎的研究に取り組んでいる」と述べた。市民らが受講し、興味津々に聞き入っていた。

「プロビデンス号」（400トン）は全長33メートル、幅9メートル、16砲門装備、乗組員115人の軍艦だった。1796年、北太平洋探検途上、北海道の現在の室蘭港に初来航し、その湾を「噴火湾」と名付けた。翌97年4月、マカオを出航。5月17日の北上途次、池間島北方の八重干瀬に座礁した。ブロートン船長らがスクーナー船に乗り移ると、プロビデンス号は海底に沈んだ。スクーナー船は宮古本島の漲水泊（港）に入港。ブロートン船長らは、島民の手厚い保護を受けた後に出航した。

ブロートン船長は1804年、「北太平洋探検航海記」を発刊した。

「西洋列強の沈没船と宮古島―HMS プロビデンス号の調査」をテーマに講演を行った片桐さんは、プロビデンス号の航海目的について▽北太平洋航路の開拓▽港の調査▽住民の生活調査▽イギリスの世界戦略▽産業革命を終えたイギリスは生産技術が向上し、急増した工業製品を売るために世界の自由貿易の拡大が必要だった―を挙げた。

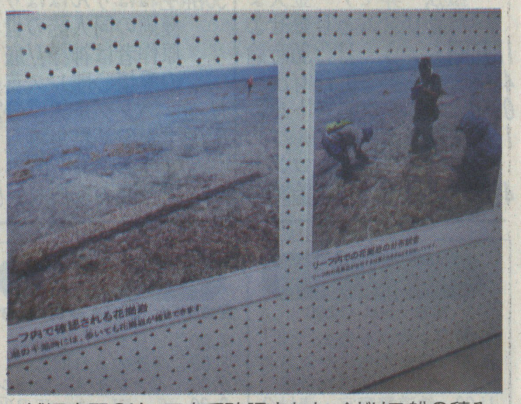


プロビデンス号について語る片桐さん。奥の模型帆船プロビデンス号は池間島出身の新崎寿浩さんが設計図を基に復元した＝18日、市役所城辺庁舎

宮古毎日新聞

水中文化遺産を写真で紹介

城辺庁舎で16日まで展示



城辺吉野のリーフ内で確認されたイギリス船の積み荷であった方形花こう岩＝13日、市役所城辺庁舎

18日開催の第2回体験講座「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産～」吉野海岸沖海底遺跡巡検を控え、市教育委員会（宮國博教育長）主催の展示会が13日、市役所城辺庁舎2階で開幕した。1853年に吉野海岸沖で沈没したイギリス船の積み荷であった巨大な方形花こう岩の石材などをカラー写真で展示。来場者らは、海底遺跡から琉球王国時代に異国船が宮古島海域を行き来した一端を興味津々に見入っていた。16日まで。入場無料。

水中考古学の対象となる「水中遺跡」について文化庁は、水面から遺跡までの水深に関係なく、「常時水面下にある遺跡」と定義している。

今展示会場には▽来間島沖海底遺跡―16世紀前半の中国との交易船に関わる水中文化遺産▽八重干瀬海底遺跡群第1地点―イギリスの軍艦プロビデンス号の座礁・沈没海域▽吉野海岸沖海底遺跡―243人が死亡した未曽有の海難事故と海底に残る多量の花こう岩▽多良間の高田海岸沖海底遺跡―オランダ船ファン・ボッセ号の座礁・沈没遺跡▽島尻東海岸の石切場▽大浦湾の石切場▽伊良部佐和田の浜の魚垣―のコーナーが設けられている。

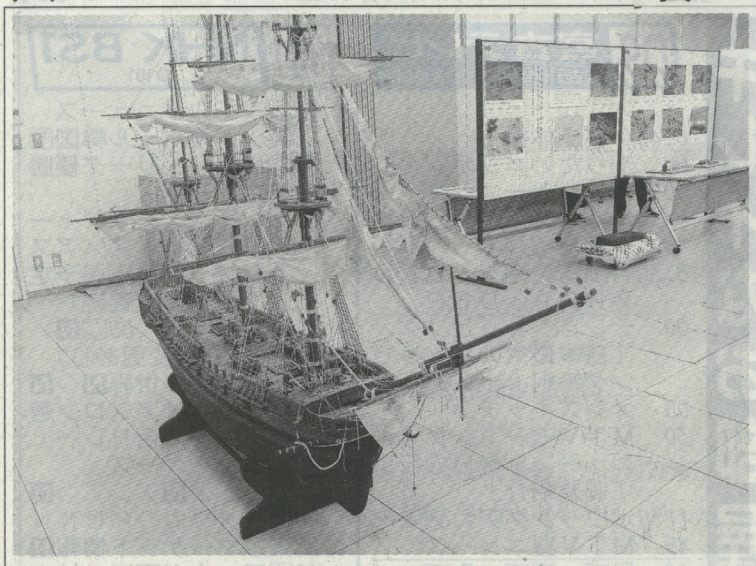
講座の講師は片桐千亜紀さんが務め「西欧列強の沈没船とプロビデンス号の調査」と題して講演する。講座後、吉野海岸沖海底遺跡巡検を行う。

問い合わせは、市生涯学習振興課文化財係（電話77・4947）まで。

沈没船の歴史背景紹介

市教委　水中文化遺産展開催

市役所城辺庁舎



展示されているプロビデンス号の模型＝市役所城辺庁舎2階

宮古島近海で沈没した18～19世紀の西欧船などの水中文化遺産を紹介する市教育委員会（宮國博教育長）の「海の歴史にふれる～宮古島の水中文化遺産」展示会が市役所城辺庁舎2階で行われている。西欧のアジア進出に伴い宮古周辺の海域にも現れるようになったなど歴史背景を知る機会にしてほしいと呼びかけている。16日まで。

県内では水中文化遺産に関する調査が県立埋蔵文化財センターによって実施され、宮古島市で22、多良間村で3つが確認報告されている。今回の展示会は地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業として宮古の水中文化遺産に焦点を当てるため開催された。

展示会では1797年に八重干瀬で沈没したイギリス軍艦プロビデンス号、1853年に吉野海岸沖で沈没したイギリス船、16世紀前半の中国との交易船に積まれていたと見られる陶磁器が散乱していた来間島沖海底遺跡などに関する同センターによる水中調査の様子、引き揚げられた陶磁器等の遺物をはじめ、島尻東海岸や大浦湾の石切場、池間自治会が所有するプロビデンス号の模型などを紹介している。

このうち吉野海岸沖海底遺跡は米国に向かう途中に海難事故に遭い、船員と中国人労働者（苦力）243人が死亡したという。水深約5㍍の海底から浅いリーフ内にかけて大量の花崗岩石材が確認され、現在でもリーフ内で花崗岩を見ることができる。引き揚げられた花崗岩が吉野集落内の民家や平良市街地の白川里井戸などで使われていることも紹介している。

市教委生涯学習振興課の久貝弥嗣さんは「なぜこの海域に中国や西欧の船が現れたのか。16世紀は中国との交易であり、19世紀は西欧諸国がアジアに進出して宮古を含む沖縄の海域にも多く来るようになった。その歴史の一端を水中文化遺産から学べる」と来場を呼びかけた。

また18日午前10時～午後3時には同庁舎2階で同センターの片桐千亜紀さんによる文化講座「西欧列強の沈没船とプロビデンス号の調査」、吉野海岸での海底遺跡巡検も行われる。

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業 第３回 文化講座（主催：宮古島市教育委員会）

「歴史史料にみる吉野海岸沖海底遺跡」

日時：11 月 28 日（土） 午後１時～３時

場所：未来創造センター・研修室

定員：30 人（事前申し込み必要）

講師：平良勝保（宮古島市史編さん委員）

申し込み・問い合せ先：宮古島市教育委員会　文化財資料室（77-8336）

13:00　開会

13:05 ～ 13:50「歴史史料にみる吉野海岸沖海底遺跡」（平良勝保）

13:50 ～ 14:20「吉野海岸沖海底遺跡のリーフ内調査等について」（久貝弥嗣）

14:20 ～ 15:00　質疑応答、 閉会

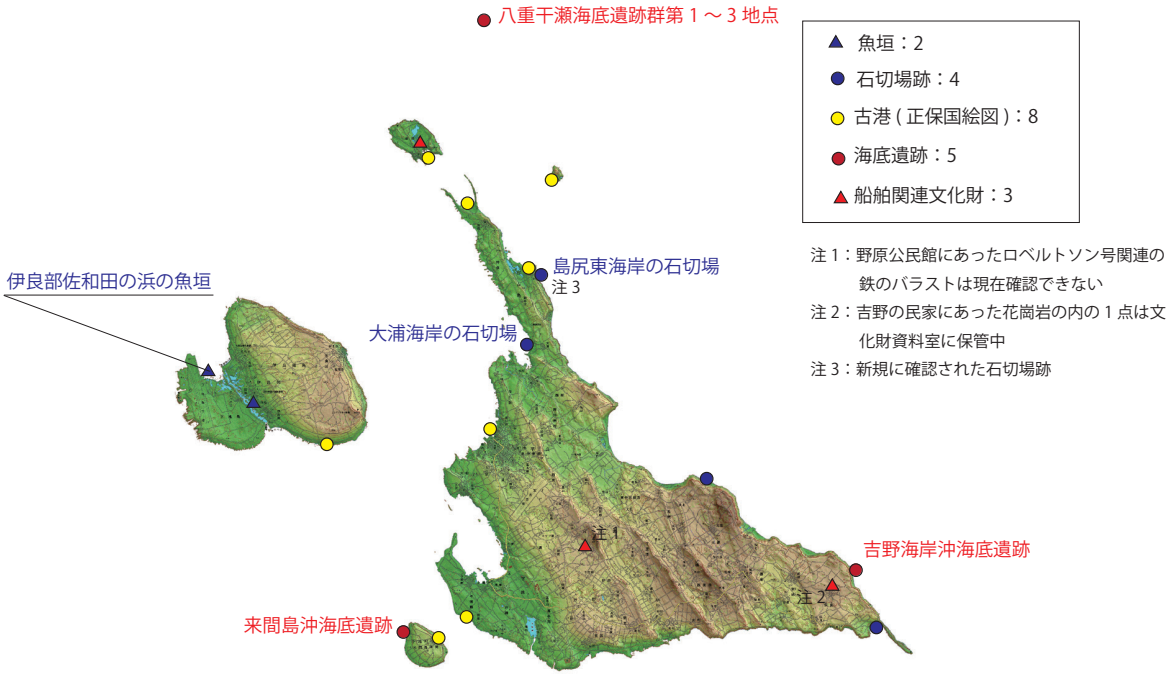
受講時には、マスクの着用、手指消毒、検温の実施にご協力お願いします。

宮古島市教育委員会では、宮古島市内の海に関連する文化財（沈没船、石切り場魚垣、言い伝えなど）の情報収集を行っております。情報提供のご協力をお願いいたします。（情報提供の連絡は、文化財資料室〔77-8336〕）

目次

講師紹介 …… 1
【参考資料】 吉野海岸沖海底遺跡の概要 …… 2
【講座レジュメ】苦力（クーリー）船漂着の歴史的背景 …… 4
－マリア・ルーズ号事件を例に－
【報告資料】 吉野海岸沖海底遺跡におけるリーフ内・陸上調査 …… 12
【参考資料】 サンフランシスコのチャイナタウンと苦力と豬花 …… 22(1)

宮古島の水中文化遺産位置図



講師紹介

平良　勝保（たいら　かつやす）

1954 年生（旧城辺町下里添＝通称「花切」出身）

沖縄大学・大学院 非常勤講師（日本経済史・沖縄近世史特論）／宮古島市史編集員

琉球大学大学院博士課程修了　博士（学術）

専門領域　琉球・沖縄史（農村社会経済史）、先島史

主な著作　単著『近代日本最初の「植民地」沖縄と旧慣調査』（2011 年、東京 藤原書店）

共著『琉球列島の環境問題－「復帰」４０年・持続可能なシマ社会へ－』（2012 年東京高文研）

共著『沖縄近代法の形成と展開』（2013 年、沖縄 榕樹書林）

共著『琉球・沖縄の染織物について』（2020 年、久貝典子科研費出版 ）

執筆論考　『宮古島市史』通史編（2011 年）における、第三編（近世）で、第二章 貢祖（人頭税）と民衆生活、第八章 異国船と漂着、第四編（近代）で第一章 琉球処分と宮古･琉球、第二章 旧慣期の宮古、第三章 人頭税廃止運動、第四章 土地制度と土地整理事業

『沖縄県史　各論編 第五巻 近代』における「旧慣期の村と民衆」

『西原町史 第一巻 通史編』（2010 年）における近代（内容：1872 年から 1930 年代）

『沖縄市史　民俗編　本編（CD 版）』（2015 年）における「村々の共有地と相互扶助（労働）慣行・内法」（内容：1930 ～ 1940 年頃の村々）

その他、宮古の歴史についての論文を多数執筆。

最近の論文に「近代八重山旧慣期における貢布の賦課と徴収」（2020 年 10 月、『沖縄文化－沖縄文化協会創設 70 周年記念誌』､沖縄文化協会）。来年出版予定で仮称『新･人頭税史論』を準備中である。

243 人が死亡した未曾有の海難事故と海底に残る多量の花崗岩

吉野海岸沖海底遺跡（よしのかいがんおきかいていいせき）

【遺跡の概要】

1853 年、船名不明のイギリス船が宮古島吉野海岸の沖で座礁・沈没しました。この船は苦力（くーりー）貿易にかかわる船で、中国の広州（こうしゅう）から船員 30 名、苦力 243 名を乗せて出港し、アメリカのサンフランシスコへ向かう途中に海難事故にあいました。この事故の生存者は船員６名と苦力24名のみで、船員 24 名と苦力 219 名の計 243 名が死亡するという悲惨（ひさん）な海難事故であったようです。

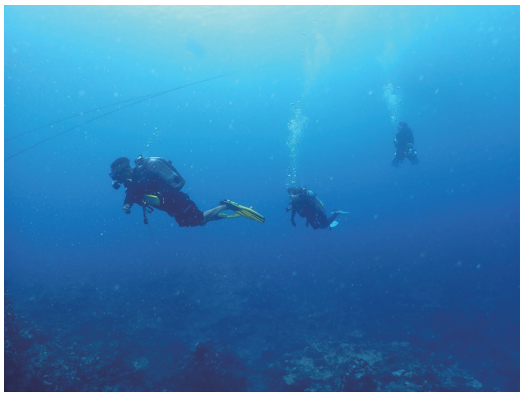
沖縄県立埋蔵文化財センターによる海底調査の結果、水深約５メートルの海底から浅いリーフ内にかけての海底には、おびただしい量の巨大な方形花崗岩石材（ほうけい かこうがん せきざい）や船体の残骸（ざんがい）である船底に張られた銅板（どうばん）が確認されています。

また、吉野集落の民家等には過去に海底から引き揚げられた方形花崗岩石材が置かれています。採集された資料は沖縄県立埋蔵文化財センターで保管されています。

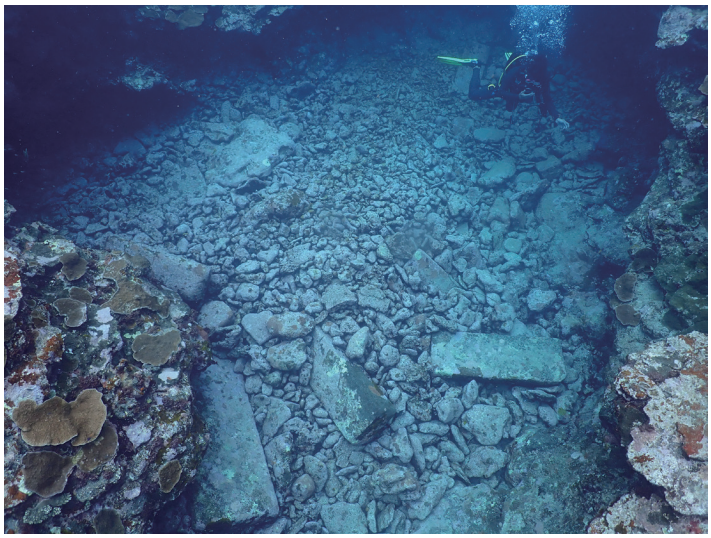
＊苦力とは、中国人の労働者のことをいいます。

◀ 遺跡の遠景
吉野海岸の北側が遺跡の範囲になります。

遺跡の遠景 ▶
干潮時には、リーフ内でも船の積荷であった花崗岩を確認することができます。
＊サンゴが多く生息する場所でもあるので、サンゴを踏まないようにきをつけましょう。
（写真：本村氏提供）

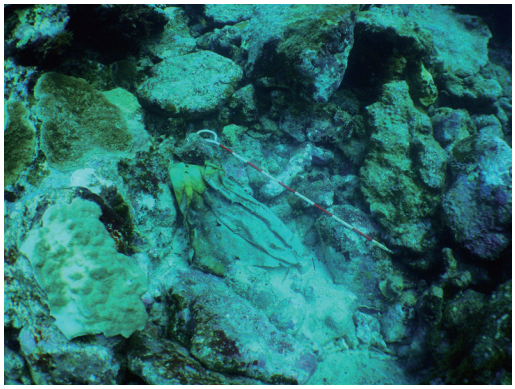


▲水中での調査風景（写真：片桐氏提供）



海底に散布する花崗岩 ▶
（写真：片桐氏提供）

▲水中での調査風景
海底には、長細いものや、四角形のものなど様々な形態の花崗岩を確認することができます（写真：片桐氏提供）。



▲海底で確認された銅製品　＊展示
船体の外面に打ちつけられていたと考えられる板状の銅製品。海底からは、その他にも陶磁器の破片などが採集されています。（写真：沖縄県立埋蔵文化財センター提供）

▲リーフ内で確認された花崗岩

▲砂浜に打ちあげられた花崗岩

苦力（クーリー）船漂着の歴史的背景
ーマリア・ルーズ号事件を例にー

はじめにーサンフランシスコのチャイナタウン

１　マリア・ルーズ号事件
２　近代化と旧慣調査
３　吉野沖漂着事件の概要

おわりにー漂着船と博愛美談の再検討

マリア・ルス号事件と大旆　**神奈川県立図書館解説**

1-1 マリア・ルス号事件の流れ

明治５（1872）年６月１日、嵐により損傷したペルー船籍の帆船マリア・ルス号（Maria Luz）が横浜港に入港しました。

６月７日、この船から海へと逃れた一人の清国人が、近くに停泊中のイギリス軍艦アイアン・デューク号に救助されます。彼の証言からマリア・ルス号では230人の清国人苦力(クーリー)が奴隷状態に置かれている事が発覚します。この非人道的な扱いはイギリス代理公使ワトソンから日本政府に伝えられ、事態を善処すべく迫られた政府は、裁判を開くことになります。

外務卿（現在の外務大臣）副島種臣（そえじま　たねおみ）よりマリア・ルス号事件の審理を指示された神奈川県権令（現在の知事）大江卓（おおえ　たく）は、県庁内に特別法廷を開き、７月４日から審理を開始します。

マリア・ルス号の船長ヘレイラと清国人苦力への尋問が行われ、ヘレイラを虐待の罪で有罪（但し罰は免除）とした判決を７月27日に下しました。（第一次裁判）

第一次裁判で自らを有罪とされただけでなく、清国人苦力がマリア・ルス号に戻るかどうかは、彼ら自身に決めさせるという判決に納得しない船長のヘレイラは、清国人苦力全員に対してマカオで交わした契約履行請求の訴訟を起こします。

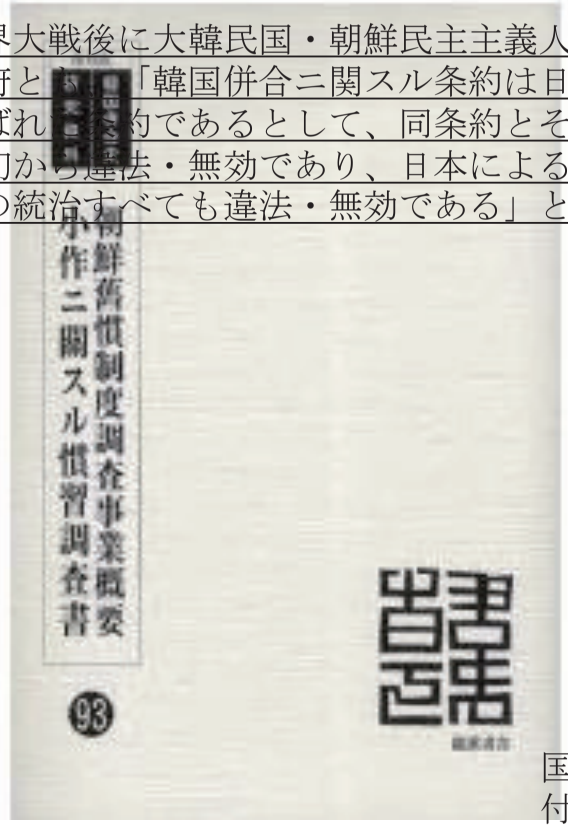
これを受けて８月16日から再審理が行われ、８月25日に第二次裁判の判決が申し渡されました。判決では、マカオでの契約は無効とされ、ヘレイラに連れ去られた１名を除く、清国人苦力229人が９月13日に清国特使の陳福勲に引き渡されました。（人数については諸説あり）　しかし、事件はこれだけでは終わりませんでした。

翌年の明治６（1873）年、ペルー政府は日本に損害賠償を要求し、事件は二国間では決着せず、第三国であるロシア皇帝の裁決に一任されます。

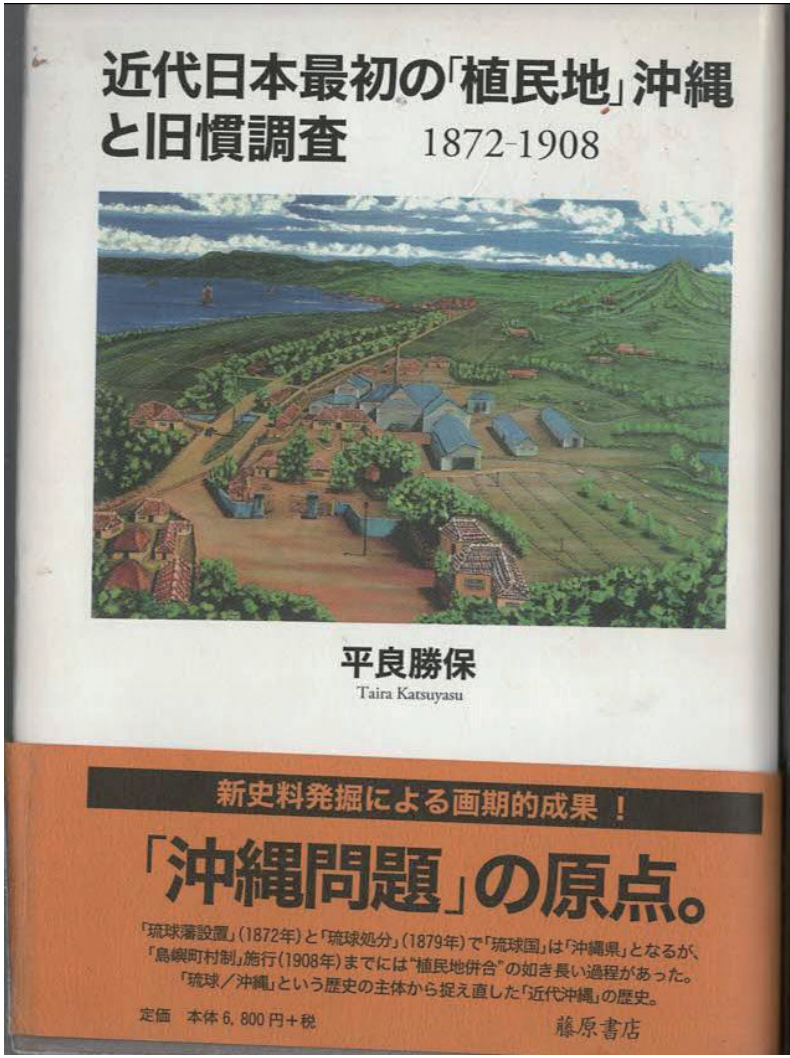
明治８（1875）年ロシア皇帝の下した裁決は「日本に賠償責任はない」というものでした。これは、外務省法律顧問のＥ．Ｐ．スミス、神奈川県法律顧問Ｇ．Ｗ．ヒルらの尽力と、人身売買を人道上の問題とする国際的世論の支持によって、得られたものでした。（なお、裁決したロシア皇帝アレクサンドル二世は農奴制廃止を行っている）

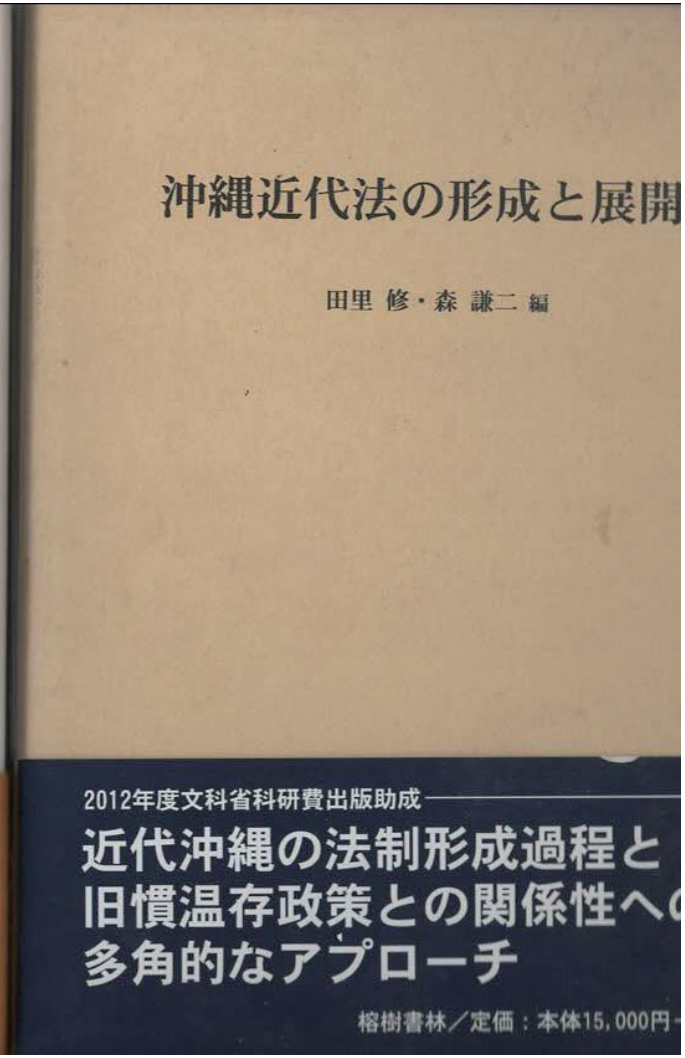
副島種臣外務卿　旧蔵「**大旆**」（**たいはく**＝中国の天子や将軍が用いた、日や月、昇り竜や下り竜が描かれた大きな旗＝感謝状）**同治１１年（１８７２）、横浜中華街から贈られた。**
現神奈川県立図書館蔵
今ひとつは、大江卓旧蔵がある
大江卓は、「マリア・ルス号事件」発生時に事態を重く見た外務卿副島種臣から権令（県副知事）に抜擢され、清国人奴隷232人を、自ら裁判長となって解放した。

第二次世界大戦後に大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国として成立した両政府と[redacted]「韓国併合ニ関スル条約は日本と大韓帝国の間で違法に結ばれ[redacted]約であるとして、同条約とそれに関連する条約すべてが当初から違法・無効であり、日本による朝鮮領有にさかのぼってその統治すべても違法・無効である」と主張している。



国民党や親民党は日本統治は日本による搾取に過ぎなかったと位置付けている。それに比べると民主進歩党は日本統治に対して同情的ではあるが、植民地主義は現代において認められないとの立場を表明しており、日本統治を評価しつつも、その根底に存在した植民地主義を批判する立場を取っている。


近代日本最初の「植民地」沖縄と旧慣調査 1872-1908
平良勝保
Taira Katsuyasu
新史料発掘による画期的成果！
「沖縄問題」の原点。
「琉球藩設置」(1872年)と「琉球処分」(1879年)で「琉球国」は「沖縄県」となるが、
「島嶼町村制」施行(1908年)までには"植民地併合"の如き長い過程があった。
「琉球／沖縄」という歴史の主体から捉え直した「近代沖縄」の歴史。
定価 本体6,800円＋税
藤原書店


沖縄近代法の形成と展開
田里 修・森 謙二 編
2012年度文科省科研費出版助成
近代沖縄の法制形成過程と
旧慣温存政策との関係性へ
多角的なアプローチ
榕樹書林／定価：本体15,000円

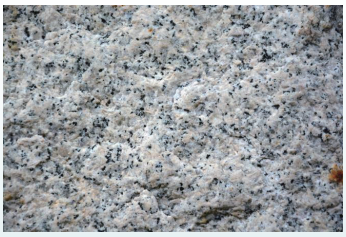
- 一八一〇年に改定された「進貢・接貢船、唐人通船、朝鮮人乗船、日本他領人乗船、各漂着并破船之時八重山在番役々勤職帳」（以下、「異国船救助規定」という）には、次のような条項がある。
- 一．一般的に、漂着船は風難にあい身命を助けるために漂い来たはずでなので、地元に対して害をおよぼすことはありえない。だから、地元もそれを承知してしていて、南蛮人が余計な気遣いをしないようにすれば思いもよらないことなどは全くないと思う。もしものものしく多くの人を集め、武具を用意する様子を見るに及んだならば、お互いに言葉が通じない上に、南蛮人は誤解し、今となっては殺されると、早合点して思いもよらないことも起こるので、よくよく注意をすること。
- 宮古島も鎖国（海禁）体制のなかにあり、異国人に対する警戒心を忘れることはなかった。異国船救助規定には、「漂着場の近くに人や武具をひそかに集めておき、もし合戦になれば失敗のないように心構えをすること」や「万一、思いもよらない行動をすることがあれば、適切な措置をし、南蛮人をとらえ船籠に入れて連れてくること」、「南蛮人を斬り殺し、死体が続かない者は首をまず集めて、塩詰めにして持ってくること」などの条項がある。実際に、一六九七年八重山の川平村では、異同人数十人が漂着し、十人が討ち果たされるという事件が起きている。
- 異国船漂着規定は、寛永の一連の鎖国令以来琉球へも布達されており、幕府（あるいは薩摩藩）の対外交政策の変化により改定されていった。先島の場合、一六八五（貞享二＝康熙二十四）年に異国船関係規定の変更があり、一七〇四（宝永元＝康熙四十三）年に十五条からなる「御条目」が制定された。

- イギリス苦力船につては、「宮古島近古文書」所収の史料をもとに、漂着事件の概要は次の通りである。
- 　一八五三年、新城村の北海岸沖にイギリス船籍の中国人苦力を乗せた船が漂着した。漂着時間は、六月十七日（旧暦）昼十二時頃であったが、「平良にや」（人名）が発見したのは夕方六時頃であった。漂着人は、当日の夕方五人（唐人男四人女一人）、夜男十八人（唐人十二人、阿蘭陀人六人）、新城村の海岸に泳いで上陸し、翌日午前八時頃、島尻村へ唐人男三人、翌日午後四時頃白川浜へ唐人男三人、女一人が上陸した。漂着人は総勢三十人、うち、唐人男二十二人・女二人、阿蘭陀（イギリス）人六人であった。いずれも、宮古島東部の海岸線に位置するが距離的にかなりはなれている。
- 　漂着船はイギリス船籍で、中国の「南海県」の者、男二百三人、女四拾人、船長をはじめとする水夫三十人、総勢二百七十三人であった。船は、五月二十三日広東省広州を出帆、中国人らは金採掘のための苦力（単純労働者）契約によってアメリカのカリフォルニアへ向う途中であった。唐人は、南海県人だけでなく、東莞県人・香折県人・唐遠県人も含まれている。八月二十一日、嘉手苅村沖に救助・探索船があらわれ、八月二十三日漂着人を連れていった。

- ロベルトソン号の漂着事件を知ったドイツ皇帝は感激し、一八七六年、軍艦チクロープ号を宮古島に派遣し、感謝碑を建立するとともに関係者に記念碑を贈呈した。その際、チクロープ号を宮古島近海を測量している。一九六一年、日本とプロイセン（後のドイツ）との条約締結のため派遣されたエルベ号の艦長ヴェルナーは、条約の締結は第一歩にすぎず「つづいて踏み出さなければならない第二歩はプロイセンあるいはドイツ艦隊の東洋水域への配置である。こうした艦隊こそ、祖国の貿易に絶大な支援を与え、ドイツの名声を尊重させることができるのだ」と述べており、チクロープ号は、感謝という名の衣の下に植民地獲得という鎧をまとって宮古島を訪れていた。
- 　ロベルトソン号の目的地は、オーストラリアのアデレードであったが、旧「南洋」地域を経由の予定であったと思われる。ドイツと南洋（オーストラリア）の接点は、ドイツのゴドフロイ商会がサモアに進出にはじまる。ゴドフロイ商会は、遅くとも一八六九年にはヤップ島に支店を設け、ヘルンスハイム商会は一八七三年に、パラオ、ヤップ、オレアイ島の営業所開設している。ロベルトソン号の漂着事件は、ヘルンスハイム商会の南洋進出初期の出来事であった。

陸上での調査

①砂浜やリーフ内での踏査　②伝承の収集



船に積まれていた石材（花崗岩）が多数散布する。

＊石材としての商品としてだけではなく、船体を安定させるバラストとして船底に積載されていたと考えられる

１．リーフ内踏査

干潮時に遠浅になるリーフの中にも多数の花崗岩が散布することが確認されている。

リーフ内での踏査作業風景

空撮による干潮時のリーフ内の状況（写真：本村麻里衣氏提供）

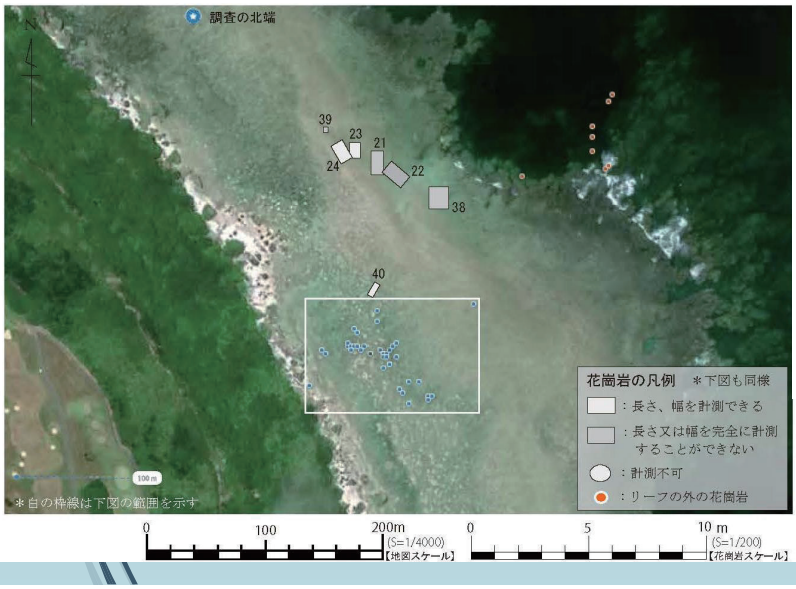
リーフ内踏査~調査方法~

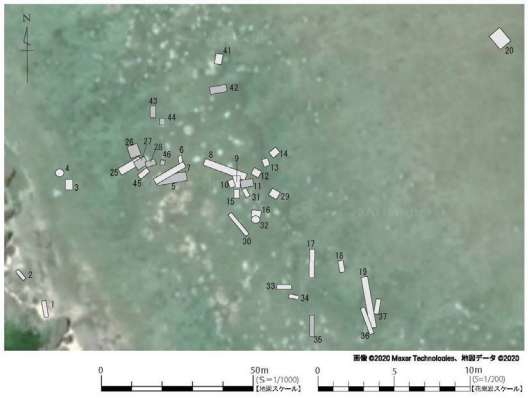
GPSによる位置情報計測

計測作業

計測作業

踏査の結果、リーフ内に約50点の花崗岩の分布を確認





リーフ内の花崗岩①

砂浜で確認された花崗岩
-切り出し時の加工痕が残る-

砂浜で確認された花崗岩
-砂に埋まった状態-

リーフ内の花崗岩②　　長細いタイプの花崗岩

№19 長さ340cm、幅43cm、厚24cm

№8　長さ292cm、幅46cm、厚さ -

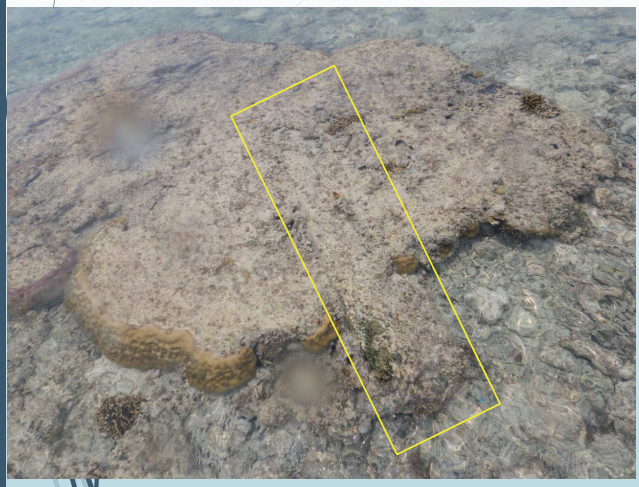
リーフ内の花崗岩③　四角いタイプの花崗岩

干潮時には、石が海面よりあらわれる

№23 長66cm、幅44cm、厚14cm

№24 長87cm、幅55cm、厚19cm

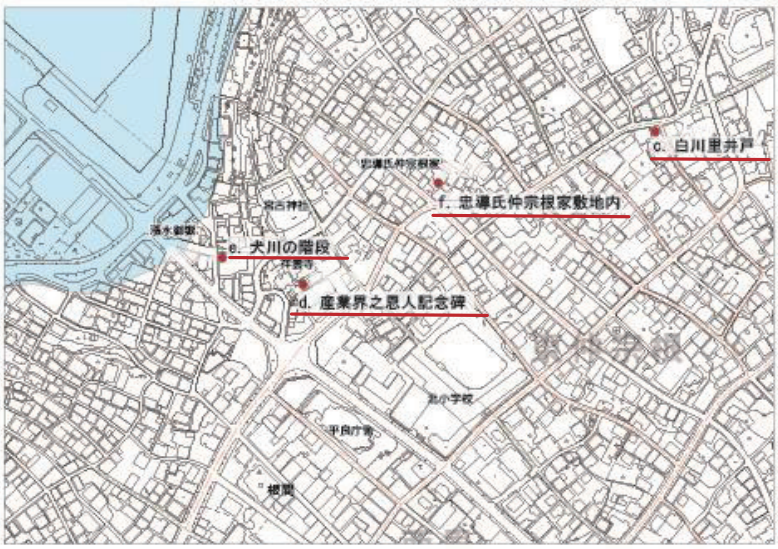
リーフ内の花崗岩④　サンゴに取り込まれた花崗岩



サンゴに取り込まれた花崗岩

サンゴに取り込まれた花崗岩

2．陸上で確認される花崗岩



【吉野】

民家①：1点

民家②：1点

【平良市街地】

白川里井戸：1点

産業界恩人之記念碑：7点

犬川の階段：2点

忠導氏仲宗根家：2点

【池間島】

民家：2点

現在、7地点から総数16点を確認

忠導氏仲宗根家内　2点

長さ：85cm
幅：45㎝
厚さ：16cm

産業界之恩人記念碑　7点

白川里井戸　1点

犬川の階段　2点

<今後の課題>

①今後、花崗岩の分析を行い吉野沖海底遺跡の花崗岩と同一のものであるのかを確認していく必要がある。

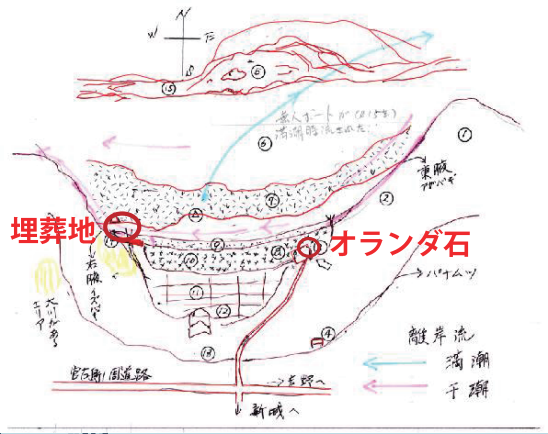
②なぜ、吉野の海岸にあった花崗岩が平良の市街地まで運び込まれ使用していたのか

資料収集

『沖縄写真帖』に掲載されている「宮古宮里商店」の写真【撮影：坂口総一郎(元沖縄県立第1中学校教諭)】

＊復刻版　宝玲叢刊『写真集 望郷・沖縄』第2巻 1981年
本邦書籍株式会社　より

上原久雄さん著『新城考』にみる吉野海岸沖海底遺跡の関連地



今後の課題と展望

- 吉野海岸沖での詳細な調査
- 陸上で確認される花崗岩の経緯と聞き取り調査
- 歴史史料の調査
- 水中文化遺産として周知と活用

文化講座

平良庁舎でのロビー展示

城辺庁舎での展示会

文化講座

原の駅よ さようなら」（１９５１年）の作詞も、佐伯孝夫である。佐伯は「東京市」という都会の出身である。佐々木は、先に曲を書き一部に詩的短文を書き添えていることもしばしばあったという。あるいは、故郷の阿武隈高原をイメージして作曲したのかも知れない。

苦力と豬花

サンフランシスコの中華街は、「花やさし霧の街／チャイナタウンの恋の夜」と情緒豊かに詠われているが、１９世紀中頃に中国から金鉱山の労働者（苦力、豬花）としてアメリカに渡った人々によって形成された街である。中国はアヘン戦争の結果、１８４２年イギリスとの間で締結された南京条約によって、香港の割譲と広州・福州、厦門・寧波・上海の５港を開港した。その後、大量の中国人苦力が、アメリカ向かうことになる。西里喜行は「１８４８年のカリフォルニア金鉱山の発見を契機に、さらに大量の労働力をアジアに求め、とりわけ海外渡航禁止令を無視して清国から大量の苦力（クーリー、中国人労働者）をアメリカその他へ向け「輸出」するにいたった。同年、フランスの二月革命直後，奴隷完全解放が決議されたことに象徴されるように、黒人奴隷貿易の禁止、奴隷制度廃止の潮流は、世界の趨勢となりつつあったにもかかわらず否、それ故にかえって、プランテーションに代表される資本主義企業は，黒人奴隷に代る労働力を探し求めざるをえず、ここに於いてインドや中国の苦力の存在がクローズアップされるにいたったのである」と述べている（「苦力貿易とロバート・バウン号事件」『琉球大学教育学部紀要 第一部No.29』）。

右の文章は、１８５２年、苦力が苛酷な取扱いに反抗して石垣島に漂着した苦力船ロバート・バウン号事件に寄せて語ったものであるが、翌年にも宮古島に苦力船が漂着し、ペリー艦隊が捜索に来ている。（拙稿「咸豊三年宮古島におけるイギリス苦力貿易船の漂着事件」『球陽論叢』）。また、苦力や豬花（「豬花」とは広東方言で海外に売られた婦女子や娼妓、妹仔＝売買養女のことをいう）を乗せたアメリカ行きのマリア・ルーズ号が途中横浜に寄港したとき、苦力たちは船内の苛酷な取扱いに対し日本に助けを求め、２３１人が解放されている。

（連載了）

関係がどのように描かれるか、気になっている。佐伯孝夫は、「いつでも夢を」（１９６２年、第４回日本レコード大賞受賞）等、多くの歌謡曲を作詞しているにもかかわらず、自伝はなく、本格的な評伝も確認できない。また、佐伯は作詞以外の社会的活動（保守的言論または左翼的言論）にほとんど関わった形跡が見られない。純粋に大衆歌謡の世界のみで生きた詩人であった。

サンフランシスコのチャイナタウン

渡辺はま子の「サンフランシスコのチャイナタウン（桑港のチャイナ街）」（作詞：佐伯孝夫、作曲：佐々木俊一）は、１９５０年にリリースされている。

桑港（サンフランシスコ）のチャイナタウン　夜霧に濡れて
夢紅く誰を待つ　柳の小窓　泣いている　泣いている
おぼろな瞳
花やさし　霧の街　チャイナタウンの　恋の夜
桑港のチャイナタウン　ランタン燃えて
泪顔　ほつれ髪　翡翠の籠よ　忘らりょか　忘らりょか
蘭麝（らんじゃ）のかおり
君やさし　夢の街　チャイナタウンの　恋の夜
桑港のチャイナタウン　黄金門湾の
君と見る白い船　旅路は遠い　懐しや　懐しや　故郷の夢よ
月やさし　丘の街チャイナタウンの　恋の夜

歌詞の内容は、たぶん日本人の恋人が連れ合ってチャイナタウンを散歩しているようなイメージであるが、「翡翠の籠（小籠包）」や「蘭麝の香り（蘭と麝香の香り）」が詠われており、中国文化がアメリカに定着していることを表現している。佐伯孝夫は、後に詳しく述べる中国人苦力（くーりー）・豬花（ちょか）を乗せたマリア・ルーズ号（一種の奴隷船）事件を知っていたはずである。１９４３年に、マリア・ルーズ号を題材とした映画『奴隷船』（大映）が公開されている。苦労してアメリカに渡った中国人苦力や豬花に思いを馳せた歌かも知れない。

作曲者の佐々木俊一は、原発事故で有名になった福島県双葉郡浪江町出身で、「高原の駅よ　さようなら」が最もよく知られており、ＪＲ常磐線浪江駅前と生家近くの阿武隈高原高瀬川渓谷沿いに記念碑がある。「高

63 サンフランシスコのチャイナタウンと苦力と豬花

戦前・戦後
歌謡懐旧雑録⑥

サンフランシスコのチャイナタウンと苦力と豬花

平良勝保

渡辺はま子の「サンフランシスコのチャイナタウン」について書いてみたい。小学生の頃は毎日のように蓄音機で聞いていた（聞かされた）。父が好きな歌のなかでは、珍しくとハイテンポな曲であったが、新しい物好きであったことから、アメリカ・東京という都会への憧憬と重ね合わせて聞いていたのではないかと思う。

作詞者佐伯孝夫のこと

作詞者の佐伯孝夫は、戦前から作詞家として活躍しており、多くの軍歌を作詞した西條八十に師事した。佐伯は、１９４４年に、軍歌「ラバウル海軍航空隊」（作曲古関裕而）を発表しているが、ほかに軍国主義賛美の詞は確認できない。１９４２年の「鈴懸の径」は、日米開戦後の歌とは考えられないほど、軽快な歌詞となっている。「ラバウル海軍航空隊」を除けば、戦前は「勘太郎月夜唄」（１９４３年）を最後に作詞活動は確認できない。戦争への無言の抵抗であったかもしれない。しかし、先に述べたように、戦争末期には軍歌を作らないとならないような環境に追い込まれていた。

戦後は、戦前西條八十と組んで多くの軍歌を作曲した古関裕而とは、一切組んでいない。吉田正と組んだ歌が圧倒的に多い。今、古関裕而をモデルにした、ＮＨＫの朝ドラ「エール」が始まっているが、軍歌との

講座アンケート集計

１．今日の講座に参加しての感想やご意見をご記入下さい。

・初めて学んだ事だらけだったので知識が深まり今後活かしていきたいと思います。ありがとうございました。（60 代女性・宮古島市以外）

・①海底遺跡」というと、与那国島の古代（と思われる）の建造物（階段状）を思い浮かべる。本日の吉野海岸沖遺跡は考古学上の「海底遺跡」に分類されるのか、少なからず懐疑的です。座礁場所を遺跡とすれば全国数多ありすぎるからです。それに吉野海岸の石材の調査の目的がよくわかりません。まして、今年度になってからの調査ですし。（60 代男性・宮古島市内在住）

・吉野海岸沖海底遺跡についてはじめて知った。大変勉強になりました。ありがとうございました。（80 代男性・宮古島市内在住）

・P．P での写真説明よくわかった。（男性・宮古島市内在住）

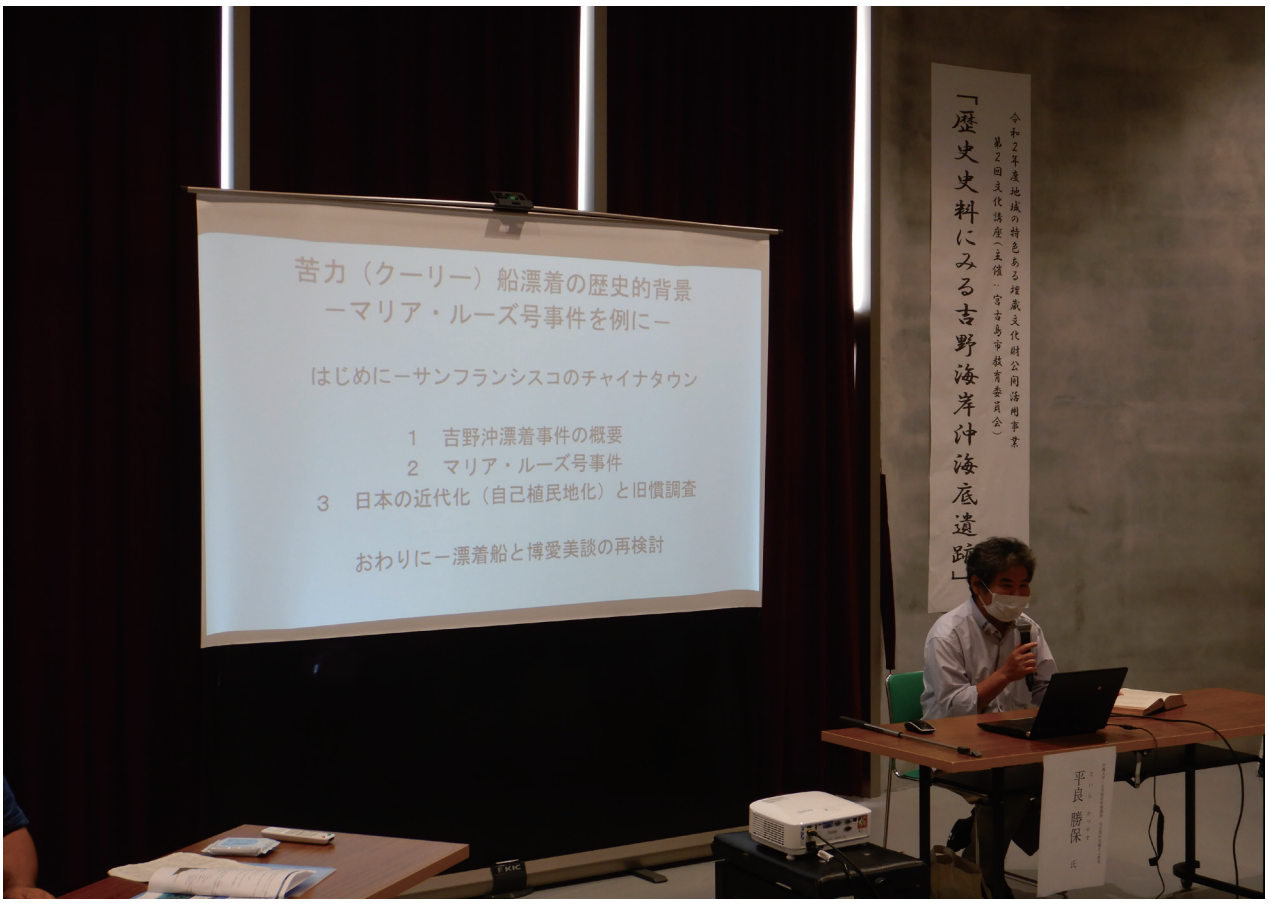
・吉野は古里です。いろいろ調査研究していただいて感謝です。ありがとうございます。

・宮古での漂着船の対応を詳しく話してほしい。宮古人がどんな行動をしたかが知りたい。（80 代男性・宮古島市内在住）

2．今後の水中文化遺産の活用や展望などについてご意見をご記入ください。

・私たちに意見を求める前に、教育委員会が活用や展望をどう考えているのかを先に示すべきと思います。（60 代男性・宮古島市内在住）

・埋葬地の確認調査をぜひやって下さい。（男性・宮古島市内在住）



未来創造センター　研修棟　公開講座　講師：平良勝保 (2020.11.28)

未来創造センター　研修棟　公開講座風景 (2020.11.28)

未来創造センター　研修棟
講座風景
講師：平良勝保 (2020.11.28)

未来創造センター　研修棟
講座風景
講師：久貝弥嗣 (2020.11.28)

未来創造センター　研修室
講座風景
(2020.10.28)

資料と調査で歴史ひもとく

吉野海岸沖海底遺跡で講座

市教委主催

第2回文化講座「歴史資料にみる吉野海岸沖海底遺跡」（主催・市教育委員会）が11月28日、市未来創造センター研修室で開かれた。講師は沖縄大学・大学院非常勤講師の平良勝保さん（日本経済史・沖縄近世史特論）＝宮古島市出身＝が務めた。平良さんは、167年前の1853年にイギリス船が宮古島吉野海岸沖で座礁、沈没し、30人が助けられたことについて「救助は当時の国際基準法に基づいて行われたもの。30人の救助はすごいこと」と強調した。参加者約20人は、今後の調査に期待を寄せていた。

市教委が配布した資料によると、1853年、船名不明のイギリス船が宮古島吉野海岸の沖で座礁、沈没した。この船は苦力（くーりー、中国人労働者）貿易に関わる船で、中国の広州から船員30人、苦力243人を乗せて出港し、アメリカのサンフランシスコへ向かう途中に海難事故に遭った。この事故の生存者は船員6人と苦力24人のみで、船員24人と苦力219人の計243人が死亡するという悲惨な海難事故であったとみられる。

講師を務めた平良さん（左）と報告した久貝さん（右）
＝11月28日、市未来創造センター研修室

平良さんは、1810年改定の略称「異国船救助規定」や柳田国男筆写本「宮古島近古文書」（成立年代不詳）、1876年に宮古島に建立されたドイツ皇帝博愛記念碑とその背景にある宮古島近海の測量などについて論じた。

市教委の久貝弥嗣さんは「吉野海岸沖海底遺跡におけるリーフ内・陸上調査」と題し報告した。

久貝さんは「今後の調査研究で船名は明らかになるのでは。新城地域や吉野地域では、遺体が埋葬されたとの伝えはあるが、埋葬地は特定されていない。今後磁気探査などを利用して調査したい」と語った。

また「吉野地域では、海底から引き揚げられた細長い花こう岩、柱状花こう岩、四角い花こう岩、方形状花こう岩のことをオランダ石と呼んでいる。加工された花こう岩は御影石ともいう」と話した上で「花こう岩についての情報を提供してほしい」と市民に呼び掛けた。

連絡先は、市教委文化財資料室（電話77・8336）まで。

宮古新報

2020年（令和2年）11月29日 日曜日 （8）

市教委 リーフ・陸上調査を報告

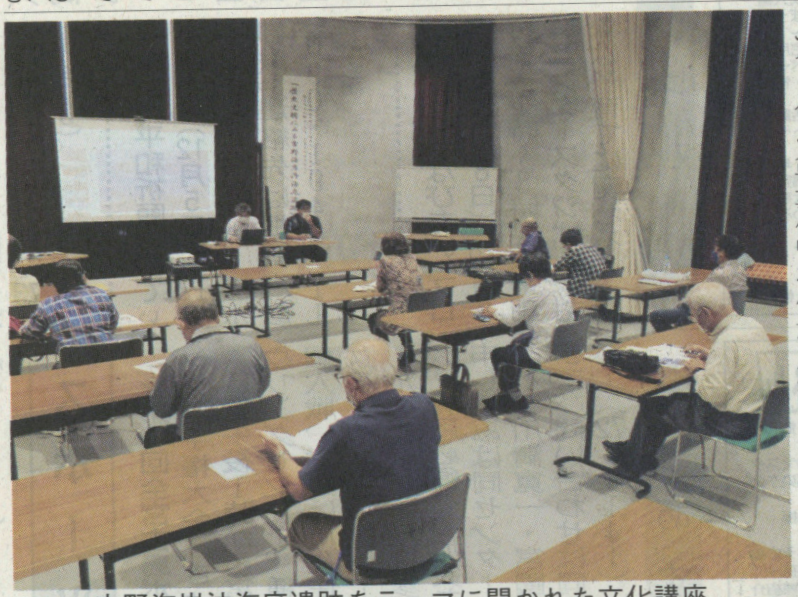
吉野海岸沖海底遺跡 平良勝保さん（市史編さん委員）講演

2020年度地域の特色ある文化財公開活用事業第2回文化講座「歴史資料に見る吉野海岸沖海底遺跡」（主催・市教育委員会）が28日、未来創造センター研修室で行われた。市教委生涯学習振興課文化財係が同遺跡リーフ内及び陸上で実施した調査について報告。市史編さん委員の平良勝保さん（沖縄大学・大学院非常勤講師）が講演を行った。

1853年に船名不明のイギリス船が中国広州から苦力（中国人労働者）を乗せてアメリカへ向かう途中、吉野海岸沖で座礁沈没して200人余の苦力と船員が死亡する海難事故があり、県立埋蔵文化財センターの海底調査では海底からおびただしい量の方形花崗岩石材や船の残骸などが確認されている。

同課文化財係の久貝弥嗣さんはリーフ内で発見された花崗岩とよく似た形の花崗岩が市街地の忠導氏仲宗根家内や産業界之恩人記念碑、犬川の階段などで見つかったことから「吉野海岸のものと同じものか、岩石の成分など調査が必要」とした。また同遺跡について「苦力貿易というテーマで考えると遺跡として価値は高いのでは」と述べた。また水中文化遺産に関する情報提供も呼びかけた。

平良さんは講演で明治5年に神奈川県で起きた「マリア・ルーズ号事件」を例に苦力船漂着の歴史的背景、「宮古島近古文書」の史料をもとに吉野海岸沖の座礁沈没事故の概要などについて解説した。



吉野海岸沖海底遺跡をテーマに開かれた文化講座
＝未来創造センター研修室

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業 第４回 文化講座

発掘調査報告

－ティラフグ遺跡・保里遺跡・西中共同製糖場跡－

ティラフグ遺跡［東仲宗根］→
14世紀代の集落遺跡。柱を用いた建物跡が確認されています。

←保里遺跡［西仲宗根］
15～16世紀の集落遺跡。土器や動物骨などが多量に廃棄されたゴミ捨て場のような穴が確認されています。

西中共同製糖場跡［西里添］→
煉瓦を積み上げて構築されたカマド跡とみられる遺構が複数確認されています。

日　時：令和３年１月24日（日）午後２時～４時 / 場所：未来創造センター・研修室

定　員：２０人（事前申し込み制）

報告者：久貝春陽・久貝弥嗣（宮古島市教育委員会）

申し込み・問い合わせ：0980-77-8336（文化財資料室）　＊平日のみの受付になっております

＊同会場（研修室）で講座に関連する遺跡の展示を午後１時より行います。講座内で展示解説も行います。

＊講座にご参加の際には、マスク着用、手指消毒、検温の実施にご協力お願いいたします。

主催：宮古島市教育委員会

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業 第４回 文化講座

発掘調査報告

－ティラフグ遺跡・保里遺跡・西中共同製糖場跡－

展示パンフレット

ティラフグ遺跡［東仲宗根］→
14 世紀代の集落遺跡。柱を用いた建物跡が確認されています。

←保里遺跡［西仲宗根］
15 ～ 16 世紀の集落遺跡。土器や動物骨などが多量に廃棄されたゴミ捨て場のような穴が確認されています。

西中共同製糖場跡［西里添］→
煉瓦を積み上げて構築されたカマド跡とみられる遺構が複数確認されています。

展示期間：令和３年１月 19 日～１月 29 日
展示場所：宮古島市未来創造センター・図書館ブラウジングコーナー

主催：宮古島市教育委員会

ティラフグ遺跡

【 所 在 地】宮古島市平良字東仲宗根

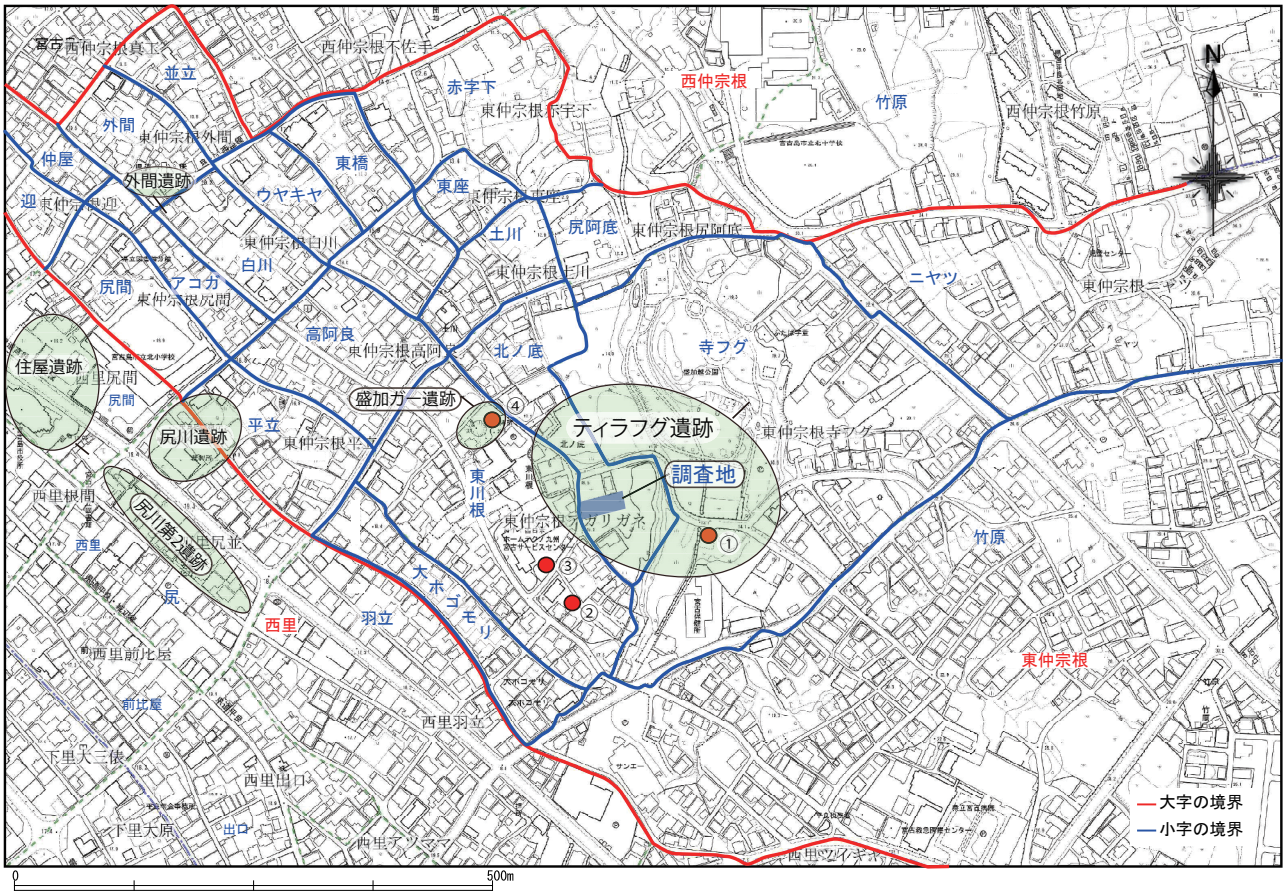
【 調査年月日】平成 30 年 10 月～ 12 月

【 調査概要】ティラフグ遺跡の発掘調査は、建物の建設に伴う記録保存調査として実施されました。発掘調査では、２つの掘立柱建物跡が検出されています。建物の柱穴からは、14 世紀前半～中頃の中国産の陶磁器（白磁）が出土しており、確認された２つの建物は同時期（14 世紀前半～中頃の時期のものであると考えられます。

【 ポイント】柱穴から出土した 14 世紀中頃の中国産の陶磁器は、白磁ビロースクＩ類と分類される陶磁器です。この時代は、中国南部から台湾、八重山、宮古へいたる交易路がきづかれ、遺跡から出土する陶磁器の種類をみると、沖縄諸島の遺跡とは異なる様相を示しています。宮古島における 14 世紀代の発掘調査例は少なく、同時代の建物跡の確認は貴重な調査事例となりました。

発掘調査地近景

【 参考資料】『 ティラフグ遺跡』宮古島市教育員会 2018 年

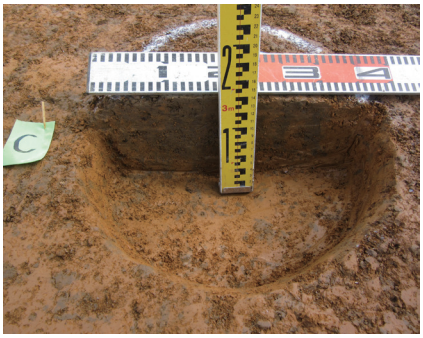


発掘調査の位置と周辺文化財分布図

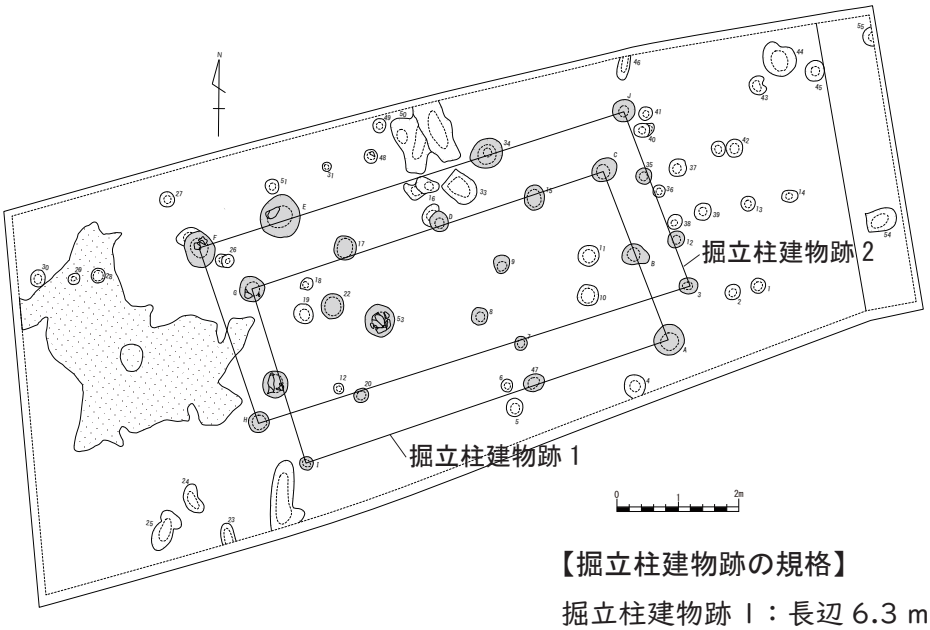
①寺フグ御嶽　② NTT 東隣御嶽　③大親主のトゥクル（ 白川氏）　④盛加御嶽・盛加ガーイビ

遺構検出状況

発掘作業風景


柱穴の断面状況

2 基の掘立柱建物跡遺構（ 白糸で結ばれている四角形が建物跡を示します）



掘立柱建物跡の検出図

発掘調査で確認されたいくつもの穴 (pit) の配置をみていくと、規則性をもった穴の配列を確認することができます。

左の遺跡の図面をみると、線で結ばれた四角形の形に、穴が規則的に配列されており、建物を建てる際の柱の穴であることがみてとれます。

【掘立柱建物跡の規格】

掘立柱建物跡 1：長辺 6.3 m ×短辺 3.1m 11 の柱穴を確認

掘立柱建物跡 2：長辺 7.2 m×短辺 3.0m 12 の柱穴を確認

コラム　与那覇はら軍とティラフグ遺跡

14 世紀の頃、平良より東に与那覇はらという集落地があり、その首領（しゅりょう）を佐多大人（作多おふひと）といいました。与那覇はらの兵は、十行（つら）（約 1,000 人）にもおよび、宮古島の村々を襲い、その支配圏を拡大していきます。与那覇はらは、あと一息で宮古島全域を支配するまでになりましたが、現在の平良根間・外間に拠点を置く目黒盛（めぐろもり）との戦いで敗れることとなります。これらの与那覇はらの関わった一連の争乱は、与那覇はら軍といわれています。

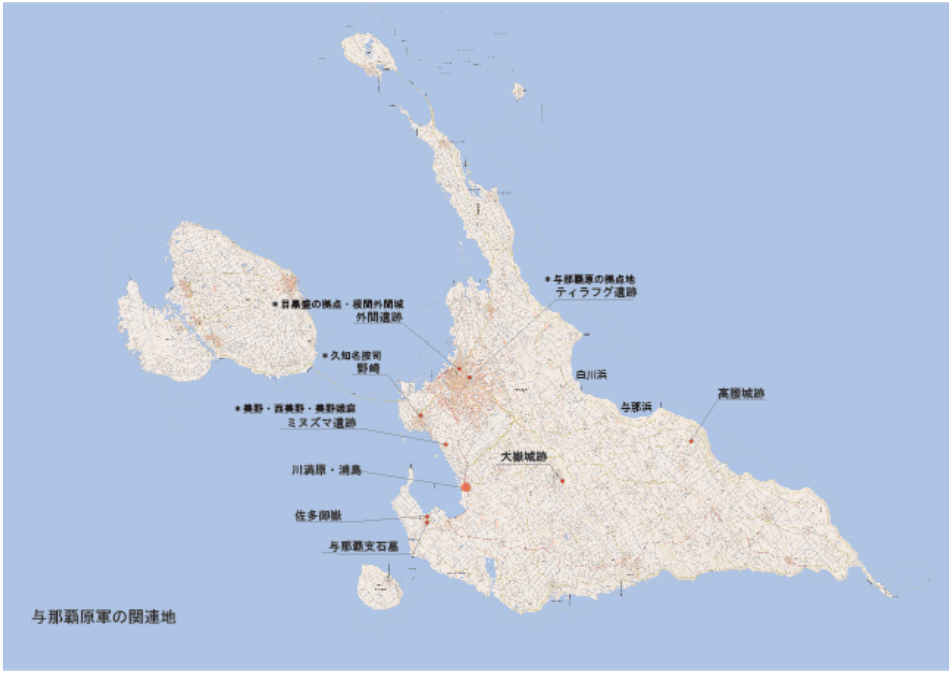
突如として、宮古島に現れた武力的な集団である与那覇はらは、多くの謎にみちた集団ですが、宮古島の郷土史家稲村賢敷（いなむらけんぷ）は、ティラフグ遺跡が与那覇はらと関連の深い地域であると考えています。

稲村は、著書『宮古島庶民史』の中で次のように記しています。「彼等（与那覇はら）は盛加川を中心として住み、その西は与那覇原と称し、東は川根原と称し、ほぼ現在の東川根付近である。（中略）佐多大人の居城は盛加川の南西方に当り、与那覇原番所の址と称している。別段要害（ようがい）という程のことはなく、平坦の域である。この居城の南方を大籠ということから、昔は大きな部落があったものと思われる。大籠の南は羽立である。羽立は南里のことで与那覇原屋敷を中心とした名称であるから、当時この附近まで与那覇はらの部落であったとものと考えられる。」と記しています。

さらに稲村は、著書『宮古島旧記並に史歌集解』所収の「宮古々代史に於ける倭寇の影響（琉米文化会館における講演原稿）」の中で、稲村がティラフグ御嶽で発掘を行い、中国産陶磁器の青磁（せいじ）の破片などの資料が出土している状況などから、ティラフグ御嶽一帯が与那覇はらの本拠地であると考えています。

盛加川

なお、与那覇はら軍に勝利した目黒盛は宮古島の首長となり、敗れた与那覇はらの一員であった真佐久は、白川浜を出帆（しゅっぱん）して、沖縄島の中山王察度（さっと）に謁見（えっけん）し、再び宮古島に戻り与那覇勢頭（よなはせど）（白川氏元世恵源）として、宮古島の統治に関わっていきます。



コラム　遺跡から確認されたグスク時代の建物跡

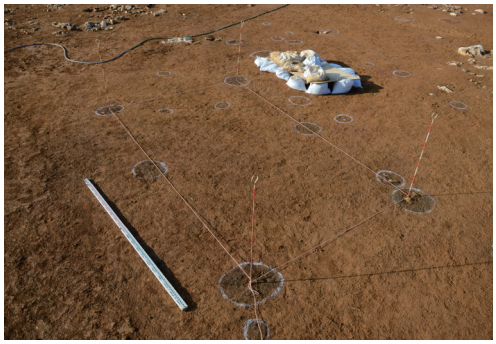
沖縄県の考古学の時代区分において 11 世紀後半から 16 世紀は、グスク時代といわれています。ティラフグ遺跡では 14 世紀代の建物跡が確認されましたが、これまでに宮古島市内の発掘調査で確認された建物跡について年代ごとにみてみましょう。

【11 世紀後半～ 12 世紀】

この時代の建物跡が確認された遺跡は、2 遺跡のみにかぎられます。ミヌズマ遺跡（松原）からは、同時期の沖縄島の遺跡と類似する 6 本柱の建物跡が複数確認され、松原遺物散布地（松原）からは、柱の間が約 1m と比較的狭く、13 以上の柱をもったミヌズマ遺跡とは異なる建物跡が確認されています。

ミヌズマ遺跡（写真左）
規格：4.2m × 2.1m

松原遺物散布地（写真右）
規格：4.3m × 3.5m ＋α
＊＋αは、調査区の外にも延びるため全体の長さが不明であることを示す

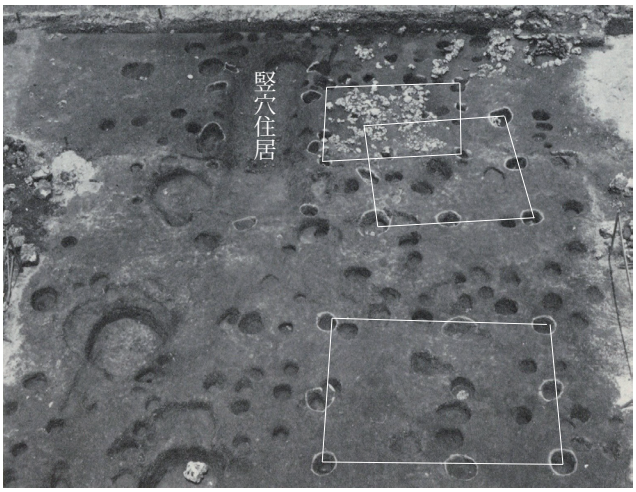


【15 中頃～ 16 世紀】

1981 ～ 82 年の住屋遺跡の発掘調査では、15 世紀中頃に竪穴住居から掘立柱建物跡に建物の形態が移り変わったことが報告され、1990 年の住屋遺跡の発掘調査や、尻川遺跡の発掘調査でも同様の変遷が確認されています。

また、友利元島、砂川元島では柱の間が約 1m とせまく、柱を安定させるために、柱の穴の底や縁に石灰岩をつめる工夫がなされています。

住屋遺跡（ 1990 年調査）で確認された竪穴式住居。周辺には柱穴もみられます。5.3m × 2.0m の隅丸長方形。



友利元島で確認された掘立柱建物跡と、石灰岩を詰めた柱穴。規格 3.5m × 3m ＋α

住屋遺跡（1981 ～ 82 年調査）で確認された 2 基の竪穴式住居と 3 基の掘立柱建物跡。竪穴住居の規格は、5m × 2m の隅丸長方形。掘立柱建物跡の規格は、3m × 4m と、3.6m × 3.6m と、3.3m × 2.9m。＊もう 1 つの竪穴住居の規格は不明。

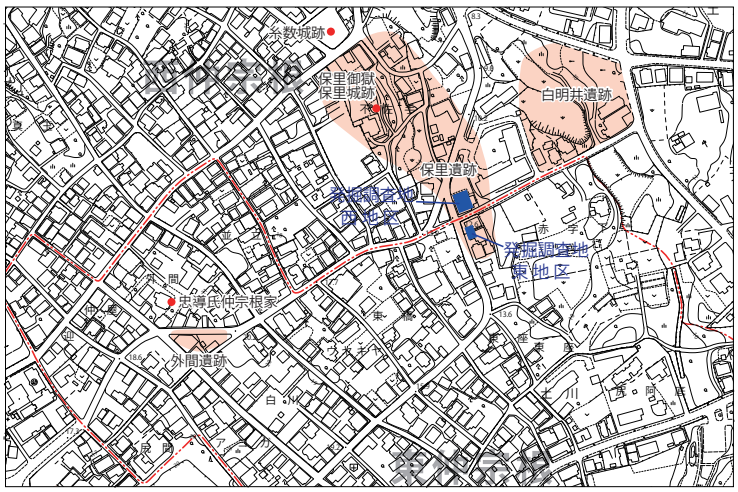
保里遺跡（ほさと）

【所 在 地】宮古島市平良字東仲宗根・西仲宗根

【調査年月日】平成 30 年 8 月～平成 31 年 3 月

【調査概要】保里遺跡の発掘調査は、市場通り線（西仲宗根工区）の拡幅工事に伴い行われたもので、道路を隔てて西地区と東地区という 2 つの調査区を設定して行いました。西地区では、長辺 7.1m、短辺 3.2m にもおよぶ大きな穴（土坑 1）が確認され、穴の一部は南側にさらにのびています。この大型土坑内からは、15 世紀中頃～ 16 世紀前半の中国産の陶磁器や宮古島産の土器の他、当時の食料であった貝や魚・動物の骨、穀物などが多量に出土しており、当時のゴ捨て場のような穴（廃棄用土坑）であったと考えられます。東地区からは 225 もの穴が密集して確認されています。

【ポイント】保里遺跡で確認された大型土坑は、外間遺跡や根間・西里遺跡からも確認され、当時の生活を知る重要な資料であります。



遺跡の位置と周辺文化財（図の上が北を示す）

【参考資料】『保里遺跡』宮古島市教育員会 2019 年

発掘調査の状況（写真左側が東地区、右側が西地区になります）

西地区の遺構検出状況（ 赤土の面に点在する黒土の部分が昔の人々の生活の痕跡を示しています。）

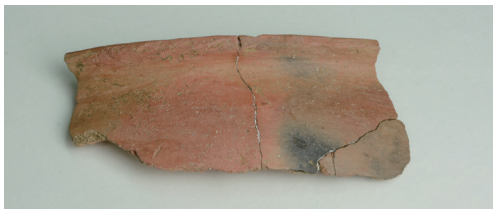
土坑Ｉの完掘状況

土坑Ｉの発掘作業風景（ 貝を一つ一つ丁寧にほりだしていきます。）

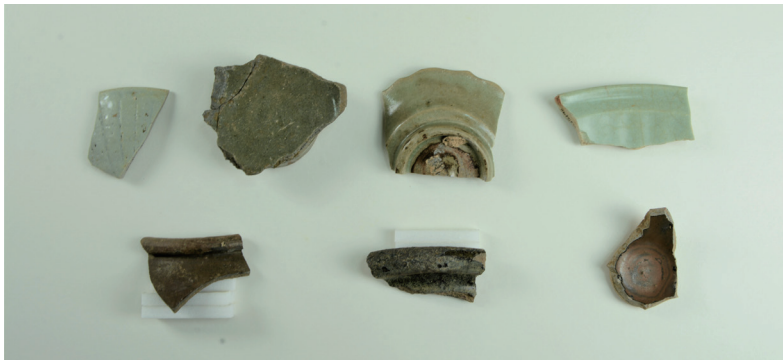
土坑Ｉの遺物の出土状況。多量の貝がまとまって廃棄されている状況が分かります。

土坑Ｉから出土した全ての遺物。多量の土器、魚骨、動物骨、貝類が出土しています。

遺物の出土状況　土器や動物骨などがまとまって出土し（写真中央、右）、土坑 1 以外にも小型の廃棄土坑（土坑 12）も確認されています（写真左）。



出土した土器　出土した遺物の中で最も多いのが土器で、壺形、鉢形、浅鉢形、碗形の土器がみられます。また、土器の中には、表面を磨き上げた宮古島に特徴的な土器もみられます。



中国産陶磁器　土器の次に出土量が多いのが中国で生産された陶磁器です。青磁（せいじ）、白磁（はくじ）、青花（せいか）、褐釉陶器（かつゆうとうき）などの種類があり、保里遺跡からは 15 世紀中頃から 16 世紀頃の年代の陶磁器が出土しています。

土製の焜炉（こんろ）　中に炭などを入れ、鍋を暖めて、調理を行います。東南アジアでは現在でも用いられ、宮古島市内での出土は初めてで、18 ～ 19 世紀頃の沖縄産陶器とともに出土しています。

コラム 15 ～ 16 世紀のゴミ捨て場 - 廃棄用土坑 -

保里遺跡で確認された、昔のゴミ捨て場のような大きな穴（廃棄用土坑）は、これまで外間遺跡や、根間・西里遺跡からも確認されています。15 世紀～ 16 世紀にかけてのこのような大型の廃棄用土坑の調査事例は、県内でも類例がなく、土坑内から出土する動物骨や、穀物などの植物遺体は当時の生業を考えるうえで重要な資料となります。

（1）外間遺跡

外間遺跡では、ゴミ捨て場のような廃棄用土坑が 4 基確認されています。最も大きい土坑（土坑1）は、長径が約 6m、短径約 2.5m の楕円形をしています。この土坑 1 内からは土器や陶磁器の破片とともに、当時の食料であった動物の骨が少なくともウシとブタが各 6 頭、ウマとイヌが各 1 頭出土し、多量の魚の骨や貝も出土しています。また、穀物としてアワ、オオムギ、コムギ、イネなども多量に出土しています。その他の 3 つの廃棄用土坑は、直径が約 2.5m ほどとやや小型ではありますが、土坑 1 と同様の遺物が出土しています。

外間遺跡の廃棄土坑　土坑 1（写真左）、土坑 3b-2・4（写真右）

(2) 根間・西里遺跡

平成 31 年に現在の西里郵便局の西側で行われた発掘調査では、15 ～ 16 世紀の中国産陶磁器などが出土する廃棄用土坑が確認され、動物骨（魚骨を含む）、貝類、炭化物も多く出土しており、廃棄土坑であると考えられます。本資料については、現在整理途中です。

根間・西里遺跡の廃棄土坑

コラム　保里遺跡から出土した植物遺体と土器圧痕分析

保里遺跡の廃棄用土坑（土坑１や土坑12など）の発掘作業時には、形ははっきりとしないものの、炭化した粒が多く見られ、５～１㎜ほどの当時の穀物類も含まれていることが考えられました。そこで、各土坑内の土をそのまま採集し、土を水で洗いながら、土の中に含まれている穀物類の回収作業（バケツ式フローテーション）を行いました。

その結果、最も出土量が多かったのはアワで、次いでオオムギ、イネ、コムギ、マメ科とつづき、僅かながらキビやササゲの出土も確認されています。アワを主体とし、オオムギの出土量が多い傾向は、外間遺跡などでも同様で、イネやコムギなどの出土割合の高い沖縄島とは異なる宮古島の地域的な特徴を示すものといえます。

また、土坑１から出土したオオムギとイネの年代測定を行ったところ、いずれも約15世紀後半～16世紀前半の測定値がえられており、出土する陶磁器の年代観とも整合性がえられています。

バケツ式フローテーションによる植物遺体の回収作業風景（他遺跡の参考写真）

専門家による顕微鏡を用いた植物遺体の分析作業風景

保里遺跡から検出された植物遺体

保里遺跡から検出された植物遺体の集計表　＊大型土坑は土坑１としています

LF No.	地区	遺構	層序	サンプル量（ℓ）	浮遊物量（g）	イネ		イネ小穂軸	イネ類	イネ？	コムギ		オオムギ		オオムギ穂軸	ムギ類	アワ（顆果）		アワ（有ふ果）	アワ内外頴	キビ	アワ？	ミレット	マメ科	ササゲ属	ブドウ属	堅果類	不明種子	同定不可能	合計
						粒	片	片	片	片	粒	片	粒	片	片	片	粒	片	粒	片	粒／片	粒／片	粒	片	片	粒	粒	粒／片	片	粒／片
1	西	土坑1(東側)	覆土	5	29.33	26	23	7		3	9	3	40	4	2	35	128	55	10	7	8		4	2		1	1	1	520	889
2	西	土坑1(東側)	覆土	7.5	12.48	4	13	6	1		8	1	19	8	2	30	58	7	1	2		1	3	2					170	336
3	西	土坑1(東側)	覆土	4.5	10.99		1				4		27	5	5	15	34	7		2	1	1	1	2					116	221
4	西	土坑1(東側)	覆土	1.5	3.37								4			4	6	2						5					33	54
5	西	土坑1(東側)	覆土	5.5	17.88			1			9	1	8	1		12	30	9		1	1	2		13			1		170	259
小　計　①				24	74.05	30	37	14	1	3	30	5	98	18	9	96	256	80	11	12	10	4	8	24	0	1	2	1	1009	1759
6	西	土坑10(南側)	覆土	1	0.11		1																						2	3
7	西	土坑10(北側)	覆土	3	0.35								1			1				1		1							14	18
9	西	土坑10	覆土	8	1.46	1	6	1					6	1	2	4	4	3					1		1				44	74
小　計　②				12	1.92	1	7	1	0	0	0	0	7	1	2	5	4	3	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	60	95
8	西	土坑12	覆土	9	5.26			1			4		18	2		26	18	7		2				4					286	368
小　計　③				9	5.26	0	0	1	0	0	4	0	18	2	0	26	18	7	0	2	0	0	0	4	0	0	0	0	286	368
合　計(①＋②＋③)				45	81.23	31	44	16	1	3	34	5	123	21	11	127	278	90	11	15	10	5	9	28	1	1	2	1	1355	2222

宮古島における土器圧痕調査の成果と穀物利用

○真邉　彩[1)]・千田寛之[2)]・久貝弥嗣[3)]・小畑弘己[4)]
1）（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，2）（株）文化財サービス，
3）宮古島市教育委員会，4）熊本大学大学院人文社会科学研究部

1. これまでの調査と成果

- 琉球列島における穀物資料の復元のため，2017 年より圧痕調査を開始
- ミヌズマ遺跡では，主要穀物が全て検出され，宮古島最古の穀物資料となった
- 検出資料の中でアワが一番多く，X線ＣＴ装置の分析により，多量混入土器も発見

課題
- ミヌズマ遺跡だけなのか…
- 同時期の宮古・八重山諸島は…
- なぜ，アワが多いのか…

→

- **対象時期を広げた調査**
- **植物資料の集成**
- **X線CT装置による内部観察**

2. 調査対象

				（調査点数）
① 松原部落内遺物散布地	・・・	11 世紀　～ 12 世紀	（鍋形主体）	／　63 点
② ミヌズマ遺跡	・・・	13 世紀後～ 15 世紀前	（鍋・甕・碗形）	／　1, 825 点
③ 保里遺跡	・・・	15 世紀中～ 16 世紀	（壺・鉢形）	／　1, 944 点

3. 圧痕調査成果と植物資料

遺跡名	年代	種別	イネ	コムギ	オオムギ	ムギ類	アワ	キビ	マメ科
松原部落内遺物散布地	11c～12c	圧痕					6		
ミヌズマ遺跡	13c後～14c中	炭化物	6	27	84	53	102		16
	13c後～15c前	圧痕	5	1	11	3	210	3	2
ビロースク遺跡	13c～15c前	炭化物	1			約30			
フルスト原	13c後～16c前	炭化物	4	2			2		3
保里遺跡	14c～15c	炭化物	67	35	116	96	347	10	24
		圧痕	1		2	2	83		
桃里恩田遺跡	14c～15c	炭化物	不明			不明			
新里村西遺跡	14c～15c	炭化物	2				1		
住屋遺跡	15c～17c前	炭化物	62	191	1, 217	562	5		245
平得仲本御獄遺跡	15c～16c	炭化物				7			
外間遺跡	16c前～17c前	炭化物	502	685	2, 683		3, 923	442	
根間・西里遺跡	グスク時代～近世	炭化物	1	11	33	21			3

【　炭化種実　】
- ムギ類とアワの比率高

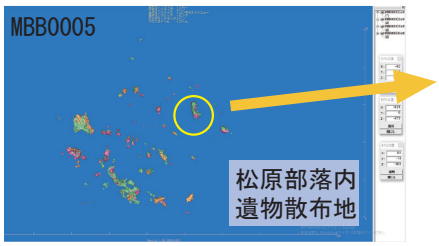
↕

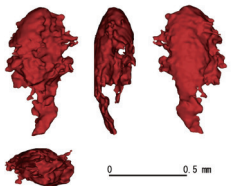
【　圧痕資料　】
- 通時的にアワの比率高

↓

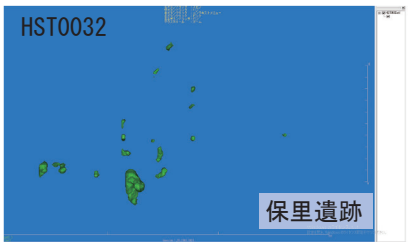
アワを選択的に土器に混入した？
（混和材？）

4. X線CT装置による潜在圧痕の分析





アワ以外の可能性がある資料を選別し，拡大分析



※　最古段階で存在したのは，アワだけなのか？
有機物の空隙の中に，他の穀類は入っていないのか？

※　有機物の混入が少ない中でアワが多く見つかるのはなぜか？
イネやムギの副産物は入っていないのか？

検討中：　①多量混入の意味，②アワが主体を占める意味，③当時の穀物生産・流通体系

本発表は，小畑が研究代表者を務める 2019・2020 年日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「第三の発掘ー人為化石が開拓する未来の考古資料学の構築」（課題番号：19H00541）の成果の一部である。また，撮影機器は SOFTEX 社製ＣＴ機能付軟Ｘ線装置・SOFTEX WORKLEADER・90 型，撮影画像の解析ソフトは TOMOSHOP ver. 5.0（緑野リサーチ製）を使用した。

西中共同製糖場跡（にしなかきょうどうせいとうじょうあと）

【所在地】宮古島市城辺西里添

【調査年月日】令和元年６月、10～12月

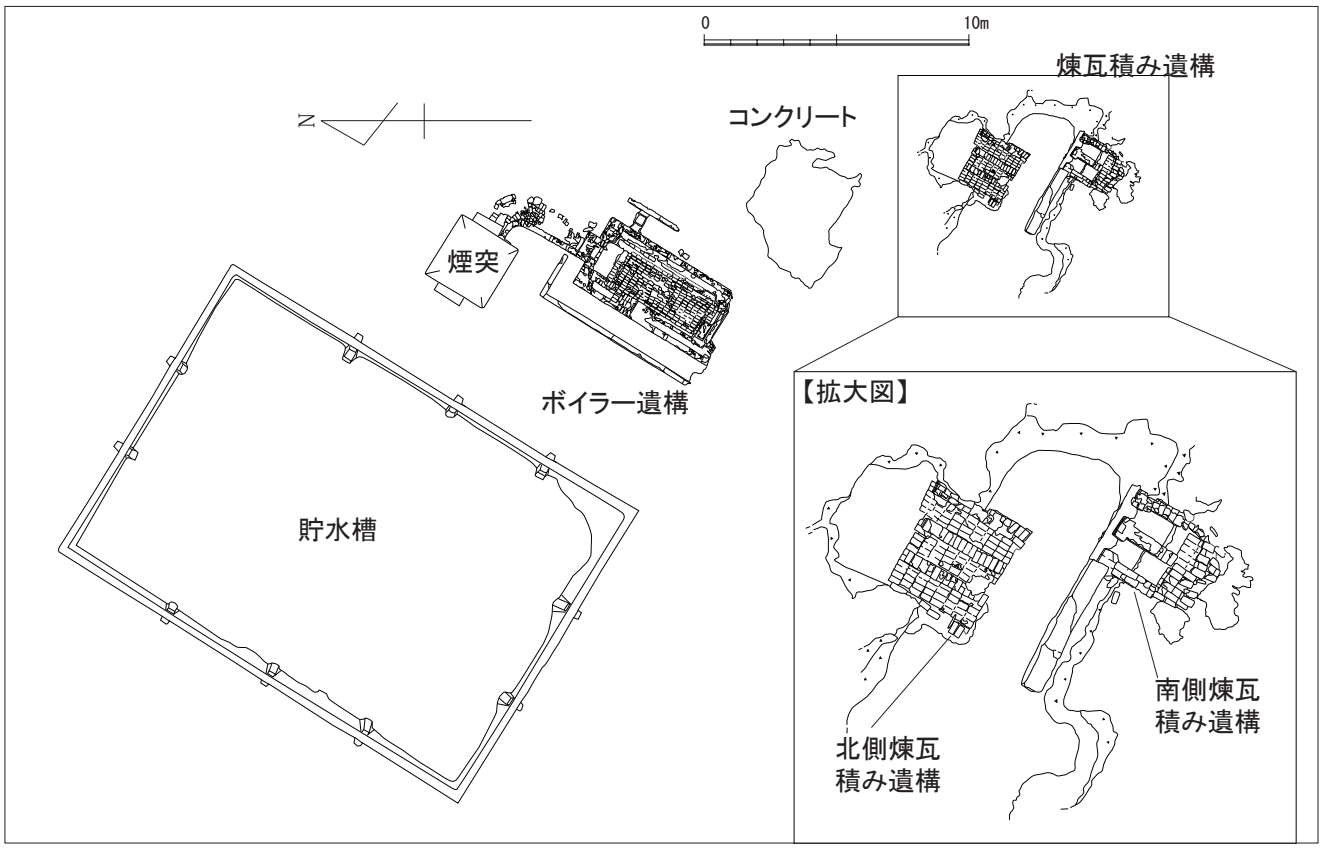
【調査概要】西中共同製糖場跡一帯で行われた圃場整備（ほじょうせいび）工事に伴い、令和元年11～12月にかけて緊急調査が行われました。発掘調査では、２基の煉瓦積み遺構（れんがづみいこう）と、コンクリートで整地された跡が確認されました。２基の煉瓦積み遺構は、岩盤を1.5ｍほど掘り込んで作られた半地下の構造をなしています。その形態から、カマドとしての機能が想定されます。

【ポイント】旧西中製糖場跡は、これまで煙突（えんとつ）と貯水槽（ちょすいそう）のみが確認されていました。煙突は、イギリス積みで積まれ、現存する高さは約13ｍですが、頂上部は欠損しており、本来は約20ｍであったともいわれています。貯水層は、ボイラーの冷却水として使用され、長辺18.8ｍ、短辺13.3ｍ、深さ2.4ｍの形態をしています。今回新たに、ボイラー遺構とカマド跡と考えられる煉瓦積み遺構が確認され、その全体的な構造を考える調査成果であるといえます。

発掘作業風景

ボイラー遺構

発掘調査区全景（令和元年12月時）



西中共同製糖場跡の発掘調査図面

煙突に接続するボイラー遺構

令和元年 6 月に確認された長辺は 5.7 m、短辺は 3.1 mで、ボイラー使用時に発生する煙を煙突へと誘導する

床面は非常にフラットに整えられています。

２基の煉瓦積み遺構は、通路のような空間を挟んで構築されています。北側の煉瓦積み遺構（写真中段左）は、幅約 3.0m、奥行約 2.5m で、３つに区画されています。

南側の煉瓦積み遺構（写真中段右）は、幅約 2.0m、奥行 2.5m で、２つに区画されています。

なお、現在は煉瓦積みが残っていませんが、南側煉瓦積み遺構の西側にも同じように岩盤を削り込んだ跡があり、もう一つの煉瓦積み遺構があったと考えられます。

コラム - 西中共同製糖場の設立から現在まで -

昭和 17 年　西中共同製糖場の設立

組合員：西中部落、西西部落の方々あわせて 100 人程。

屋根は各棟ともセメント瓦建てであった。

電気技士、煙突技士等の技術者は本土から来島した。

ボイラーを漲水港から現場まで運ぶのに 2 日間を要し、荷馬車は特別に注文して造り、馬 2 頭に交代して引かせた。

荷馬車を引いた馬は、名誉ある馬として「サイレン号」、「ツル号」と名付けた。

昭和 19 年　旧日本軍により接収され、操業を中止。

戦時中に 2 基あった煙突の内の南側の煙突は爆撃をうけ倒壊

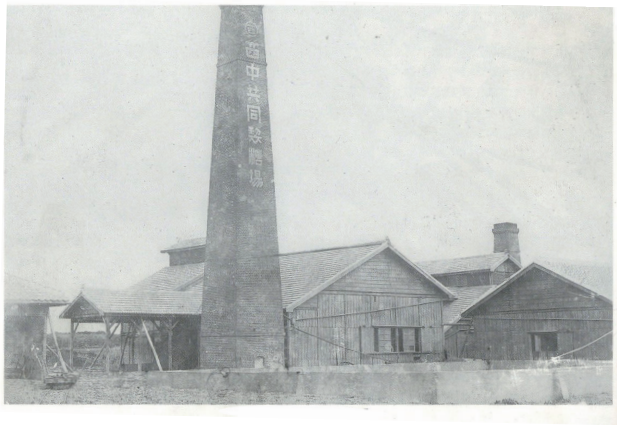
平成 25 年　「旧西中共同製糖場煙突」として国登録有形文化財（建造物）に登録

平成 29 年　「旧西中共同製糖場跡」として宮古島市史跡に文化財指定。

令和元年　6 月　煙突部分の補修工事を行い、ボイラー遺構が確認される。

11 ～ 12 月　圃場整備工事に伴い、煉瓦積み遺構などの発掘調査を行う

令和 2 年　旧西中共同製糖場再現検討委員会（久貝英世共同代表）により旧西中製糖場の模型の作成。模型が同年 11 月に宮古島市総合博物館へ寄贈。



宮国猛氏所蔵の旧西中共同製糖場完成時の写真

【参考 – 県内に残る製糖場の煙突 –】

沖縄県内には、旧西中製糖場跡以外にも、2 つの煙突が残されています。

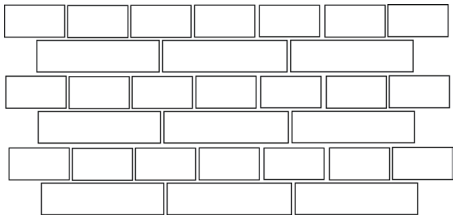
写真左は、八重瀬町宜次（やえせちょう　ぎし）の製糖工場跡煙突で、円筒状の形態をしています。高さは約 10m、直径 2.2m です。

写真右は、うるま市勝連の平敷屋（へしきや）製糖工場跡の煙突で、旧西中製糖場跡と同様のイギリス積の煙突で、高さは約 16 mです。

コラム - 模型の作成 -

これまでの発掘調査でえられた情報を、より分かりやすい形で示せるように、西中共同製糖場跡の模型の作成を行いました。煉瓦の一つ一つを縮尺をあわせて切り揃えながら模型の作成を行っています。煉瓦の大きさは、長辺 24.2 ㎝×短辺 11.5 ㎝×高さ 6.0 ㎝。

出土遺物　煉瓦には、「MINO SK32」や「CFB」と刻印があり、建物に使われていたと考えられるセメント瓦も出土しています。



イギリス積

煉瓦の大口（長辺）と小口（短辺）を一段ごとに交互に積む工法

模型の作成作業風景

令和 2 年度　地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業　第 4 回

文化講座「発掘調査報告展」 展示解説パンフレット

発行年月日：令和 3 年 1 月 19 日

編集・発行機関：宮古島市教育委員会

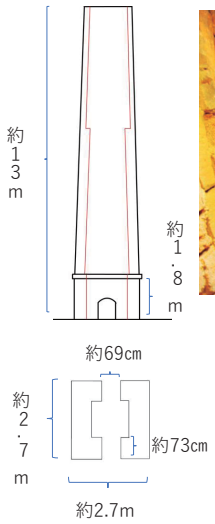
旧西中共同製糖場跡の概略

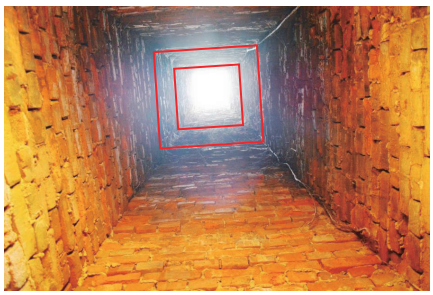
昭和16年　旧西中共同製糖工場の建設を始める。
昭和17年　旧西中共同製糖工場が完成する。
昭和18年　旧西中共同製糖工場の操業開始。
昭和19年　戦争のため、旧日本軍に強制接収。
～　戦争時の空襲や、台風等により南側煙突や工場は破壊され、煙突のレンガなどは業者が資材として売却したとされる。
昭和60年頃　地域生活の安全確保のため、損傷の激しい煙突の取壊が検討がされるが、工場建築当時の城辺村長　中村清一郎氏の業績の記念として末永く保存することとなる。
平成２５年　国登録有形文化財（建造物）として、国文化財登録原簿に登録されることとなる。

平成29年　煙突所在地の圃場事業計画が始まり、煙突の保存・保護活用の観点からアクセス路を含めた煙突部分の範囲を宮古島市指定史跡として指定される。
令和元年　煙突の仮補修工事を実施する。

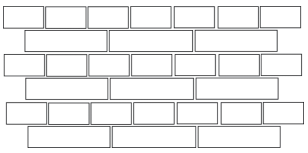
旧西中共同製糖場の指定範囲（青枠　国登録有形文化財　赤枠　宮古島市指定史跡）

煙突の構造





内部構造（下から頂上部に向けて）



イギリス積み

構造

① 底辺面積
横軸約2.7m×縦軸約2.7m

② 高さ
現状　約13m
頂上部が崩落している
為、本来は20mあった
とのいわれている。

③ 壁厚
約73cm

④ 開口部
東南と北西の2か所

⑤ 材質・工法
煉瓦製・イギリス積み

⑥ 内壁は段差を付けており
上部につれて薄くなる

貯水槽

東壁には、機銃掃射の弾痕が見られる。

四方の縁には、等間隔でレンガを配置したような痕跡が見られる。

縁には、ガラス瓶等の破片をコンクリートで固定している

構造

① 面積
長軸1.8m×短軸13.3m

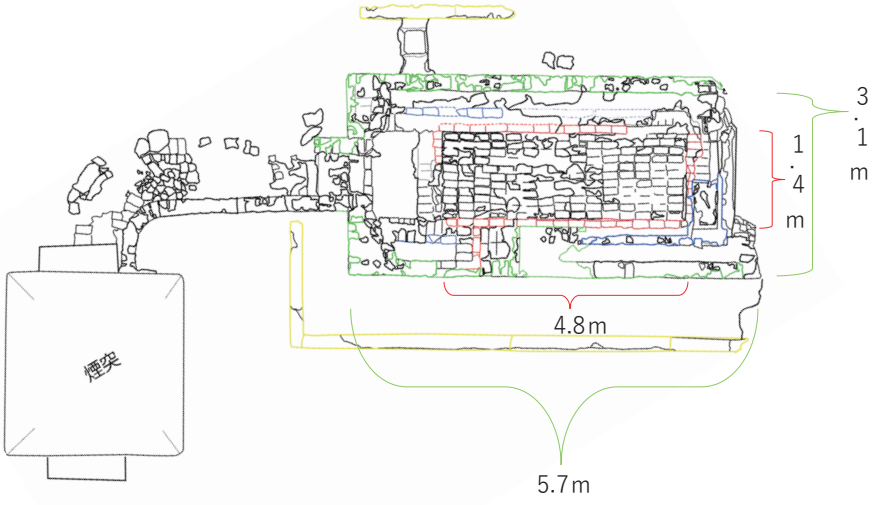
② 深さ
約３m

③材質
コンクリート製

④用途
雨水をため、工場用水として使用したとされる。

ボイラー施設　空中写真

ボイラー施設構造

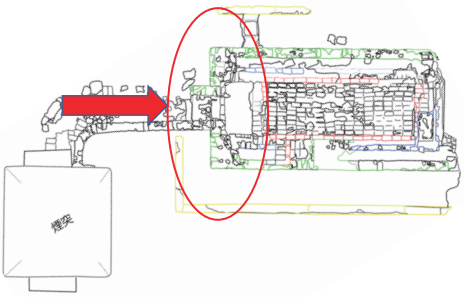


構造
① 面積（緑色）
長軸5.7m×短軸3.1m
内部（赤色）
長軸4.8m×短軸1.4m

②材質
煉瓦製

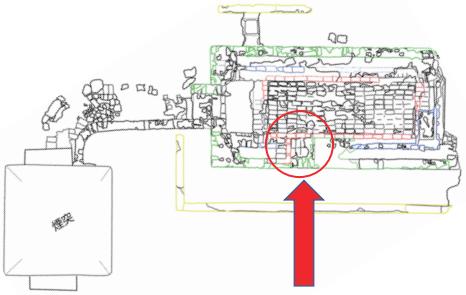
③その他
煉瓦製のボイラー施設を囲むようにコンクリート製の約20㎝程の高さの壁で囲われている。
煙突から東～南に湾曲する煙道で繋がっている。

ボイラー施設　写真



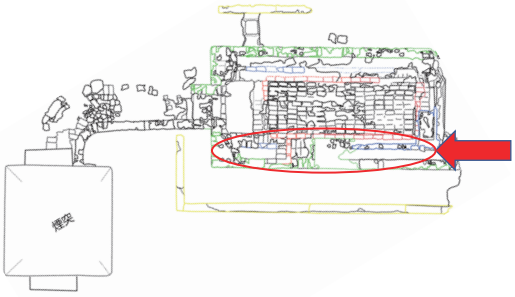
ボイラー施設と煙突を繋ぐ煙道接続部分
大量の墨が付着している

ボイラー施設　写真



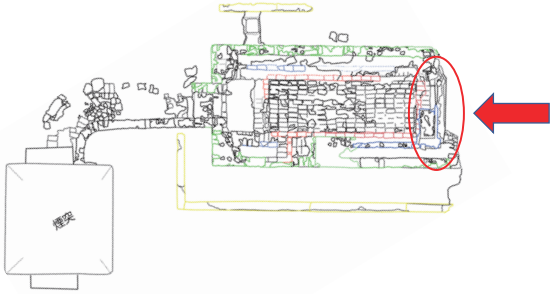
ボイラー施設の給水口部分
ボイラー施設の西壁付近に開口の様な部分が見られる。ボイラーに貯水槽の水を引き入れるための部分ではないか。

ボイラー施設　写真



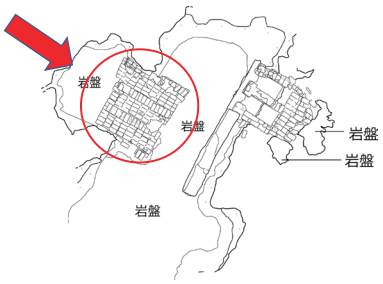
ボイラー施設の外壁部分
壁中に25cmほどの隙間を開けて煉瓦を汲んでいるように見える。

ボイラー施設　写真



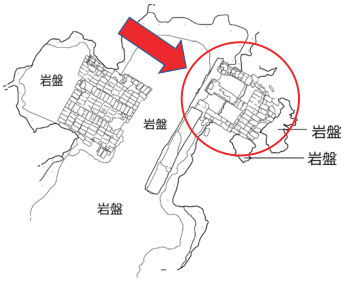
ボイラー施設の南壁下部
金属物の付着が見られる。ボイラ施設の燃料供給口だと思われる。

南側窯跡施設



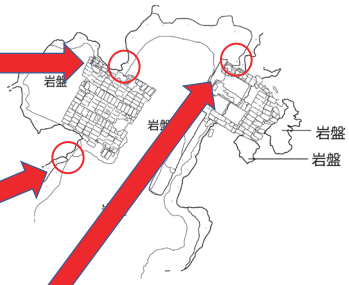
南側窯跡
幅3m×奥行2.5mの規格をきれいに三等分するように煉瓦で内壁を設け、3カ所の炉として構築している。

北側窯跡施設



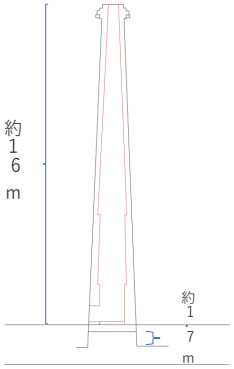
北側窯跡
幅2m×奥行2.5mの規格を中央から２等分するように煉瓦で内壁を設け、２カ所の炉として構築している。

窯跡施設　柱跡

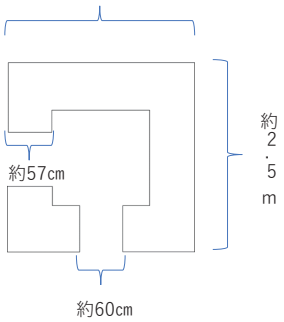


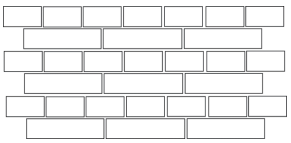
窯跡周辺に柱穴と思われる琉球石灰岩の抉れが3カ所確認できた。

平敷屋製糖工場



平面図





イギリス積

構造

① 底辺面積
横軸約2.5m×縦軸約2.5m

② 高さ
約16m

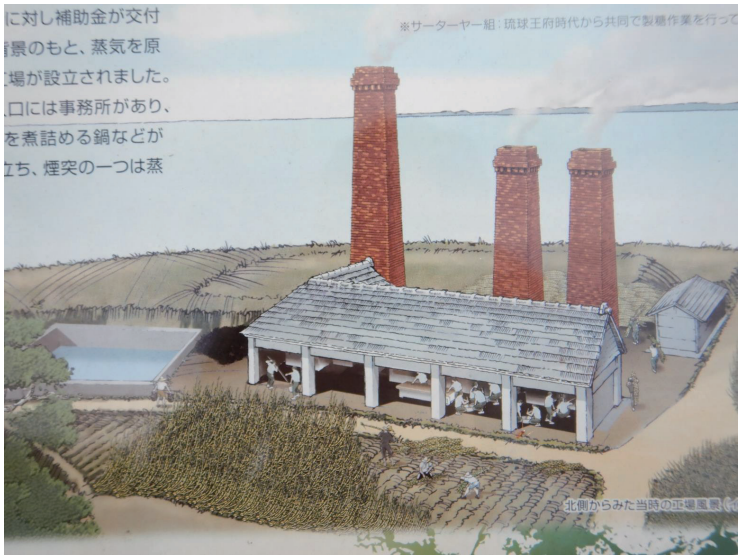
③ 壁厚
約57cm

④ 開口部
東と北の2か所

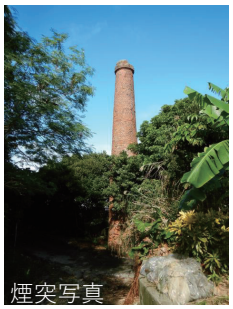
⑤ 材質・工法
煉瓦製・イギリス積み

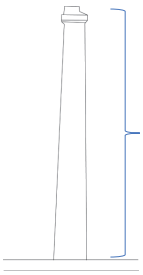
⑥ その他
内壁は段差を付けており上部につれて薄くなる。地下には1.7m程の深さまでコンクリートの基礎が埋められている。

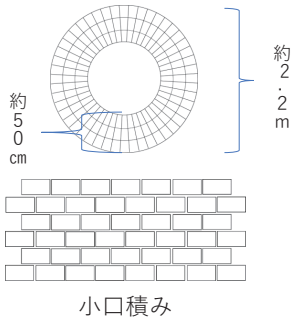
平敷屋製糖工場のイメージ図



宜次の製糖工場煙突跡







構造

① 底辺面積
直径約2.2m

② 高さ
約10.5m

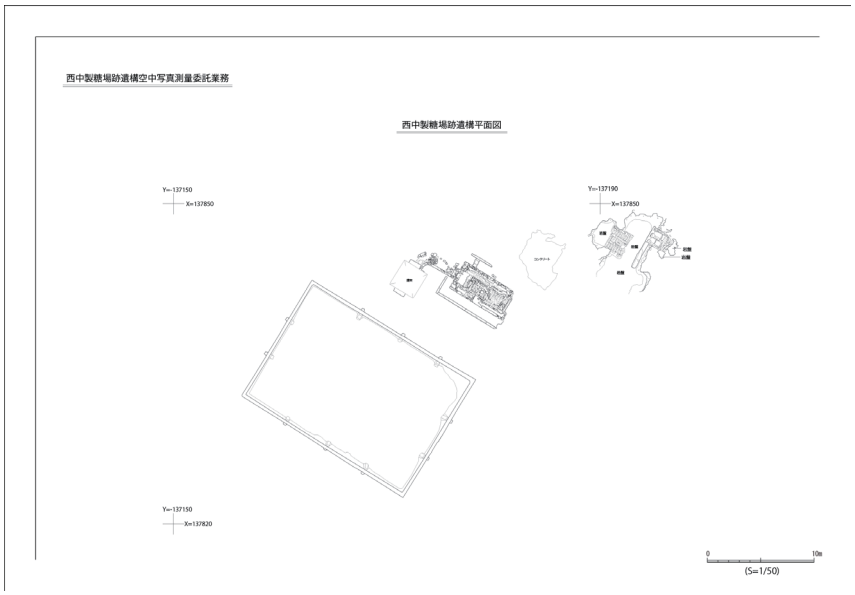
③ 壁厚
約50cm

④ 開口部
埋没して確認できない

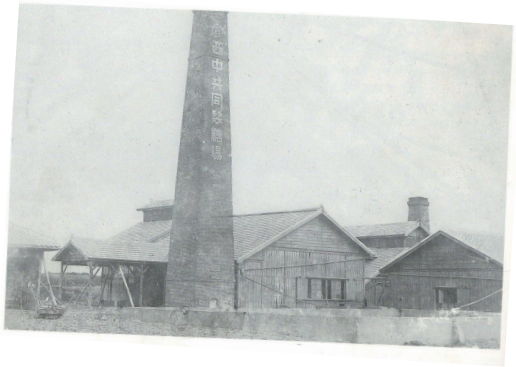
⑤ 材質・工法
煉瓦製・小口積み

⑥ その他
貯水槽やボイラー施設の様な痕跡は現況では確認できない。

旧西中共同製糖場跡地　平面図

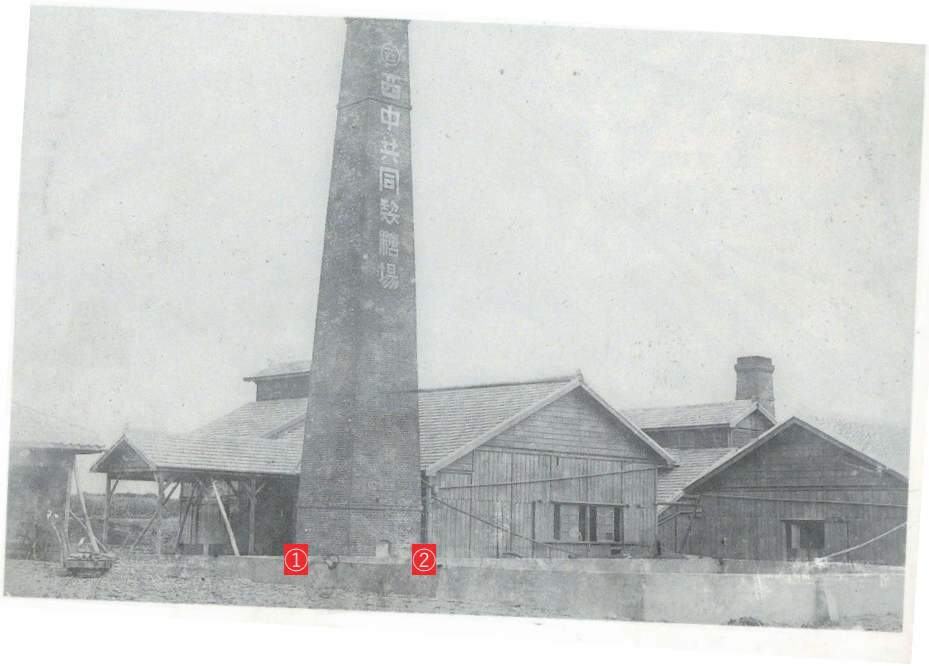


宮国猛氏所蔵の旧西中共同製糖場完成時の写真

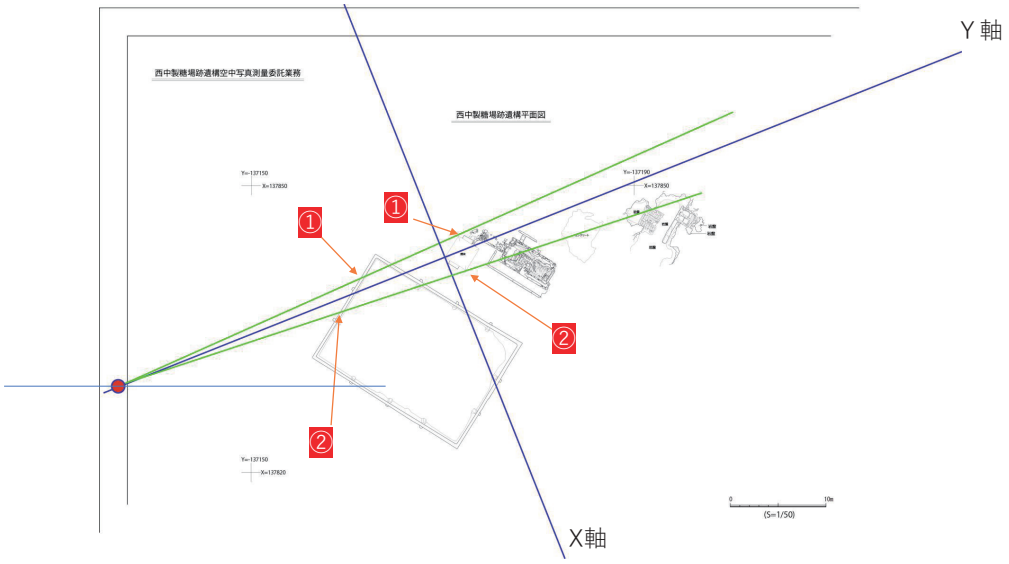


工場正面　写真

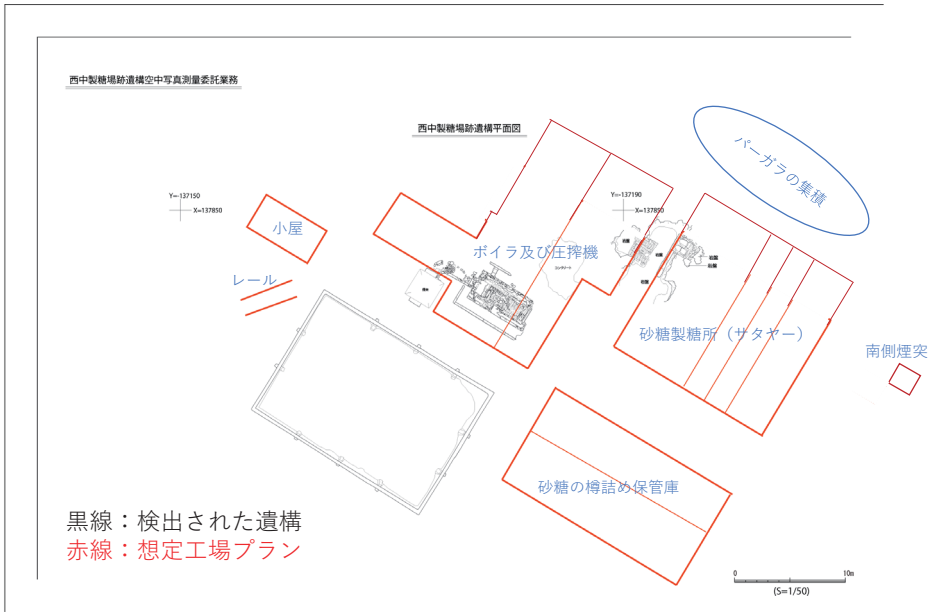
工場裏面　写真



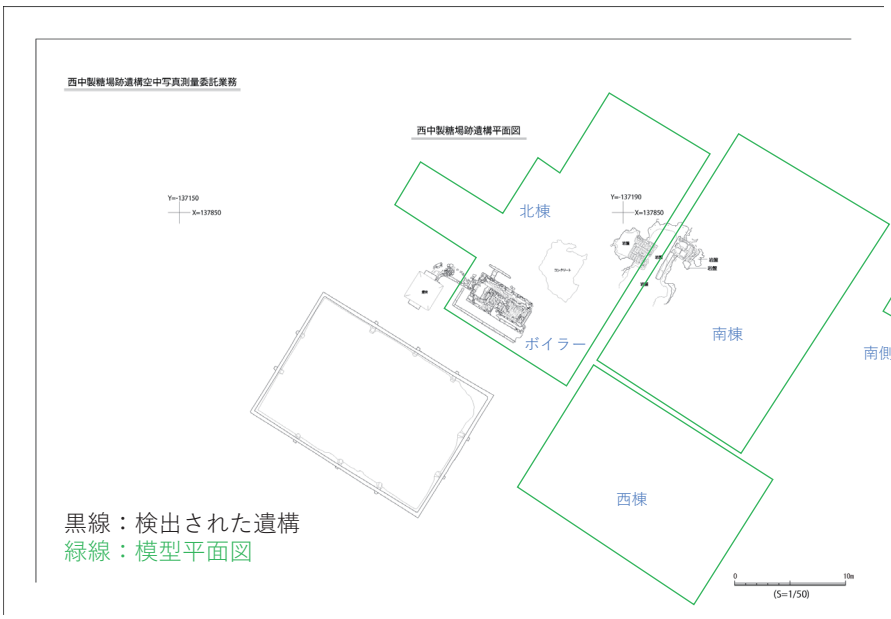
写真からの簡易的な測量方法



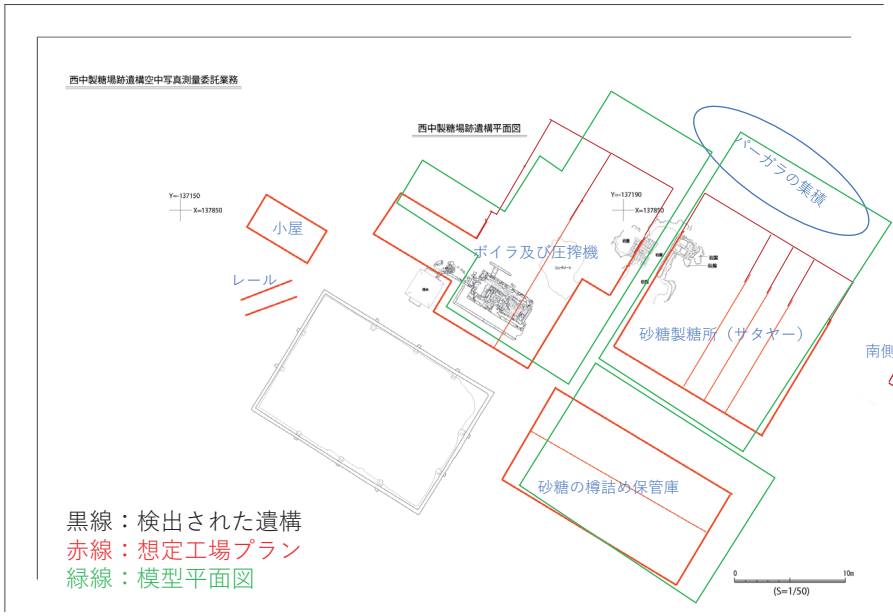
簡易的写真測量方法による工場プラン



旧西中共同製糖場模型による工場平面図（旧西中共同製糖場再現検討委員会）



簡易的写真測量方法による工場プランと旧西中共同製糖場模型による工場平面図との比較



美濃窯業㈱の耐火煉瓦
SKは耐火度を指し、
SK32は1710℃まで耐えられる。

耐火煉瓦・耐火モルタルだと思われるが詳細は不明。

ご清聴ありがとうございました。

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業　第４回　文化講座

令和２年１月 24 日　日曜日

宮古島市未来創造センター　研修室

報告者　久貝　春陽

旧西中共同製糖場発掘調査報告

１．はじめに

国登録有形文化財及び宮古島市指定文化財でもある「旧西中共同製糖場煙突」「旧西中共同製糖場跡」では、令和元年の６月と、10 月～12 月にかけて２回の発掘調査を実施している。

令和元年６月に実施した発掘調査は、劣化が進んでいた旧西中共同製糖場煙突の仮補修工事に伴い、仮補修の為の足場を組むための整地作業で、煙突南側の煉瓦等の集積部分から、規則的に敷き詰められた煉瓦が検出されたことから発掘調査を実施しており、ボイラー施設と思われる煙突と直結する長方形型に煉瓦を用いて構築された遺構が発見されている。また同年 10 月～12 月の２回目の発掘調査は、煙突が所在する地区の圃場工事の掘削時に、煉瓦等の集積物が散見されたことから発掘調査を実施しており、煙突から約十m南に離れ、高低差約 1.5m程下がった位置から煙突同様に煉瓦で構築された長方形型の「窯跡」と思われる遺構が発見されている。残念ながら圃場工事に伴いその遺構は取り壊されてしまっているが宮古島市教育委員会による緊急発掘調査で記録保存がされている。

２．旧西中共同製糖場の概歴

旧西中共同製糖場は城辺字西里添西底原に昭和 17 年に創設されており、工場の建築資材は組合員が漲水港から運び入れるなど並々ならぬ力を注ぎ操業までこぎつけましたが、2～3 回の操業後、戦争による旧日本軍の強制接収にあって操業を中止に追い込まれています。戦時中には米軍機の空襲を受けたとされており、煙突北西の貯水櫓壁面には機銃掃射の弾痕と思われる跡が残されています。戦後の操業は行われておらず、1960 年頃には地域生活環境の安全確保のため煙突の取り壊しが検討されます。しかし、工場設立に苦心した中村清一郎の業績の記念として末永く保存しよう声により、取り壊しは中止する事となりました。

平成 25 年には宮古島の製糖業を象徴する煙突で、県内でも希少な昭和前期の遺構であり、沖縄の景観を形成する貴重な建造物であることから国登録有形文化財（建造物）「旧西中共同製糖場煙突」として国の文化財登録原簿に登録されております。

また平成 29 年には、当該地に農地基盤整備事業が係ったことから、事業が進むと煙突の適正な保存・保護活用が出来なくなる恐れがあるという理由から、煙突と管理道を含めた土地を宮古島市指定文化財（史跡）として指定し、平成 30 年度には土地を宮古島市で買上げ、令和元年度には崩壊して

いる頂上部や、著しく損壊している壁面部分などの仮補修工事を実施し現在に至っています。

３．旧西中共同製糖場煙突の構造

① 立地

城辺字西里添西底原 621-2 に所在し、道路の手前にコンクリート製の貯水槽があり、貯水槽北東側には近接する形で煙突が配置されている。煙突東南側の開口部には煙道と思われる煉瓦を積んだ遺構がみられ、南方向に曲線しつつボイラー施設と思われる長方形型をした煉瓦積みの遺構と繋がっている。

② 煙突

底辺は約 2.7m四方であり、接地面から約 1.8mは垂直に伸びているが、そこから徐々に内側に勾配しており、約 13mの高さで頂上部が欠損している。本来の高さは約 20mといわれている。

煉瓦はイギリス積と呼ばれる煉瓦の大口・小口を一段ごとに交互に積む工法で、煉瓦壁の厚みは約 73 ㎝、東南・北西の２個所にアーチ型の開口部を設けている。内部には上部向かうにつれて 3 個所の段差が設けられており、上に行くにつれて壁厚が薄くなっている。

③ 貯水槽

貯水槽の構造は、長軸 18.8m、短軸 13.3m、深さ 2.4mの規模で築造され、外壁の縁にはセメントに埋め込まれたガラスビンの破片が確認できるが、これは貯水槽内への進入を禁止するための安全対策で行ったといわれています。用途としては工場内の各棟で集められた雨水を集めて貯水し、大型ボイラーの冷却水として使用したといわれています。貯水槽の東・北壁面には空襲時の弾痕と思われる痕跡が確認出来る。

④ ボイラー施設

煙突の南側約 2mの位置に配置されており、煙突東側開口部より東から南向きに湾曲する煉瓦とセメントで構築された煙道と思われる遺構で繋がっている。構造は長軸が 5.7m、短軸が 3.1mと長方形型をした煉瓦製をしており、内部にボイラーを設置したと思われる 4.8m×1.4mの長方形型の空間を設けている。また東壁と西壁には少しでも熱伝導率を下げる為か、壁中に 25 ㎝の隙間を空けて構築しているようにも伺える。南側外壁下部には金属物の付着が見られる事から、南側に燃料（おそらく石炭）供給の入口を設けていたのではないかと思われる。西壁には冷却水をくみ上げるポンプを通すための溝らしき跡も確認できる。

この遺構を更に囲うように 20 ㎝ほどの高さのコンクリート壁面が囲っているが、掘削時に損壊したというよりは構築時本来の高さにも見える為、工場建物の壁面ではないと思われる。

⑤　窯跡施設

煙突から南方向に 10m程離れ、約 1.5m標高の下がった位置に、長方形型の窯跡と思われる遺構が 2 基検出されている。窯跡がある約 3m×約 6mの空間には琉球石灰岩をくり抜いた床面にコーラルを敷詰めて整地した痕跡が残されている。南側の一基は砂礫の上に幅約二m×奥行約二．五mの面積で煉瓦を組み中央から縦に煉瓦で仕切りを配し左右二箇所の炉を作っているような構造をしている。部屋の床面からは大量の炭化物が検出されているため、何らかの燃焼施設であったと思われる。北側の遺構は、幅約 3m×奥行 2.5mで、縦に煉瓦壁を 2 所配し左右中央 3 個所の炉を構築している様に伺える。

４．県内の製糖場煙突跡

①　八重瀬町宜次の製糖工場跡煙突

八重瀬町宜次にある製糖工場煙突は、西中共同製糖場煙突で見られるイギリス積みではなく、中央から放射状に煉瓦をレンガ積み（煉瓦の小口側を正面方向に合わせて積む方法）と呼ばれる工法で積むことで壁面に緩やかなアーチを作り、きれいな円筒状の煙突を構築している。直径は約 2.2m、高さは約 10mの規模で頂上部に向けて直径がやや狭まる。煙突はアスファルト敷きの道路に接地しており、開口部が見られないが、おそらく地面に埋まっているものと考えられる。周囲に煙突以外の貯水槽やボイラー施設などの遺構は確認出来ない。頂上部が欠損しており、煙突壁面には弾痕と思われる穴が空いている。

②　平敷屋製糖工場跡

うるま市勝連平敷屋地域にある平敷屋製糖工場跡は国登録記念物として登録されている。イギリス積みで角柱状に組まれており、隣接して貯水槽も残されている。規格は旧西中共同製糖場煙突に比べ約 2.5m四方と小さいが、頂上部が残されているため、高さは約 16mと高い。上部につれて壁厚が薄くなる段差構造も旧西中共同製糖場煙突と同じつくりをしており、ほぼ同一規格の煙突であると考えられる。『平敷屋字志』には、「工場には三基の煙突が立ち、煙突の一つには蒸気機関（四五馬力）のボイラーが繋がり、燃料には石炭を使用した」と書かれているとされ、ボイラー施設の遺構は残されていないが、煙突・貯水槽・大型ボイラーと、極めて旧西中共同製糖場と類似性が高いといえる。

５．旧西中共同製糖工場の構造について

旧西中共同製糖場には、「城辺町史 2 巻　戦争体験編」の下地長太郎さん体験談の中で、馬車を 4 台から 5 台つなぎ合わせて大型ボイラーを漲水港から運び込んだとの記述どおり、工場内に大型ボイラーが設置されていたと考えられる。ボイラー（蒸気発電機）の燃料はおそらく平敷屋製糖工場とおな

じように石炭を使用していたと考えられ、かなりの規模の水蒸気や煙を排出することからも、煙突と直結する構造をしていたものと考えられる。また同体験談の中で、「煙突は２つあった。砂糖製造する時に煙を出す煙突が南側にあった。」との証言からも、北側の現存する煙突はボイラー施設に直結していた煙突であるものと考えられる。

宮国猛氏が所蔵していた旧西中共同製糖工場完成時の写真には４棟の建物が写されており、工場正面から写された煙突に近接した建物（北棟）の中に大型ボイラーが設置してあったと考えられます。また動力源であるボイラーの近くには動力源を必要とする圧搾機が設置してあったと考えられ、同建物内には、ボイラーと圧搾機が配置されていたと推測できます。写真右側奥の建物（南棟）には、検出された窯跡からも、キビ汁を煮詰めるナベを配置していたと思われる。また北棟と南棟の間には、カマウツ（窯）を配置し、両棟の火力調整を行っていたと考える。工場裏側の写真には同建物の前にキビ汁を煮詰める燃料のバカス（キビの絞りカス）が大量に置かれていることも確認できる。

また体験談には製造した砂糖は樽詰め（タルガー）にしたとあることから、タルガーを保管する倉庫も必要であった事が考えられる。正面写真右側手前の建物（西棟）には薄らと樽らしきものが写っていることからも、同建物には製造した砂糖の樽詰を保管していたと考えられる。

6. 出土遺物

発掘現場からは大量の煉瓦が検出されており、その中で「MINO SK32」「CTB 若しくはＣ下Ｂ」と刻印された煉瓦が検出されている。「MINO」の刻印は美濃窯業株式会社で製造されたもので、「SK32」は耐火度を指しており、約 1710℃まで耐えることが出来るということである。もう一つの「CTB もしくはＣ下Ｂ」が刻印されたブロックについては詳細不明である。

文化講座「発掘調査報告」に関する感想

10 代・20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代　（その他　　）
男性・女性　／　宮古島市内在住・宮古島市以外

１．今日の講座に参加しての感想やご意見をご記入下さい。（回答者：11 名）

・街の表面だけを見ていると気づかない歴史的な品々の様子を聞かせていただき、誠に興味深い講座でした。特に島外者にはありがたいものでした。（70 代男性・宮古島市以外）

・よく調べられた調査をていねいに報告していただきました。（男性）

・初めて遺跡の講座を受けました。昔の人の生活が少しかいま見えたような気がしました。小さい頃に遊んだえんとつのことが知りたくて参加しました。ため池で遊んで大人に注意されました。（60 代女性・宮古島市内在住）

・発掘調査における時間と労力、大変御苦労様です。おかげで宮古島再発見（歴史ロマン）を見聞きできて大変ありがたいです。感謝!!（70 代女性・宮古島市内在住）

・西注共同製糖場跡の報告会を城辺西中部落公民館で開催して欲しい。（福島）

・西中共同製糖場跡へ行きたいと思います。（70 代女性・宮古島市内在住）

・宮古島市の歴史にますます感心が深まりました。西中共同製糖場がこんなに貴重なものとは知りませんで、勉強になりました。（60 代女性・宮古島市内在住）

・宮古島の基幹産業であるさとうきびの歴史についても興味がでました。改めてではあるのですが、あしあらず。（50 代・宮古島市内在住）

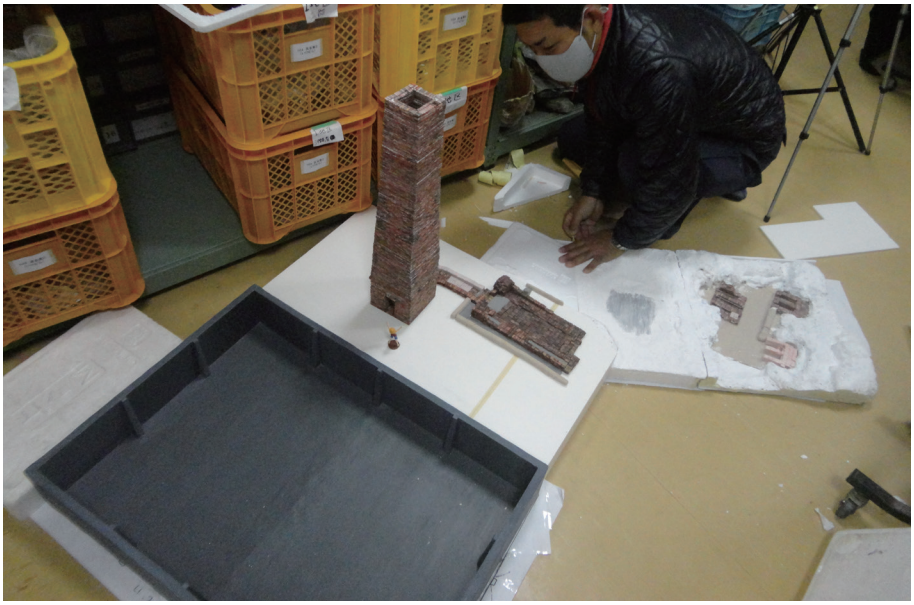
・発掘から当時の様子を考察してゆくのが非常に面白いなぁと思います。献上用の土器の美しさが宮古の人の人情味があるなぁと思いました。（40 代女性・宮古島市内在住）

・大変良かったです。歴史に重要な遺跡がたくさんあることがわかりました。又、関係者の遺跡に対する熱心さが理解できました。できれば発掘場所での現場説明会を開いていただけたらもっと多くの人が興味を持つと思います。ご検討の方よろしくお願いします。（60 代男性・宮古島市内在住）

・宮古の古い産業について知ることができた。西中共同製糖工場が宮古城辺西城にとって、どういう役割があったのかも知りたい。（無記名）

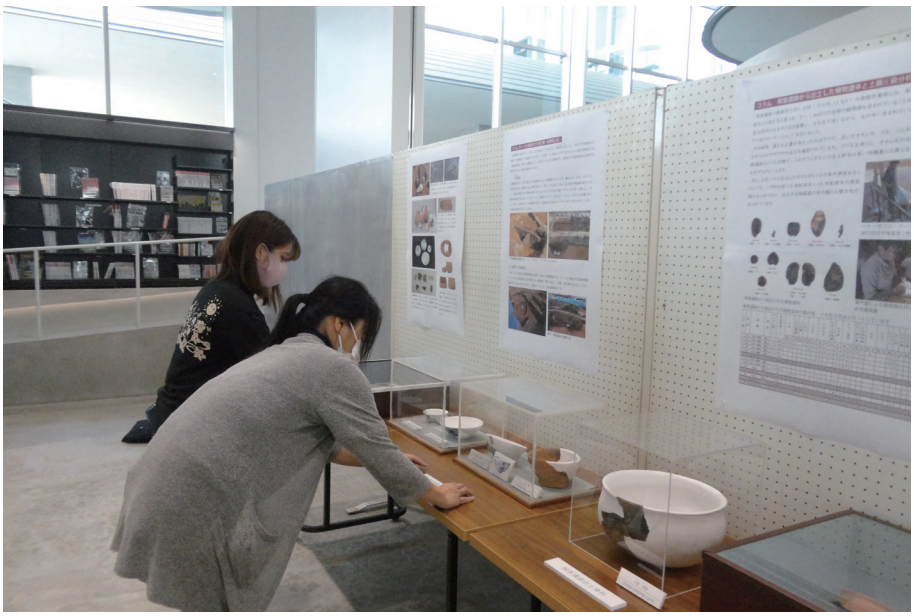
アンケートの内容については、各講座をまとめた記録集の中で、ご紹介させていただきますので、ご了承下さい。

展示資料作成風景
（西中製糖場の煙突の模型）

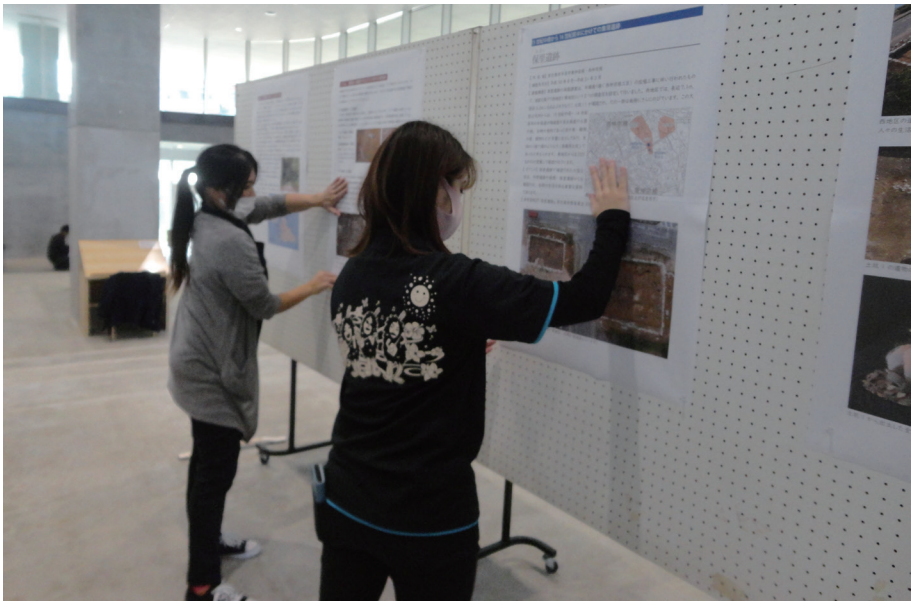


展示資料作成風景
（西中製糖場の煙突の模型）

西中製糖場の煙突の模型の
展示風景
（未来創造センター　ブラウジングコーナー）



展示作業風景
（未来創造センター　ブラウジングコーナー）



展示作業風景
（未来創造センター　ブラウジングコーナー）

未来創造センター　ブラウジングコーナー　展示風景
(2020. 1.19 ～ 29 日)
※新型コロナで県の緊急事態宣言により、26 日で閉展

未来創造センター　ブラウジングコーナー　展示状況

未来創造センター　ブラウジングコーナー　見学風景

未来創造センター　研修棟
講座風景
(2021. 1 .24)

未来創造センター　研修棟
講座風景
報告者：久貝弥嗣
(2021. 1 .24)

未来創造センター　研修棟
講座風景
報告者：久貝春陽
(2021. 1 .24)

未来創造センター　研修棟　講座風景　出土資料の解説　(2021. 1 .24)

未来創造センター　研修棟　講座風景　出土資料の解説　(2021. 1 .24)

宮古新報
（日刊） 〔第三種郵便物認可〕

保里遺跡など調査成果展示

市教委 初出土も、あす講座開催

土製焜炉など数百年前の珍しい発掘物を眺める利用者
＝未来創造センター市立図書館ブラウジングコーナー

市教育委員会生涯学習振興課は未来創造センター市立図書館ブラウジングコーナーで、2018年～19年の遺跡発掘調査での発掘物や資料等を展示している。

市教育委員会の遺跡の調査成果を報告している。

保里遺跡（東仲宗根・西仲宗根）では18年8月～19年3月の間、市場通り線（西仲宗根工区）拡幅工事に伴う調査があり大きな穴（長辺7・1㍍、短辺3・2㍍）が発見された。穴内から、15世紀中ごろ～16世紀前半の中国産陶磁器、宮古島産土器のほか、当時の食糧だった貝、魚・動物の骨、穀物などが多量に出土したことからゴミ捨て場であったと推定した。

ティラフグ遺跡（NTT電波塔周辺）では18年10月～12月の間、民間の建物建設に伴う調査があり、2つの掘立（ほったて）柱建物跡を検出。14世紀前半～中ごろの中国製陶磁器が建物柱穴から出土したことから同時代のものと推定。久貝弥嗣係長によると、宮古島で同時代の建物跡が確認されるのは初という。

西中共同製糖場跡（城辺西西）では19年6月にボイラー遺構が確認されたほか、同10月～12月のほ場整備工事に伴う緊急調査で、新たにコンクリート整地跡と2基のレンガ積み遺構が見つかった。レンガ遺構は北側に幅約3㍍、奥行き約2・5㍍を3つに区画したものと、南側に幅約2㍍、奥行き2・5㍍を2つに区画したもの。位置関係が分かるよう同課で模型も作成し展示してある。

講座は午後1時30分から午後4時まで、定員20人で事前申し込み制。問い合せ、申し込みは市文化財資料室（77・8336）まで。

宮古毎日新聞

市教育委

発掘調査の出土品展示

ティラフグ、保里遺跡など

市教育委員会は建築工事や公共工事に伴って実施した遺跡の発掘調査で見つかった出土品の展示を市未来創造センターの図書館ブラウジングコーナーで開催している。展示されているのは平良東仲宗根の「ティラフグ遺跡」、同西仲宗根の「保里遺跡」、城辺西里添の「西中共同製糖場跡」で見つかった建物跡の記録や出土した陶磁器など。展示は29日まで。24日には同研修室で発掘調査の内容を報告する文化講座が開かれる。

発掘調査で発見された陶磁器などが展示されている＝22日、市未来創造センター図書館ブラウジングコーナー

ティラフグ遺跡はNTT宮古営業所の裏手にあり、今回は建築工事に伴う記録保存調査として実施され、二つの掘っ立て柱建物跡が検出された。建物の柱穴から14世紀前半から中ごろの中国産の陶磁器が出土しており、建物は同時期のものと考えられている。宮古島では、これまで13世紀以前や15世紀以降の遺構は確認されているが、14世紀の遺構は今回が初めてだという。

保里遺跡は県道の拡幅工事に伴って調査が実施され、15世紀から16世紀前半の中国産陶磁器、宮古島産土器が確認されたほか、貝や魚・動物の骨、穀物などが多量に出土。ごみ捨て場のような穴と考えられている。

西中共同製糖場は1942（昭和17）年に設立。44年には旧日本軍に接収されて操業を停止。2基あった煙突のうち1基は戦時中に爆撃で倒壊した。調査ではボイラーが設置されていた跡が見つかった。

市教育委員会の久貝弥嗣さんは「めったに見ることのできないものもある。市民にぜひ見てもらいたい」と話した。

宮古新報

2021年（令和3年）1月26日 火曜日 （6）

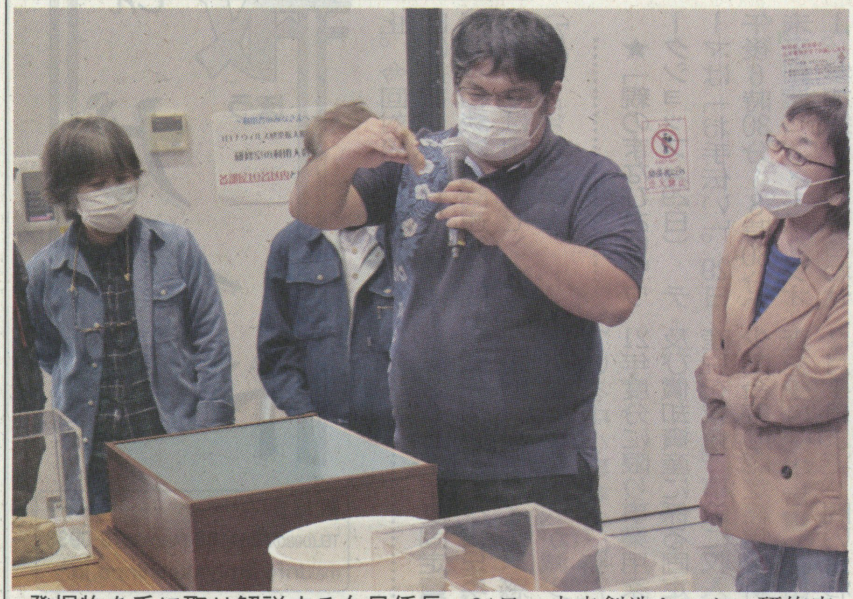
14世紀建物跡など紹介

市教育委員会

島内遺跡の発掘調査報告

市教育委員会生涯学習振興課は24日、未来創造センターで「第4回文化講座 発掘調査報告」を行った。同課の久貝弥嗣係長と久貝春陽主事が、▽ティラフグ遺跡（平良東仲宗根）▽保里遺跡（平良西仲宗根）▽西中共同製糖場跡（城辺西里添）―の発掘調査を報告した。この報告は宮古島市の埋蔵文化財の調査成果を市民に公開する事業の一環で、発掘物などの展示も、図書館ブラウジングコーナーで29日まで行っている。

ティラフグ遺跡は宮古島唯一の14世紀の建物跡で貴重という。久貝係長は「14世紀に宮古島の村々を侵略した与那覇はらという集落があり、ティラフグ遺跡はそれと深い関連があるとの説もある」と話した。保里遺跡からは多量の土器や陶磁器が発掘されており、出土品の展示と解説がされた。西中製糖場跡は2019年の調査でボイラーやカマドの跡と考えられる遺構が発掘されたという。



発掘物を手に取り解説する久貝係長＝24日、未来創造センター研修室

参加した40代女性は「自分たちで使う土器は質素な作りなのに、沖縄へ送る土器はきれいに磨いていたという話に、人間味を感じた」と話した。

また2月13日には「第5回文化講座 宮古島の歴史のはじまりを探る」が働く女性の家ゆいみなぁで開催される。定員20名の事前申込制。問い合わせは市教育委員会文化財資料室（77・8336）まで。

当時の生活様式探訪

市教委　発掘調査で講座

市教育委員会が主催する文化講座「発掘調査展―ティラフグ遺跡・保里遺跡・西中共同製糖場跡」が24日、市未来創造センター研修室で行われた。市教委が2018年度から19年度に実施した3カ所の調査内容を報告した。会場には関心のある市民が訪れ、担当職員の説明に耳を傾けた。

このうち平良東仲宗根で建物の建設に伴う記録保存調査として実施された「ティラフグ遺跡」の調査では二つの掘立柱（ほったてばしら）建物跡が見つかった。建物の柱穴からは14世紀前半～中ごろの中国産の陶磁器（白磁）が出土したと報告。このことから確認された二つの建物は同時期のものであると考えられると推察した。

宮古島における14世紀代の発掘調査例が少ないことを踏まえて説明した市教委生涯学習振興課文化財係の久貝弥嗣さんは「この当時の建物跡の確認は貴重な調査事例となった」と話した。

また、市場通り線の拡幅工事に伴い行われた「保里遺跡」の発掘調査では大きな土坑が確認され、中から15世紀中ごろ～16世紀前半の中国産の陶磁器や宮古島産の土器、当時の食料であった貝や魚、動物の骨、穀物などが大量に出土したことから、「当時のごみ捨て場のような穴と考えられる」と話し、「確認された土坑から当時の生活を知る重要な資料」と紹介した。

関心のある市民が駆け付け久貝さんらの報告に耳を傾けた＝24日、市未来創造センター研修室

令和2年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回文化講座（主催：宮古島市教育委員会）

宮古島の歴史のはじまりを探る

ーツヅピスキアブ遺跡の発掘から何がわかったかー

南小学校に隣接する大原南公園内には大きな洞窟があります。洞窟の名前はツヅピスキアブといい、平成20・24・25年に行われた発掘調査では、約１万年前の地層から多量のイノシシやシカの骨とともに、人骨や宮古島にはないチャートと呼ばれる石を使った宮古島最古の石器が出土しました。

今回の文化講座では、遺跡から出土したイノシシやシカに関する科学分析をとおした宮古島の歴史のはじまりを探る研究成果について講演が行われます。

講師：藤田祐樹（国立科学博物館人類研究部）

日時：令和3年3月6日（土）午後2時～4時半

午後2時～3時：講演（宮古島市未来創造センター）

午後3時～4時半：ツヅピスキアブの見学

場所：宮古島市未来創造センター　多目的ホール

定員：20人（事前申し込み制）

申し込み先：0980-77-8336（宮古島市教育委員会文化財資料室）

・講座受講時には、マスクの着用・手指消毒・検温の実施にご協力ください

【講師紹介】

藤田 祐樹（ふじた まさき）

1974 年生まれ

2003 年に東京大学大学院理学系研究科博士課程を修了。博士（理学）.

2003 年～ 2007 年 東京大学大学院農学生命科学研究科研究員として勤務

2007 年～ 2017 年 沖縄県立博物館・美術館人類学担当（学芸員）

2017 年 国立科学博物館人類研究部　現在にいたる

＜主な著書等＞

『南の島のよくカニ食う旧石器人』（岩波科学ライブラリー）

『ハトはなぜ首を振って歩くのか』（岩波科学ライブラリー）

＜主な研究活動（沖縄県に限る）＞

2011 年 沖縄県立博物館・美術館博物館企画展「骨の科学」

2009 年より南城市サキタリ洞の発掘調査を開始。

2010 年～ 2016 年の石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査。

2015 年 沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展「イノシシとブタと私たち」

2016 年～ 2019 年 国立科学博物館による「3 万年前の航海徹底再現プロジェクト」

『アラフ遺跡・ツヅピスキアブ洞窟・友利元島遺跡 - 宮古島市内遺跡発掘調査報告書 -』（宮古島市教育委員会 2015 年）では、ツヅピスキアブより出土した人骨資料について原稿を執筆し、2021 年 3 月発行予定のツヅピスキアブの報告書においても原稿を執筆。

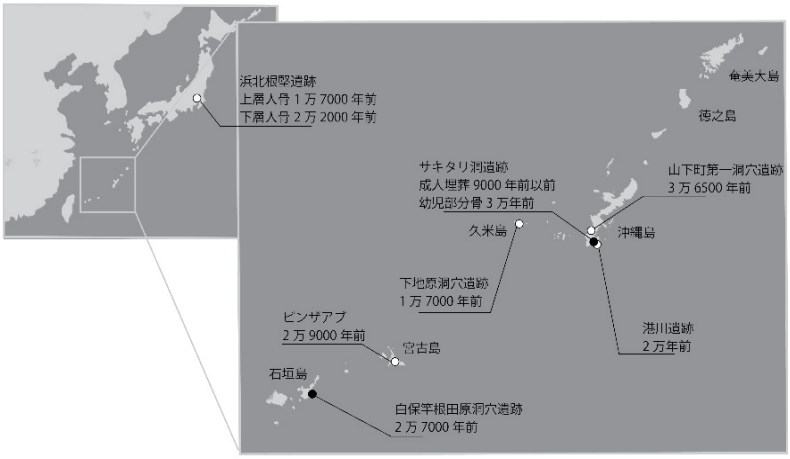
宮古島の歴史のはじまりを探る

―ツヅピスキアブ遺跡の発掘から何がわかったか―

藤田 祐樹（国立科学博物館）

はじめに

日本列島の旧石器時代は、人類が渡来した約 3 万 8 千年前に始まり、縄文時代へと移り変わる 1 万数千年前まで続いた、日本の歴史の原初を飾る重要な時代です。琉球列島の旧石器時代については、約 3 万年前の遺跡は各地で見つかっており、もっとも古い遺跡は 3 万 6500 年前の山下町第一洞穴遺跡（那覇市）ですから、このころまでに人類が渡来していたと考えられます。琉球列島の中でも石灰岩地帯の広がる中琉球や南琉球の遺跡からは、日本列島では珍しく、旧石器時代の人骨や動物骨が発見されています。こうした人骨や動物骨から、当時の人々や生活についてどのようなことがわかるのでしょうか。



日本の旧石器時代人骨出土遺跡

人骨から探る旧石器時代人

中・南琉球の遺跡から発見された数々の旧石器時代人骨の中でも、1970 年に八重瀬町で発掘された約 2 万年前の港川人は、特に有名です。全身にわたる 4 体分の成人骨が得られており、東アジアでもっとも保存のよい旧石器人骨ともいわれています。港川人 4 体のうち、1 号が男性、ほかの 3 体は女性ですが、いずれも 150 ㎝程度と小柄で、肩幅が狭く、腕も細く、上半身がとてもキャシャです。こうした特徴は、少ない食糧で暮らせる節約的な体つきであり、食資源の限られた島環境に適した小進化の結果ではないかと考えられています。実際に、食糧事情は厳しかったようで、歯は強く咬耗し、顎をかみしめるための筋肉が発達していた痕跡があります。港川 1 号と 3 号の脛の骨には、成長不良の痕跡も認められています。

頭骨の特徴に目をうつすと、キャシャな下顎の骨、太くて長い歯の歯根、額が狭く後ろにやや傾斜する特徴的な脳頭蓋の形や眉間部の盛り上がりなど、さまざまな特徴があります。これらの特徴は、縄文人や現代日本人とは異なっています。港川人発見当時の研究で

は、港川人は縄文人や現代日本人の直接の祖先だと位置づけられていましたが、こうした数々の特徴で縄文人や現代日本人と異なるとすれば、この仮説は見直す必要があるのかもしれません。それでは、港川人に似た集団が世界のどこかにいるのかというと、この点も難しく、今のところ港川人にソックリな集団は、ほかの場所では見つかっていません。しかし、下顎の骨に見られる特徴は、東南アジア先史人やオーストラリア先住民に似ているといわれています。

東南アジア先史人との類似性は、2010～2016 年に調査された石垣市の白保竿根田原洞穴遺跡の旧石器人骨でも指摘されています。白保から見つかった人骨のなかで最も残りの良い約 2 万 7 千年前の白保 4 号の頭骨には、頭骨が全体的に東南アジア先史人と似ているとされます。白保から得られた別の旧石器時代人骨からは、ミトコンドリア DNA が抽出されましたが、その研究では B4 という東南アジアに分布の中心があるハプロタイプだったことがわかりました。

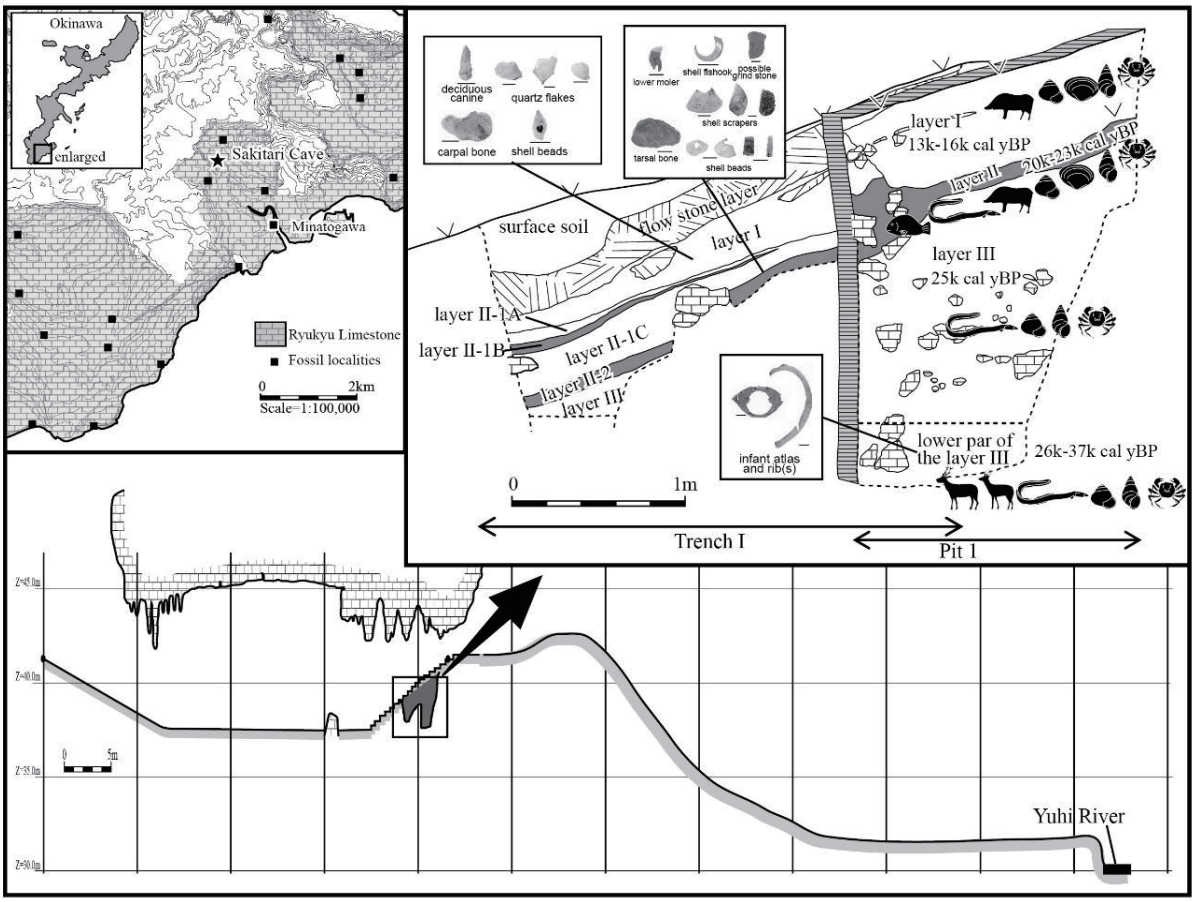
このように港川人や白保人に東南アジア先史人と似た特徴があることは、彼らが、東南アジアから琉球列島へとやってきたと考えると説明できます。ホモ・サピエンスは、約 5 万年前にアフリカを旅だって世界各地に移住していき、その過程で琉球列島や日本列島へもやってきます。その経路は、東南アジア経由だったということなのかもしれません。

サキタリ洞調査で見えてきた沖縄旧石器人の文化と暮らし

人骨発見が充実する一方で、中・南琉球の旧石器時代遺跡からは石器などの文化遺物はほとんど発見されず、当時の文化や暮らしの解明は沖縄旧石器時代研究の大きな課題となっていました。それを解決したのが南城市のサキタリ洞遺跡です。港川遺跡にも近い（約 1.5 km）この遺跡では、2009 年から沖縄県立博物館・美術館が中心となって調査が進められ、3 万 5 千～1 万 4 千年前の堆積層から、さまざまな貝器や食料残滓が発見されました。その中でも 2 万 3 千年前の地層から発見された貝製釣針は、東ティモールのものと並んで世界最古であるため、世間の注目を集めました。この釣針のほかにも、二枚貝で作られた数種のスクレイパー（物を削るための道具）や、小型の二枚貝や巻貝を用いた数種のビーズなど、多様な貝器が発見されました。沖縄島は、地質的に石器製作に適した石材が少ないのですが、サキタリ洞の旧石器人は、身近で豊富に得られる貝を利用して多様な貝器を作るという、島に適した独特の文化を作り上げていたようです。

動物遺骸もたくさん出土して、その大半を占めていたのが、川にすむモクズガニやカワニナです。そのほか、釣針で釣ったとみられるオオウナギや、アイゴやブダイ、タイの仲間などの海産魚の骨も発見されました。島環境では、陸上動物資源は限られていますが、繁殖力の強い川のカニやカワニナ、ウナギ、海の魚などを食糧とすれば、豊富な動物資源を得ることができます。こうした食文化も、島に適した暮らしと言えそうです。

実は、人類進化 700 万年のなかで積極的に魚介類を食べるようになったのは、ホモ・サピエンスになってからだと考えられています。原人や旧人の仲間にも、魚や貝を食べた集



サキタリ洞遺跡の位置、洞窟模式図、堆積層模式図

団が少しはいたようですが、彼らは全体的には肉食や植物食中心であったと考えられています。その中で、ホモ・サピエンスが誕生すると、「かえし」のある銛や釣り針、漁網といった漁具を発明し、魚介類を積極的に利用するようになります。そうした旧石器時代の漁猟文化は、近年、東南アジアの島嶼域で発見が相次いでいます。港川人や白保人が東南アジア経由で来ていた可能性とあわせて考えると、これらの地域から琉球列島までの広い地域に、海域世界に親しみ、漁猟文化や航海技術を発展させた旧石器人が暮らしていたのかもしれません。

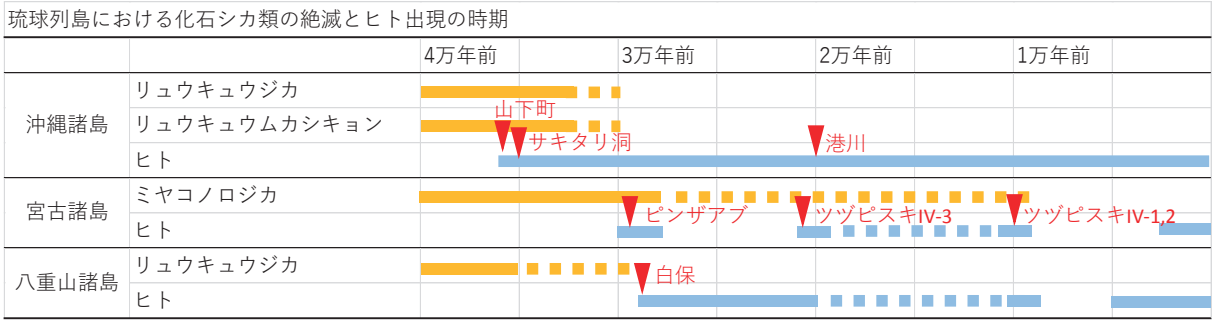
ツヅピスキアブ遺跡の発掘から見える宮古島の先史時代

ツヅピスキアブ遺跡は、宮古島市平良字下里大原地区の丘陵にある鍾乳洞で、南北方向に約 85m もある貫通型の洞窟です。北端の入り口は陥没ドリーネになっており、宮古島市教育委員会の 2009～2013 年の調査によって、このドリーネに設けたトレンチ 3 から、更新世末～完新世初頭の堆積層（IV-1 および IV-2 層）が発見されました。この地層から石器やヒトが持ち込んだ石材、ヒトの歯、魚の骨、多量のイノシシ化石（主に歯）や少量の絶滅シカ化石などが続々と発見されました。年代の特定が難しいなど課題も多くありますが、宮古島の歴史の中で、旧石器時代のピンザアブと無土器期の間を埋める、貴重な発見です。

ツヅピスキアブ遺跡 VI-1,2 層出土遺物のうちヒトに関わる主要なもの

IV-1 および IV-2 層から得られた放射性炭素年代は、いずれもイノシシの骨または歯を材料としたもので、約 1 万年前となっています。これらの地層からは、数点のヒトの歯とチャートや砂岩の石器や、ヒトが持ち込んだと考えられる小さなチャート円礫が確認されました。そして、整理作業を続けるなかで、サメ歯や海産魚類の骨、それに顔料と思われる赤い石も確認されました。詳しい分析はまだ進めていませんが、こうした出土遺物から見えてくるのは、主にイノシシを利用しながら、石材や魚を得るために時々は海に足を運ぶ生活です。宮古島は大半が琉球石灰岩に覆われているため、チャートという石材は限られた地域でしか得られません。今までわかっている範囲では、宮古島の北部や池間島、大神島などにしか分布していません。とすると、ツヅピスキアブで暮らした先史人は、そうした地域まで石材を取りに行っていたと考えられます。あるいは、季節によって資源利用や生活の場を変えていたのかもしれません。様々な可能性を考えながら、今後の研究を続けていく必要がありそうです。

次に考えてみたいのは、シカの絶滅問題です。素直に考えると IV-1,2 層は 1 万年前の堆積ということになるのですが、それでは一緒に出てくるシカ類も、1 万年前に生きていたのでしょうか？琉球列島の他の島々では、リュウキュウジカやリュウキュウムカシキョンといった絶滅シカ類が知られていますが、いずれも 3 万年前ごろまでには絶滅したようです。発掘精度の高い最近の調査に基づけば、沖縄島のリュウキュウジカやリュウキュウ



シカ類の生息時期（点線は推定）とヒトの生息時期を表示し、主要な旧石器時代遺跡を赤で示した。沖縄諸島や八重山諸島では、ヒト渡来直後にシカ類が絶滅しているように見える

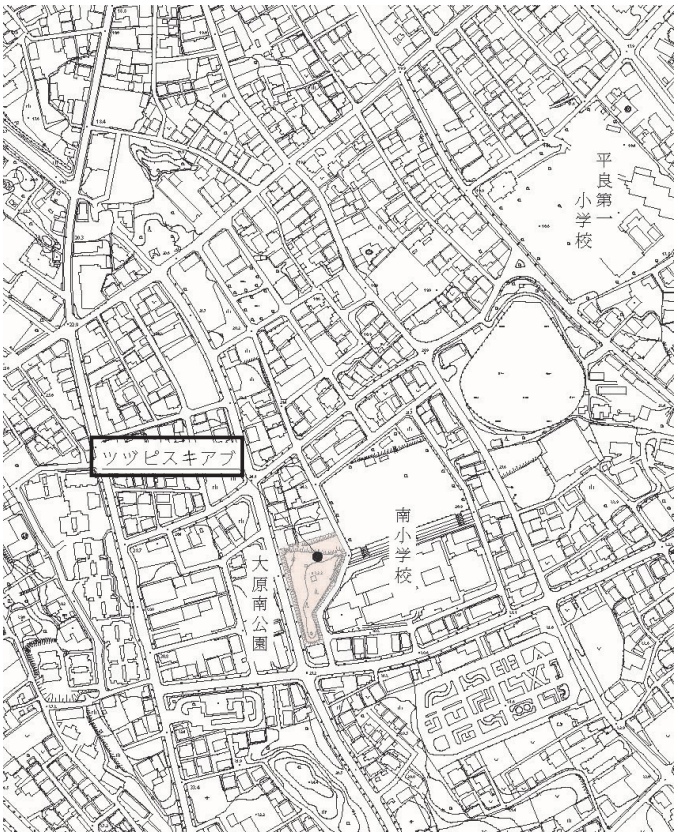
ムカシキョンは 3 万年前ごろまでに絶滅しており、八重山諸島では調査事例が少ないのですが、白保竿根田原洞穴遺跡の旧石器時代の地層（2 万 7 千～2 万年前）からはリュウキュウジカ化石は見つかっていないので、この時代より前に絶滅したと考えられそうです。絶滅の原因は明らかになっていませんが、約 2 万年前の寒冷期に向かって気候が変化するなかで植生が変化して食料不足になった可能性や、人類による捕食の影響もあると考えられています。そうした中で、宮古島の絶滅シカ（ミヤコノロジカ）だけ、1 万年前まで生き延びたというのは、少し不思議な話に思えます。

そこで、化石の相対的な年代を知るためにフッ素含量を分析したところ、絶滅シカはイノシシより明瞭に古いという結果になりました。つまり、今から約 1 万年前に、その当時のイノシシ遺骸と、古いシカ遺骸が堆積したことになります。あるいは、IV-1，2 層が時間幅のある堆積層ということも考えられます。これらの地層の下にある IV-3 層の最上面には、炭の集中する箇所があり（昔の焚火？）、この年代が 2 万 3 千年前であるため、IV-1,2 層は 1 万～2 万 3 千年前の間に堆積したと考えるのです。後者の考えに基づけば、シカ類の絶滅はこの間のはずですし、前者の考えに基づけば、もっと古い時代に絶滅している可能性もあります。これから年代測定を進めて、答えに近づきたいと考えています。

参考文献

海部陽介「日本人はどこから来たのか」（文藝春秋，2016 年）
藤田祐樹「南の島のよくカニ食う旧石器人」（岩波科学ライブラリー，2018 年）
宮古島市教育委員会(編)「アラフ遺跡 ； ツヅピスキアブ洞窟 ； 友利元島遺跡」（宮古島市発掘調査報告書 第 6 集，2015 年）
山崎真治「島に生きた旧石器人・沖縄の洞穴遺跡の人骨化石」（新泉社，2015 年）

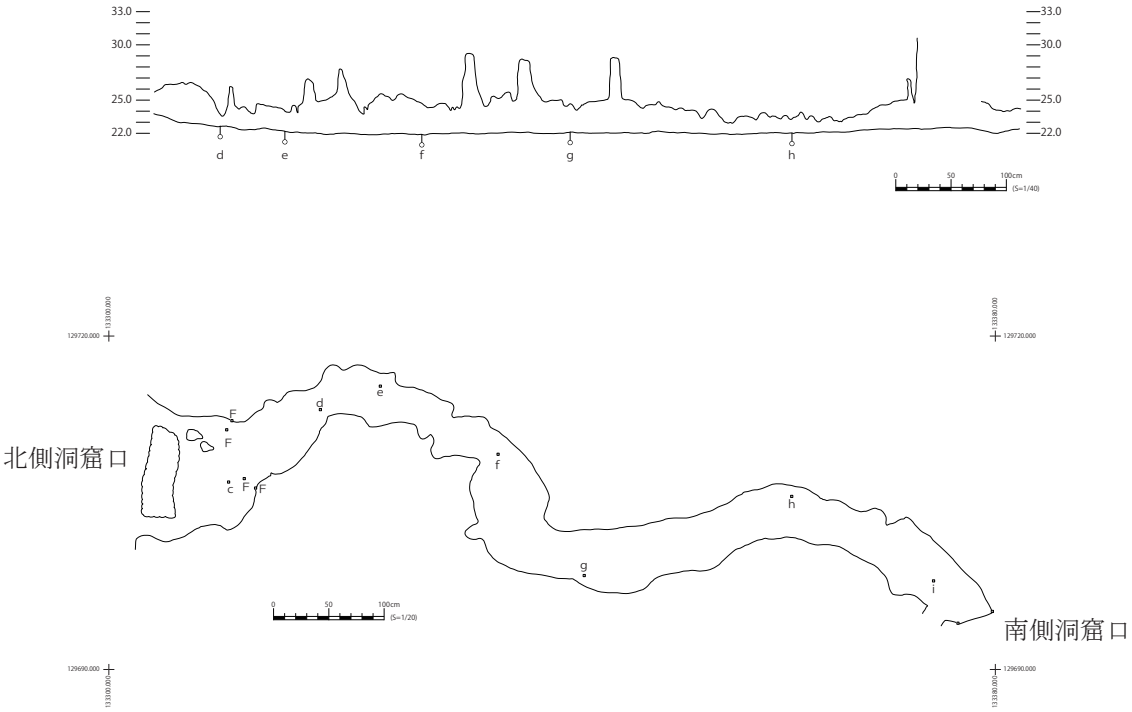
遺跡見学会資料



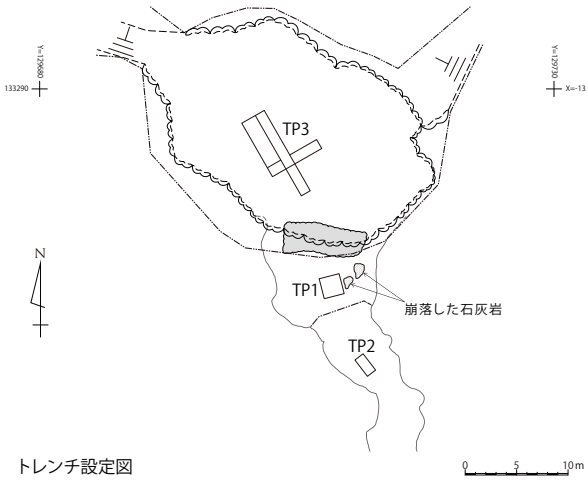
ツヅピスキアブ位置図

公園入口　＊南小学校運動場の向かい側

洞窟の北側入口部分

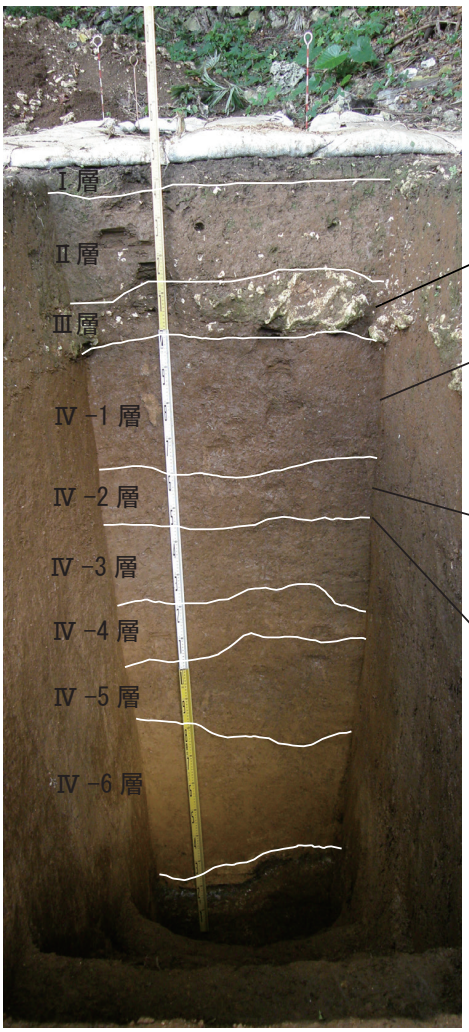


洞窟の平面図と断面図



発掘調査を行った調査区の配置図

TP3 の発掘調査時の作業風景



【TP3 の土層の断面写真】

地層の層名、時代、主な出土遺物、年代測定値などについて、各層序ごとの状況は次のとおりです。

Ⅰ～Ⅱ層：現在から沖縄戦時。沖縄産陶器や薬莢などが出土

Ⅲ層：近世～グスク時代。沖縄産陶器、青磁、魚骨、イノシシ骨が出土。石灰岩礫を多く含む。近世時に造成。

Ⅳ-1 層：完新世。石器、人骨、イノシシ骨、シカ骨、魚骨、コウモリ骨、ネズミ骨、ヘビ骨などが出土。9,536 ± 37BP、8,684 ± 33BP

Ⅳ-2 層：完新世。イノシシ骨、シカ骨、コウモリ骨、ネズミ骨、などが出土。9,290 ± 37BP

Ⅳ-2 層とⅣ-3 層との境目からは、炭がまとまって確認されており、炭の年代測定値は、19,030 ± 60BP、20,687 ± 62BP

Ⅳ-3 層より下の層からは、動物骨や石器などの出土は現在のところ確認されていませんが、Ⅵ層から確認された炭化材の年代測定地は、28,042 ± 133BP、Ⅶ層からの確認された炭化材では、28,535 ± 143 という年代値が報告されています。

＊地層を分ける基準としては、土に含まれている混入物や、土の色調、土の質などを観察して分けています。

グスク時代（約 900 年前～ 400 年前）の地層の下に、約 10,000 年前の地層が位置していることがとても不思議に思われます。その原因としては、近世時にこの場所で何らかの土地の改変（造成）があり、Ⅲ層より下の地層も削り込んだことがと考えられます。

Ⅳ-1 層からの石器の出土状況

石器は礫層（Ⅲ層）より下の層から出土している状況が分かります。

＊写真の左側の白丸の部分が石器の出土地点を示し、右側の写真は出土した石器の拡大写真です。

Ⅳ-1・Ⅳ-2 層から出土したチャートの円礫

加工は見られないものの、宮古島にはないチャートと呼ばれる石が数多く出土しており、当時のヒトによって持ち込まれたものと考えられます。

Ⅳ-1 層の動物骨の出土状況

Ⅳ-1～Ⅳ-2 層からは、イノシシやシカの骨が出土し、特にイノシシの歯の出土が多く見られました。その他、土を水で洗い微細な骨の検出を行った結果、コウモリ、ネズミ、ヘビ、魚骨、サメなど動物骨も確認されました。

＊コウモリは、オオコウモリ属、キクガシラコウモリ属、カグラコウモリ属が確認されています。

＊ネズミは、ヨシハタネズミ、ハタネズミ属、ケナガネズミ属が確認されています。

Ⅳ-2 層の下面で検出された炭化物の集中面

Ⅳ-2 層とⅣ-3 層の境目部分からは、炭化物が多く確認されています。炭化物の年代測定を行うと約 1 万 9 千年前の年代値がえられています。また、明らかにヒトが掘り込んだ穴（TP3・土坑 1）の中からも炭化物が密集して確認され、その炭化物の年代値は約 2 万年前を示しており、ツヅピスキアブにおけるヒトの活動を示す資料として注目されます。

【もっと詳しく】

・宮古島市文化財調査報告書第 4 集『宮古島の岩陰遺跡－沖縄県宮古島市内遺跡発掘調査－』宮古島市教育委員会 2011 年発行

・宮古島市文化財調査報告書第 6 集『アラフ遺跡・ツヅピスキアブ洞窟・友利元島遺跡－宮古島市内遺跡発掘調査報告書－』 宮古島市教育委員会 2015 年発行

文化講座に関する感想　集計

10 代・20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代　（その他　　）
男性・女性　　／　宮古島市内在住・宮古島市以外

１．今日の講座に参加しての感想やご意見をご記入下さい。

・２万年前とかの時代の風景を想像しながら受講でき興味深く今後の報告が楽しみです。（50 代女性）

・大変勉強になりました。学者が研究に傾ける情熱が理解できました。ダーウィンが進化論を導いたビーグル号航海記が現代の日本（沖縄・宮古）によみがえったような感覚で聞いていました。大変良かったです。（60 代男性・宮古島市内在住）

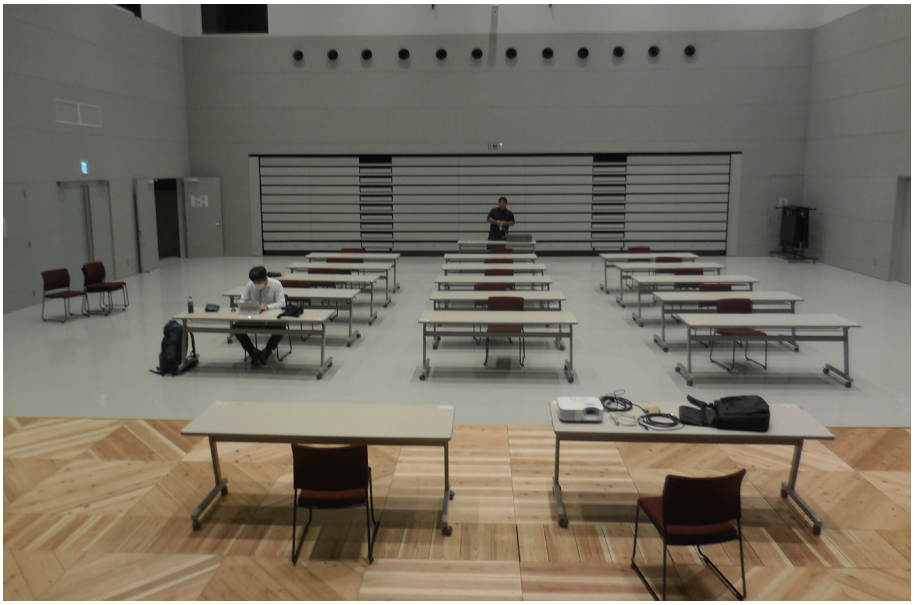
アンケートの内容については、各講座をまとめた記録集の中で、ご紹介させていただきますので、ご了承下さい。

遺跡見学地　事前準備
トレンチ清掃
（2021.３.４～５）

遺跡見学地　事前準備
トレンチ清掃
（2021.３.４～５）

遺跡見学地　事前準備
トレンチ清掃、完了
（2021.３.４～５）

未来創造センター　多目的ホール
講座準備
(2021. 3. 6)



未来創造センター　多目的ホール
講座準備
(2021. 3. 6)

未来創造センター　多目的ホール
講座スタート
(2021. 3. 6)

未来創造センター　多目的ホール　講座風景　講師：藤田祐樹（国立科学博物館人類研究部）

未来創造センター　多目的ホール　出土品の解説

ツヅヒスキアブ遺跡　現地見学
案内：久貝弥嗣
(2021. 3. 6)

ツヅヒスキアブ遺跡　現地見学
案内：久貝弥嗣
(2021. 3. 6)

ツヅヒスキアブ遺跡　現地見学
案内：久貝弥嗣
(2021. 3. 6)

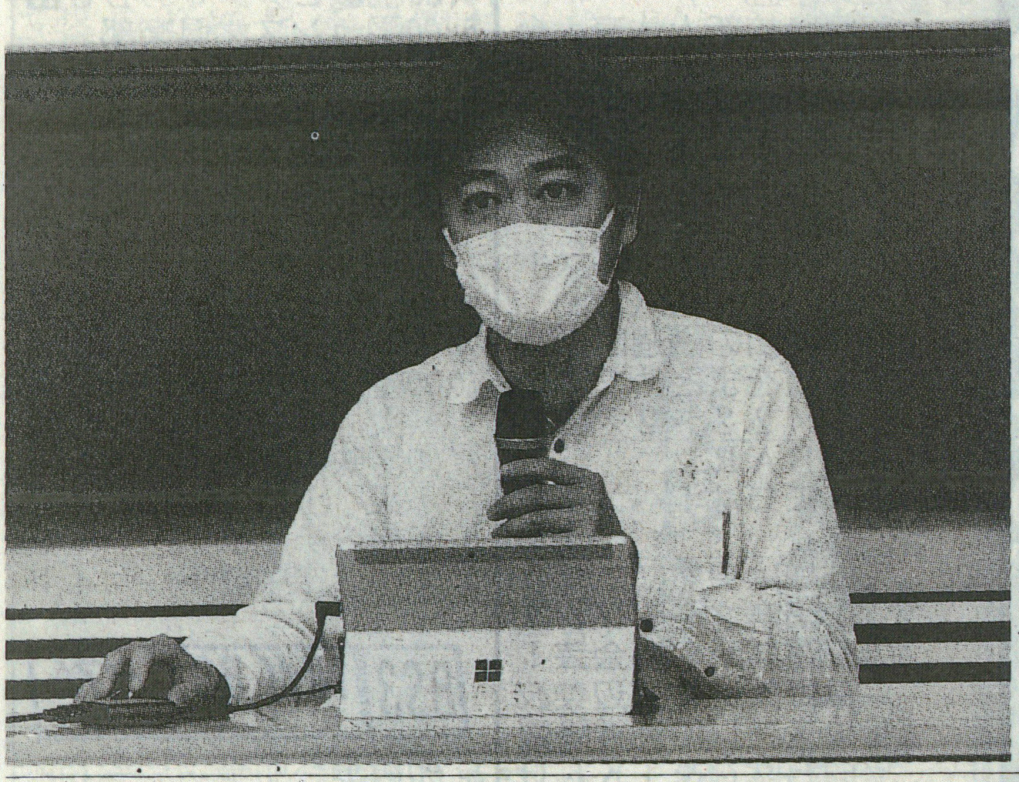
発掘の研究成果で講演

市教委文化講座　ツヅピスキアブ遺跡

平良字下里大原地区のツヅピスキアブ遺跡発掘調査に関する文化講座（主催・宮古島市教育委員会）が6日、市中央公民館で行われた。国立科学博物館人類研究部の藤田祐樹さんが出土遺物の研究成果から考えられる当時の生活の様子などについて講演した。出土した石器や骨などの解説、現地の見学も行われた。

同遺跡は市教委による発掘調査で石器やヒトが持ち込んだ石材、魚の骨、多量のイノシシの化石、少量の絶滅シカの化石などが続々と発見された。藤田さんは「年代の特定が難しいなど課題も多くあるが、宮古島の歴史の中で旧石器時代のピンザアブと無土器期の間を埋める貴重な発見」と述べた。

当時の生活について動物の他にも海産魚類の骨やサメの歯、宮古島北部や池間島、大神島など限られた地域でしか取れない石材が確認されたことから「イノシシを中心に食料としながら、魚や石材を海に獲りに行っていたか、季節によって移動する生活をしていたことが見えてくる」と話し、さまざまな可能性を考えながら研究を続ける必要があるとした。



ツヅピスキアブ遺跡について講演する藤田さん＝市中央公民館

令和２年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業
最新の研究成果に見る宮古の歴史№５
－文化講座資料集・記録集－

発　行　年　令和３年３月（2021 年３月）
発行・編集　宮古島市教育委員会　生涯学習進興課
〒 906-8501　沖縄県宮古島市平良字西里 1140 番地
ＴＥＬ　0980-72-3764　　ＦＡＸ 0980-73-1976